004426−001−6

特13−929

古今名誉実録

春陽堂／刊

M26−27

ACE−0929

特13
929

例言

本編は我國古今の豪雄奇傑偉人君子等總て智仁勇の名譽ある人物の實傳事蹟を詳細記錄し世の後進子弟をして眞に我日本人士たるの元氣を養はしめ義勇高尚の美德を發揚せしめんとするにあり

本編は題して實錄といふ、固より在來の稗史野籍にものする所の妄誕虛構を避るは勿論勉めて正確ならんことを欲し時に徵して證を取り證に據りて實を擧げ實に應じて事を錄するものなれば蓋し大過なからん歟　但し一々辨妄の文を揭げざるは其煩を避るが爲めと又一には本編の趣旨は史傳研究の供用にあらざるを以てなり

本編記事の眼目即ち名譽の要點とする所にして今日の時代に適合

版權所有

古今名譽實錄原稿募集出版ニ付廣告

從來巷間に流布する野史傳記の類は非實を誤ること多く加之故らに異事を撰へ虛誕を裝ひて只管童女俗漢の耳目をのみ悅ばしむることを務め其眞を失ふもの少なからず殊に演劇講談に至りては其荒誕無稽最も甚しく善を誣ひ邪を庇し或は有名無實の人物を揑造し或は甲人の事蹟を採て乙者に附會する等の類夥多にしてあたら名譽者の偉蹟を曖昧たらしむること少なからず又非常俊傑の冒行にして埋沒世に出でざるもの多し今弊堂之を慨して茲に本書の發行を企てたるものなるが正史の徵すべきもの少く其編纂の困難いふ可らず幸に大方諸子發助の光榮を垂れさせ秘書玉藏の內本書の材料に適當たるものあらば乞ふ投寄せられんことを

但し相當の報酬を呈す

相馬飯胤公肖像●朝彥親王御書翰●東久世公願論●黑川中將●鐵舟居士●櫻井純造君等の頒辭

錦織剛清著　相馬家騷動之顚末　闇の世の中

此書は現今繁華取調中に係る明治維新以來一大疑獄と稱する相馬家なる錦織剛清氏實踐の活劇を詳細に記述編纂せられし一種無類の實事譚なるが故に彼の告發事件が一度新聞紙上に掲載せらるゝ栽頓に購讀者の數を增し其賣行き非常の勢にて既に十四版を重し今や拾五版印刷に着手中に御座候然るに本書の壓價かく非常なるが故に世の狡商猾賈此機に乘じて奇利を博せんと本書の類似の書籍を纏々出版あるが其等は多く闇の世の中の記事を拔萃し又は昨今の新聞中より剽竊編纂せし者にして妄說誤謬等多く少しも見るに足らず購讀諸君能々御注意の上世間無類の闇の世の中を御求めあらん事を御注意旁々に謹告す

●當時本書に對し相馬家より告訴中なれど賣捌上には毫も差支なし本書は品切等一切無之何時にても御注文に應ず

發行所　東京日本橋區通四丁目　春陽堂

菊版形二百六十頁英本一冊　定價四十錢　郵稅六錢

特13
929

例言

本編は我國古今の豪雄奇傑偉人君子等總て智仁勇の名譽ある人物の實傳事蹟を詳細記録し世の後進子弟をして眞に我日本人士たるの元氣を養はしめ義勇高尚の美德を發揚せしめんとするにあり

本編は題して實録といふ、固より在來の稗史野籍にものする所の妄誕虛構を避るは勿論勉めて正確ならんことを欲し時に徵して證を取り證に據りて實を擧げ實に應じて事を録するものなれば蓋し大過なからん歟　但し一々辨妄の文を揭げざるは其煩を避るが爲めと又一には本編の趣旨は史傳研究の供用にあらざるを以てなり

本編記事の眼目即ち名譽の要點とする所にして今日の時代に適合

版權所有

古今名譽實録原稿募集出版ニ付廣告

從來巷間に流布する野史傳記の類は邪實を誤ること多く加之故らに異事を撰へ虛誕を製ひて只管婦女俗漢の耳目をのみ悅ばしむることを務め其眞を失ふもの少なからず殊に演劇講談に至りては其荒誕無稽最も甚しく善を蔽ひ邪を庇し或は有名無實の人物を担造し或は平人の事蹟を採て乙者に附會する等の類多にしてあたら名譽者の偉蹟を曖昧たらしむること少なからず又非常俊傑の冒行にして埋沒世に出でざるもの多し今弊堂之を慨して茲に本書の發行を企てたるものなるが正史の據すべきもの少く北編纂の困難いふ可らず幸に大方諸子發助の光榮を垂れさせ秘書玉函の内本書の材料に適當たるものあらば乞ふ投寄せられんことを

但し相當の報酬を呈す

相馬餓鬼公肖像●朝彦親王御書翰●東久世公題詠●墨川中將○鐵舟居士○櫻井純道君等の題辭

錦織剛清著　相馬家騷動之顚末　闇の世の中

此書は現今臨書取調中に係る明治維新以來一大疑獄と稱する相馬家なる錦織剛清氏實踐の活劇を詳細に記述編纂せられし一種無類の實事譚なるが故に彼の毒殺事件の顚末を藍に其皆發者に新聞紙上に掲載せらるゝ哉頓に購讀者の數を增し其實行き非常の勢にて既に十四版を盡し今や拾五版印刷に着手中に御座候然るに本書の整價かく非常なるが故に世の狡商猾賈此機に乘じて奇利を圖せんと來書類似の書籍を續々出版あるが其等は多く闇の世の中の記事を拔萃し又は時今の新聞中より剽竊編纂せし者にして妄說誤謬等多く少しも見るに足らず購讀諸君能々御注意の上世間無類の闇の世の中を御求めあらん事を御注意旁々に題告す

菊版形二百六十頁　定價四十錢　郵稅六錢

●當時本書に對し相馬家より告訴中なれど賢捌上には毫も差支なし本書は品切等一切無之何時にても御注文に應ず

發行所　東京日本橋區通四丁目　春陽堂

せざるもの多し乞ふ其精神を取りて其方術を取るなからんことを
本編は各性質を異にせる名譽美談十數件を蒐錄して一卷となすも
のなれば毫も時代の前後に關せず又每卷配置の順序をも定めず
本編の文躰は通讀し易く又記憶に便ならしめんと欲しなるべく平
易の語句を用ゆ然れども記事の性質異なるに隨つて其筆勢も亦自
ら異ならざるを得ず故に每件必ず同調ならず

目次

（御朱印箱の實錄）大川友右衞門……壯膽……君命を受けて生命を擲つ……一頁
（遊華往生の實錄）法華丈助……義俠……天眼妙力四衆欣仰……十一頁
（加賀騷動の實錄）前田清繼……明達……神も佛もありての功績……十八頁
（土州村吏の實錄）岡村十兵衞……仁惠……身を殺して以て仁を成す……四十頁
（市谷復讐の實錄）奥平源八……純孝……俱に天を戴かずして恩賞を賊く……四十四頁
（遠航商人の實錄）高田屋嘉兵衞……堅忍……我心匪席不可卷……六十三頁
（剌繡奉行の實錄）根岸鎭衞……奇偉……醜夫を惡く者亦美人を惡く……七十一頁
（有職薔伯の實錄）大石眞虎……磊落……眞虎は死して名を殘す……七十五頁

目次

（黒田家臣の實錄）後藤又兵衛……剛勇……勝氣滿身……八十五頁
（盛遠薙髪の實錄）袈裟御前……節操……美しい袈裟で黒染二人出來……百十四頁
（市尹駿州の實錄）矢部定謙……聰敏……淵々たる其淵……百二十二頁
（下僕忠義の實錄）上總市兵衛……誠忠……禍害は人を天に導く梯子なり……百三十一頁
（越前家老の實錄）杉田壹岐……强直……決死は途志の秘訣……百四十四頁
（勸化名僧の實錄）法界坊……精勤……勇猛常精進……百四十七頁

古今名譽實錄

大川友右衛門……壯膽……君命を受けて生命を擲つ

忠本より哉壯なる哉一死以て君恩に報ゆる志操忠なる哉壯なる哉、大川友右衛門は武州河越の城主秋元但馬守の家來にして食祿三百石を賜はり文武に勝れ才智に富み且つ忠義篤實の質なれば殿のお覺へもめでたく家中無二の寵臣にて元は中國の浪人なりしが妹と俱に江戸に來り妹は或る旗本家へ奉公住し自身は秋元家へ事へたる新參者なれど家中のおもわくも甚だよろしく此頃但馬守祈願の筋ありて友右衛門に觀音觀世音への代參を命じたれば若黨中間など連從へ御堂に詣で祈念を凝らして歸途の砂利後龍本の城主細川越中守の召抱へ伊南數馬の中間と友右衛門の中間鎧谷より口論を生じたるに數馬は若黨に命じ中間共を制せしむるに友右衛門も主の代參なれば中間を叱り止め双方事なく鎭まれり其時數馬は此方に向ひ下郎の口論平に御免し下さるべしと慇懃に挨拶するに友右衛門も禮を返しながらに數馬の容姿をながむるに年の頃は十五六歲と覺しく容色勝れし美少年なりしか

ば漫ろに戀慕の念萌し目瞬もせず見詰めたり數馬は事なく治りしに供を促し歸り去る後姿の見へずなるまで友右衛門は見送りて思はず太き息を吐きけるが是より邸に戻りても兎角少年の俤げ目さきをさらず頻りに心動くに今はとて筆にまかして意のたけを細々と記し翌日朝まだきより淺草の觀音堂に至りて待居たり數馬は浩かるべしとは夢にも知らず頓て昨日の如く御堂に來りて一心に祈請をこめ居けるに折こそよけれと友右衛門は轟ろく胸を押しづめ數馬の傍にすり寄て袖の内へ密と艶書を投げ入れ素知らぬ顔して詞をまじへ互に昨日の無禮など詫び友右衛門は戀しき餘に尙ほ種々の話しを仕かけ一足もとめ置ん心なるに數馬はいと迷惑氣に躊躇しが堪へずや有けん失禮ながらお先へと素氣なく會釋して歸り行ぬ斯くて數馬は邸へ戻り己が部屋にて衣服を脱かへんとするに袖の裡より何やら落ちしに取上げ見れば一通の艶書なるにこは心得ず何者の悪戯にやと手に取り見るに宛名はなくして只大川友右衛門よりと記るし水莖のあともいと美事なりける然るにても相手は何者なるにやと思案をすれども是ぞと胸に浮むものさへなかりしが漸くにして心付きしは昨今御堂に出會たる彼の侍こそそれならんと推せしかば若し存じもよらぬ振舞の殿のお耳に入りもせば我身の上の大事ぞと其後は遙かの邸より御堂の方を伏拜みては何事をか祈念しぬ友右衛門は浩かるべしとは少しも知らず明日も拂曉に御堂に至り待てども〳〵想ふ人の影さへ見へぬに扨は主人の用ばし繁忙しく

て明日にや延しけんと其日は戻りまた翌日も何時の如く至りて待ども其日も終日まち明せし甲斐もなきに早や日參の日も滿ちて爰へは來らぬものなるかと思ひながらも亦一日と四五日が程通ひ續けし或日掛茶屋に腰打かけ休らひ居ける其所へ細川越中守供人數多俱し御堂へ參詣せしそが中に太守の傍に付添ひ歩み來るは見まがふ可くもあらぬ彼の少年なれば是はと計りに打驚き細川侯の小性と知れば此上本意を達せんには細川の館へ越に如じ斯なる上は名譽も祿も打捨てたりとて何か厭はんと心を決し先づ主家の暇をとらんと家老までこの由申し出しに但馬守胸に不審り今友右衛門俄かに暇を願ふは仔細ぞあらん余が一應尋ねんと大川を呼出し汝我家に來りしより爰に六年の勤勞を盡し其の忠節余も深く感ずる所にて隨分疎意なく扱ひ來りしに何事の心にそまずして暇をば請ひけるぞとの尋に友右衛門平伏し不肖御當家へ仕ひしより過分の恩祿を賜はり何時は之に報ひ奉るべきの期あらずいかで今より他家に至り二君に仕へるの心あらんや然りながら今度聊か思ひ込みたる存念もだし難し暫しの間御暇賜はり明日にも望のかなひなば再び歸參相ぬがひ御厚恩に報ひん爲には身命をもなげうつ覺悟に候へば當平にお暇願はしふ存ずる旨を述べけるに但馬守も殘り惜しくは思はれど遮ぎるも如何あらんと望に任して暇を遣はし他家へ仕へぬ誓書を出さしめ是より友右衛門は浪人となりて秋元家を出で幾日をか過しける然りながら如何にもして細川家へ入込んものと思慮をめ

ぐらしたれど誓書の手前もあれば祿を受くる事かなはず大に心を苦しめしが頓て大小身の周のものを知己の方へ預け麁服に着かへ肝煎を願みて細川家へ首尾よく中間奉公に住込み組頭より袖助といへる名さへもらひ其後は最と忠實だちに立働きしに朋輩の者も袖助の骨柄大兵肥滿にしていかにも勇々しく普通の者に非ずあはれ亂世にも生れ出なば天晴鎗先にて一國の主とも成りなんものを今の如く心なく泥草履つかまするは惜しきものなりと噂しける友右衞門は何卒して戀人に遇はんものと艱苦を忍び賤しき業に從へども數馬は越中守の寵愛深ければ顏見る事もならずして日を送れり友右衞門の袖助今は手馴れぬ業に身をやつせど自から平凡ならぬ所見ゆるに新參者とは云ひながら中間部屋の上座に居りて尊敬さるゝを却て蒼蠅おもへども何事にまれ問るゝ事は是非を定むるに後には袖助奉行と綽名され下僕共の喧嘩には何時も引出されて判決を爲すに事なくおさまりて後にはさしもに騷がしき大部屋も絶て事なきに至れるを家老より事によせてこの旨越中守に申出しに去る者を下僕に爲し置くは惜しき事なればと侍士分に取立られんとするに友右衞門食祿の義は何分にも御宥免願はしくと辭退す然らば役目のみ申付るとて玄關番になりて兩刀を帶し只管勤を勵みぬ爰に或朝の事越中守登城の日とて辰の刻に供揃を爲し皆玄關先の内外に結び合せ在りけるに程なく大守輿物にうつりしに一同平伏してやをら頭を擡げる機會しも友右衞門は圖らず數馬と顏を合せしが其儘

數馬は輿物に添ふて出行き途中も彼の侍に見覺へありと考へ見るに曩に淺草の御堂にて誓書をおくりしは彼なりしと漸くに察し出したれど然にても變り果たる零落の躰を斷かり居たりぬ又友右衞門は其後機を見て一通の誓書を認め數馬の袂に投入れしを伊南披き見るに切なる想ひは紙に溢れ末に「うとこなよ逢ぬ思ひにくず折て影の如くに成る姿を」と云ふ一首を添へあるに始より由緒ある人と思ひしは僻目にあらず斯も根づよく我を慕ふ志しと云ひ廻れ丈夫の骨柄にもあれば招き寄せ我が一大事をも打明けて頼み見んと返書を認め翌日暮六つを過ぎ我部屋まで忍ひ越さるべし何も其折に申し上べくと書して「また如何に結びかくらむ小車の心の紐は解にしものを」との一首を添へて送りける友右衞門は多年の望み成就せりと胸轟かし一夜を千秋と待わび漸く暮六つ過ぎ數馬の部屋へ忍び行きたれど今更面耻かしく只さし俯向て居けるが斯くてはならじと始終の故を語り出でいと手持なき風情なりしが數馬は頓て形を改め數にも足らぬ某を斯くまでに想ひたまふ事あだ疎かには思ひ侍らず然りながら我もまた武士の家に生れ君の恩に浴しながら不義をなさんは如何にも口惜き次第にて亦御身も通ぱれなる丈夫にてありながら男色の果なき業に身を輕じめ給ふ事よも本懷には有るまじく然れば眞實我を愛し給はゞ我を弟とも見そなはして愛を垂れ給へ然すれば我も御身を親とも兄ともして事へ侍らん果なき契りを結びわづかの不義を樂しまんよりは永く兄弟ともなりなばまた如

何ばかり樂しき事ならずやと道理を盡しての物語に友右衛門も無明の雲霽れ額の汗を拭ひもあへず嗚呼我れあやまてり早や是れにて宿望もはてたれば思ひを翻してこの後決してかゝる事は言ひ出でまじと誓ふに數馬も打悅び互に心解け合て終に兄弟の義を結びけり扨數馬の云ひけるやう我父は伊南十内とて會津の保科肥後守の家來なりしが同家に仕ふる横山圖書と云へる者に殺害され今は倶不戴天の父の敵を持つ身なればと己が來歴より父が横死の事まで悉細に物語り斯く心細き我身の上なればあわれ一臂の力をかし給ひなば此上なき仕合せなりと赤心せめて頼みけるにぞ友右衛門も大に感き扨は大望を抱き給ふ御身なりしか斯く兄弟の義を結ぶ上は御身の敵は我敵なりこの上は決して心を勞したまふなかれ必ず首尾よく本懷を遂げさす可ければ心を泰に措れよかしと最と頼母しくも申しける數馬は不圖も浩かる丈夫の後楯を得て悅ぶ事一方ならず尚ほ兎角の物語の内遽かに客來の樣子なるに友右衛門は狼狽我部屋へ戻らんとすれども人目繁く出る事能はず途方にくれて居たりしが數馬云ひけるやう左な急き給ひそ夜中の來客なれば歸館の程も間もあるまじそれ迄は暫し窮屈ながら是に忍び給へとて長持の内へ友右衛門を隠し置き急ぎ仕度を調へ客間へ出たれど時すぐるまで來客の歸る氣色なきに定めし友右衛門の空腹ならんと數馬は棚に有りける餅菓子三個ほど袂に入れ置き尚ほ饗應を爲し内に如何しけん滿座の中にて以前の菓子轉々と落しにぞ發と討りに赤面し消も

入り度風情なるに越中守には氣色かわり汚なき數馬が振舞かな珍客に對して尾籠言語に堪へたり以ての外なる次第なりと目通りを遠ざけられ明朝まで近侍の者に急度預け置なりとの嚴命に皆々其の威に恐れ數馬を一間に押籠めぬ哀れ數馬は身の過失より斯くなり果て夜明なば手討にならんは必定なり然るにても父の仇をも討果せずやみ〳〵此儘死せん事冥土のさわり殊に友右衛門の身の程も如何あらんと胸せまり涙の袖をしぼりける翌朝御前に引出され昨夜の仔細悉細に述べよとの仰に今はとて數馬頭を擡げ父の最期より友右衛門と義を結び大望の後楯を頼み不時の御客に行方を失なひ部屋の長持に隠し置きし事の顚末を逐一に語り出で我身の過失は是非なけれど人まで卷ぞひに死せしむる事の便なさよと潸然と打泣きぬ越中守一什を聞き大に數馬を稱美し給ひ早速近侍の者に長持を舁出させ蓋取らするに友右衛門中より飛び出で平伏して罪を待ちけるに其時近習の者友右衛門に向ひて委細の趣き言上致すべしとの事に大川愼んで靜かに頭をあげ秋元家に仕へしより遂に數馬に執心をかけ食祿まで打捨てゝ當家の中間とまで成り下りし甲斐ありて漸やく昨夜初めて出會したるに却て道理を説れて戀慕も覺め慮らず兄弟の盟を爲したりと包まず演べけるにぞ越中守も大に其の志氣を嘉し是より家來となして召仕ふべしと案の外なる詞に友右衛門は恰から夢に夢見し如く暫し呆れて居たりしが稍ありて感涙を拭ひ實に有難き御慈悲この御厚恩には命を擲つて奉仕候はん然りな

から食祿の義は假令一合たりとも辭退仕るなり其故は舊主秋元家を出る折誓書を殘したる事を演べたるに越中守巨細を聞き袖助は既に手討したれば大川友右衛門を召抱へん事仔細なし尙ほ心もとなく思ひなば當方より秋元家へ使者を立て書紙を申受くべしまた數馬は今日をかぎり永の暇を遣すゆゑ汝引取りて不便を加へよと殘る方なき計らひは數馬に本望を遂げさせよとの深き惠みと知れたり斯て細川家より秋元へ使者を向け書紙取戻しを申し述べしに但馬守も最と惜みたれど詮方なしと回答しに越中守も大に喜び斯る上はとて友右衛門に新規百五十石を賜はり側役並に昇せしに大川も其の仁惠に感じ身を粉に碎き勤めしかば彌々用ひ厚く其後勘定奉行に登りて三百石となりしに愈々忠勤を勵みける斯て或年の霜月の中澣なりし細川家上屋敷の裏手より出火して折ふし烈しき西風に忽ち大火となり早や一面に火の粉をかぶり曾取もの取あへず立退きける剛氣の越中守途中に馬を控へ家中の火消役人其外の面々に下知を傳へ慶ましく燒け立つ火勢を眺め居しが俄然に驚嘆の面色にてアナ我乍ら過てり餘りの火急に朱印の函を寶藏へ取落せり萬一彼の品燒失せば當家一期の浮沈なりと暫し彼方を見つめて茫然たりしが大川友右衛門遙かの方より馬に鞭うち眞一文字に馳せ來り馬上に平伏し只今火元を廻り檢分致せしに早や御住居向御長屋等は既に燒失し寶藏の邊火勢最も烈んなり然りながら東の方の燒野を馳ぬけて寶藏に近づき御朱印を守り出し奉らんと云ふに越中守も大

に悅び是を勸むるは其方ならでは他になし早やとく〳〵との仰に友右衛門暫しと猶豫を乞ひ一度馬を下り順て馬の四足を濡ごもに包み其身は傍へにありし水桶の水もて全身を浸して後近習の者より料紙矢立を借り何事をか認め越中守のもとまで差出し暫し默然として双の眼に涙を湛へ居るに越中守も友右衛門の心中を察し此の期に及んで何事をか躊躇ゼ包まず演べよとの事に發ど頷づき今御朱印は恙がなく取出し申すべけれど臣が一命は覺束なく是れ今生の御暇乞なり扨愚臣相果てし後は數馬が身の上偏へに御憐愍の程願はしふと無量の思ひを一滴の涙に云はせヒラリと馬に跨りて一鞭加へて其儘火焔の中へ駈込みぬ越中守を始め一同忠義の程を感し煙にまぎれ袞の見へぬまで見送りける友右衛門は火焔をくゞりて火元に至り向ふを屹然見てあるに早や寶藏に火のかゝり次第〳〵に燒延るに斯てあるべきにあらずと無躰に馬を乘入れ藏の側に至りしに馬は果なく烟にむせびて斃れける友右衛門は只管心に神佛を念じ扉の前に近づき見るに錠をおろして容易ひらくべくもなきに滯せし一刀引ぬき漸やくにして錠前をこじ明け觀音びらきを披くに早や中には火の入りしと見へ土扉燒金の如くなるをものともせず押明け庫の內に入りて數多の道具ども放退け〳〵朱印の所在を尋ね當てける函は二重なれば外函のみ稍火の氣を受けしを叩き碎き中なる函を取出し庫の外へと躍り出で一息ほつと吐けるに氣のゆるみにて其場へ打倒れし儘暫し氣をうしなひて居たりしが烈しき火氣に

煽がれ再び我にかへり火焔を踏んで歸らんとするに早や四面猛火につゝまれ立出でべくもあらざれば最早これまでなりと側の地を堀穿ち脇差にて腹掻割き朱印の小函もろとも腹中に捻込み堀たる穴へ俯伏て其盡息は絶へにける忠勇義心の友右衛門は實に細川家再興の柱石と謂つべし斯て越中守は中邸にありて友右衛門の安否を氣づかひしが漸く火も鎮まりしと聞き人を遣はして檢分せしむるに寶藏は既に燒失したりと告げ越せしに扨は大川の力にも及ばざりしかと長嘆せし折しも友右衛門の割腹せし死骸を戸板に載せ舁き來りぬ越中守大川の屍躰を一目見るより漫ろにあはれを催ふし嗚呼我あやまてり豪氣の大川なれば若しや朱印を持歸る事もやと心強くも遣はせしに彼の手にも及ばざりしか然りながら我果なば死躰を改め見よと云ひたりしが念の爲めなれば疵口を改め見よとの事に役人打寄り死躰の疵口より腹中を探ぐるに何やら血に染みたるもの見ゆるに引出して血を洗ひ見るにこれぞ朱印の函にて其盡少しも恙なかりしかば越中守も大に悅び思はず押戴き友右衛門の死躰に向ひて手をつかへ三度默禮し暫しは詞もなく嬉し涙にくれしこそ道理なる去程に越中守は伊南數馬を召出して大川の跡目を賜はり名も大川數馬と改め番頭とせしが數馬程なく敵横山圖書をも討ち其の褒美として又々三百石を加へられ總高六百石となり義兄友右衛門に代りて永く忠節を盡しける

法華丈助……義俠……天眼妙力四衆欣仰

諸人の爲に身を犧牲に供し終に奸徒を捕へ蓮華往生の術策を見破りて愚夫愚婦の迷を覺せし俠客法華丈助は上總國一の宮の者にて平素に强きを挫き弱きを助けて專ら慈悲の心あつく俠名四隣に聞へ人々に親分とたてられ頼まれた事は一寸も後へは退かず義を見ては縱へ火水の中をも辭せぬ俠氣の膽力を身上にして乾兒を多くなづけ天明の世を盛りに過ぎぬ、爰に同じ一の宮に蓮長寺といへる法華宗の寺あり住持をば日秋といひけるが或日一人の旅の僧入り來り案内を乞ふに立出て見れば是れぞ先年日秋の飯高檀林に修行中親しく交りたる養道といへる法師なりしかば大に打悅び是より養道を蓮長寺の客分とせしに檀家の者も養道を敬ひ加持祈禱などを頼みて不思議の功驗あるに後には生佛の如く噂しける然るに此の法師身こそ黑染の衣に殊勝らしく珠數爪ぐれども惡逆無双の奸僧にして當地の蓮長寺を頼り來り爰に又もや惡事を巧み終に數多の人を殺せしこそ不敵の曲者なれ、今この養道の法師となりし起因をたづぬるに安永の末頃久世大和守の家來に馬の師範役を勤むる小泉半右衛門と云へる者あり半之丞とて一人の倅を持ち早や年頃にも成たればよき嫁を迎へんものと思ひ

しうち恰好家中の藏方を勤むる高瀨五太夫の娘お花こそ人並勝れし風姿絲竹の調べより讀書のわざさへ拙からねば五太夫の許へ此の由申し込んものと心に思ひ居たりぬ是より以前に御馬役安達鄕右衞門の方より悴辨之助にとてお花を所望され五太夫は快よく是を承引たり然るに毎年正月十一日久世家には庫開きの式あり是を終りて桃の御殿と稱する庭前にて武藝の試合あり上達の者には祿を增與へらるゝ定にて高瀨五太夫は悴五之助まだ十二歳なれど小性となりて君寵日を追て重なり今歳は武藝の試合を爲し手練の程を顯はすべしとの君命に五太夫は早速師範役の半右衞門方へ留り今度は晴れの場所なるに悴の武藝未熟なれば何卒介添を致し呉れよと只管頼むに半右衞門も快よく承諾せし後に折こそよけれと彼の緣談の事を云ひ出で何卒この事は切に承引給へと望みしに高瀨五太夫は先約もあれば稍返答に困りしが今半右衞門の機嫌をそこねなば當日五之助の爲に不測の災あらんも知られずと子を思ふ心より終に望に應じたるこそ腑甲斐なけれ、是を聞たる安達鄕右衞門は大に半右衞門を恨しかどまた是非もなき次第なれば其儘にすごせし內天明元年正月十一日も來りいよ〳〵御前試合の當日となり五之助は小泉半右衞門の介添ありて首尾よく數番の馬術を演じ殿の稱譽をたまひ是より劔術鎗術の試合となり彼の小泉の悴半之丞と鄕太夫の悴辨之助と鎗術の試合始りしに辨之助はお花を取られたる意趣胸にあれば半之丞を一突にして呉れんと馬を近々と寄せ一聲叫ぶと共

に半之丞の鎗を半空に捲上げしに半之丞も然る者其の儘馬を寄せ無手と引組しが初度の後れに半之丞は勝利覺束なしと思ひしか辨之助の肚を早速の當身に何ぞ堪らん辨之助は馬より眞逆さまに落ち其儘息絶へ取なき最期を遂げにけり是に由て半之丞は御咎を蒙むり其後切腹仰せ付けられしに半之丞は元より覺悟の前なれば聊か悪びれもせず其の心がまへを爲す時爰に久世家代々の菩提所なる下總關宿の法華宗養傳寺の住持日功上人年始の爲めにとて江戸愛宕下の邸へ到着して半之丞の切腹仰せ付けられし次第を聞き助命の事を歎訴せしに殿にもそは一段とよき計らひなりとて半之丞の一命を助け永の暇を遣せしに日功上人も大に悅び關宿の養傳寺へ伴なひ徒弟として名をも養道と改めぬ是れ養道の佛門に入りし因由にして其の後半之丞の養道は修業の爲め飯高の檀林に至り衆徒に交はりて經文の修行懈怠ことなかりしが偶近傍のお菊と云へる娘と契をこめこの事に因りて遂に養道は寺を追はれしに爰に始めて悪心きざし破落戶と語らひ養傳寺の寶物なりし日朗の作なる祖師の像を盜ませ其を拐へて中山の行者と伴り加持祈禱に事を托して諸國を遍歷し種々の悪事を働らきし上に人殺しの大罪をも犯したれど天運いまだ盡きず程經て此の一の宮へ來り遍長寺の日秋が許に起臥せしが是の日秋もよからぬ性質にて何時か養道と諜し合せ遍華往生といへる事を企てぬそは先づ大きなる唐銅の遍華を造り出し往生を望む者を此理へ入れ竊かに其下へ穴を明け鎗もて下より突上げ其

叫び聲の漏れざるやう高らかに讀經をあげ恰かも入寂せし如くもてなさん計略にて兩人の外に同意の者も出來間もなく新たに直徑六尺餘の唐銅の蓮華を造り八間四方の堂をも造築し蓮華を其の正面に備へ一段高き所に祖師の像を飾り用意調ひしかば人を四方に走らせ今度蓮長寺の客僧にて中山の行者と云へる者宗祖の夢想を蒙むり人あつて往生を願ふ時は蓮華の臺に座せしめ經文を讀誦し給へば少しも苦しむ事なくして安々と大往生を遂げ宗祖の導きに依りて極樂へおもむかん事努々疑ふなかれと辨に任して說き歩るきければ然らぬだに宗旨に歸依する善男善女は浩かる姦計のあらんとは夢にも知らず偏へに宗祖の導き給ふ所と妄信し一日も早く極樂へ趣きて無窮の樂しみを受んものと夥多の淨財を喜捨して往生を望むもの日に〳〵殖ゆるにぞ養道等は仕すましたりと得る所の金をもて不義の快樂を盡せしこそ不敵といふも餘りあり扨も當一の宮の俠客法華丈助は商業の事により其所此所に往來し到る所蓮華往生の噂高きが不審き節も多きに必定是れには深き仔細の有る事ならんと丈助寄々心をつけしに彌々これぞ養道等が惡計といふ事を聞出したればこは捨置がたしと早速乾兒の者を集め今度養道か企てたる蓮華往生は金錢を得んが爲め愚民を欺き無慘の最期を遂げさせる奸計にして努正しき法力にあらず然りながら我とても未だ確なる證據を得たるにあらねば叨りには手を下し難けれど左りとて此儘に過しなば罪なき幾百人の人命を斷つに至れば我今より計略をも

うけ容易く惡僧等を生捕り彼等が爲に命を倒せし人々に代り我身を犧牲にしても此の事を成就すべければ御身等は參詣人の中に交り我彼の蓮華の內より躍り出たるを合圖に惡僧等を捕ふべし又雖々は身をやつして竊かに彼奴等が術を行ふ樣の下へしのび行き場中にて我が叫ぶと共に其奴等を生捕るべし我運命つたなくして若しも彼等の毒手に陷いりて果敢なき最期を遂げなば我死骸を申し受けよろしく全躰を改めて雛を捕へ官府へ訴へよかしと殘る方なく手筈を定め是より女房お米に吩附おきし經帷子を着用し懷中へ何やら押かくして蓮長寺に到り養道に對面して云へるやう我いまだ四十路の坂も過ぎぬど年若きより無用の腕立を事とし今にいたるまで夥多の人をも苦しめたる罪今更ら空恐ろしく如何にもして是の罪ほろぼしをせんものと日夜心を苦しめ居たるに圖らず御坊當地に杖を止めたまひ最とも有難き不思議の法力をもて望にまかし大往生の素懷を遂げさしめ給ふと聞き渴仰に堪へずして今只まかり出で御坊の引導を請ひ參らするなりと若干の金を出して願みける抑も此の丈助は元來日蓮宗の堅り信者にて他より法華丈助と綽號さるゝ程の者なれば養道等は今丈助の往生を望むはいよ〳〵我爲の僥倖なりと心中に悅び異議なく承引けり、かくて丈助を蓮華の元へ誘ひ數名の僧徒其の周圍にありて經文を讀誦しこれより往生の素懷を遂げさせん只管題目を唱へたまへと云きけ次に豫て設けの唐銅の蓮華臺に坐せしむ丈助こゝぞと兩眼をとぢ合掌して樣子如何にと

うかゝふこそ危ふけれこれより又々經文を高らかに讀あぐると共に例の通り八葉の蓮華は次第〳〵に丈助を引包みしかば參詣の者ども一同に題目を唱へ隨喜の涙にむせびける斯て義道は殊勝らし氣に衣の袖を掻き合せ皆々に向ひて既に見らるゝ如く丈助は望みし大往生の素懷を遂げしは是れ宗祖の導き給ふ所なりと打陳べ再び蓮華を卷戻さんとするこの時迅く丈助忽ち衝立あがり不敵の賣僧ども其所一寸も動く女我豫てより汝等の惡計たる事を覺りたれども未だ親しくその手段を知らざれば今日わざと賺されたる体にもてなし斯く試みしに案に違はず我尻の下より鎗を以てうかゝふ者の有るに豫て隠し拵たる鎗にてこれを防きたり汝等是まで多くの人々を欺き無慚の最期を遂げさせし大膽不敵の振舞ひ最早この丈助の見破りたる上は今更猥猥さわぎたりとて何の甲斐かあらん速かに罪の次第を白狀して縛目を受くべしと言ひも敢へず躍り出たれば義道はじめ惡僧輩事あらはれたりと打驚き一同其場に腰打ぬかし只眼のみきよろつかせぬ丈助の乾兒等は朕し合せし通り參詣の内より各自に顯れ出でそれ生捕れと罵しりたて忽ち義道等を押へ法衣を引剝ぎ高手小手に縛りあげまた椽の下にありし者をも取て押へ丈助先に立ちて乾兒等前後に付從ひ幾程もなく一の宮の代官所菊地折右衛門の屋敷へ到り悲しく一通を捧げ事云々なりと訴へ出ければ代官は委細を聞き科人を一と通り吟味の上入牢を命ず嗚呼小泉半之丞の義道は惡徒を語らひさしも奸計を運らし不義の金銀を得て

快樂を盡せしも終に俠客法華丈助の爲に惡策を見破られて縲縛の辱しめを受くる事豈に痛まざらんや斯て義道はじめ二十餘人の者ども殘らず斬罪の上獄門にかけられたるは惡の報ひと知られたり其の後法華丈助等は代官所に召出されて大に其の義勇を稱美され是より丈助の俠名いよ〳〵高く其名を傳へ聞き遙々他國より來りて乾兒になる者さへも出で來れりとぞ

前田清繼……明達……神も佛もありての功績

古聖の所謂大姦は忠に似たりとは實に至言といふべし古來奸人が一家或は一國を亂して其惡を逞ふする者を觀るに多くは外面に温厚忠實を衒ひ人をして怪疑の念を懷かざらしめんことを是れ務め暗く々の裡に大逆無道の企てを爲すものなるが然れども天如何でか其惡を遂げしめんや必ず此處に明達察智の俊物を下して大姦を滅誅せしむるものなり、茲に享保寶曆の間に於て北陸加越能三州の領主たりし前田吉德公の陪臣に大槻長次兵衞といへる者あり其身は賤き輕卒なれども常に忠義の志操厚く天性實直にして少しも曲れる事を好まず此長次兵衞に一人の男子あり名を長太郎と呼び性質頴悟順才尋常の少年と異なり幼稚なれども大人の才に勝り平常衣食の粗惡を厭はず貧弱の中に生育なから毫毛も卑劣の擧動なければ長次兵衞心に喜び成長の後は親に勝りて立身もすべき者ぞと殊更に慈愛て育てける長太郎十二歳の春茶道に召出され名を長玄と呼び更められしかば父の喜悅大方ならず往々は御扶擢を蒙りて御側役と成る期もわらんかと心の中に樂みて己れが年の老行くをも打忘れつゝ只願長玄の成人をぞ待居ける扨も長玄は召出され其日より勤仕少しも怠らず且つ暇ある時は手

跡學問又は弓馬鎗劍の技を學びけるに元來其志操の亭ら成るより熟練の功月を追ふて進み其行跡も又新たに成しかば吉德公深く愛せられ茶道乍らも側役と同く召仕はれける、享保十八年長玄十五歳の時父長次兵衞及び母をも亡ひ孤獨の身と成りしより吉德公の御憐み益々厚く其後は江戸表往返にも必ず召連れ玉ひしとなり斯て長玄は少年よりの志操聊さかも撓まず元文三年早二十歳に及ぶと雖も曾て酒色に觸ず只管心を勤務に委ねて他事なかりしがフト一夜讀書の折り晉書桓温の傳を讀み大丈夫芳を百世に流す事能はずんば臭を万年に殘すべしと歎ぜし章に及んで忽ち心動き稍沈吟じて居たりしが手を以て机上を磕と打ち嘗くも男子たる者は厥心ざし斯くの如くなるべし我不肖なりと雖も若し亂世に生れて諸々の英雄と交はらば必ず大國の公となるべし若し其事成らずとも一城の主と成るは容易なり然れども今四海太平の秋なれば其能量を施す所なし加之ならず我が素性賤しければ身終る迄心を盡し勤勞なす共僅か二百石の小役人より上に出る事能ふまじ竟に桓温が笑ひと成りて朽ち果てんこそ惜けれと鬱々として心樂まざりけるが忽ち意を轉じ今我が云ふ所は常に守る匹夫の諺言なり當家諸臣の職を受くるは各々家格の高下によりて定る處ありと雖も人に越へたる奇功を立てなば假令卑賤の者なり共又人に過ぎたる扶擢を受んは必定なれば徒つらに斯てあらんよりは智慮を運らして衆出の効を顯し君の信用を求なば往く〳〵國の政事に與る身と成る間敢にも非ず其時に

當つて寵を固ふする術を用ひて君の志を迷はせ國政賞罰を心の儘に爲ば名は臣下なるとも其實は三州の君たるに同じ是れ乃ち桓温が志操にも恥ざる所なりと忽ち貞實の操を棄て姦惡の意を逞しふし陽には益々篤實温行を表はせども心の裏は只顧爵祿を貪ぼり憎むべき謀計をのみ運らしける、斯て元文四年十二月廿五日領主吉徳公江戸に在りて忘年の宴を開き江戸詰の老臣を召して酒肴を賜はりける此時長玄獨り笑しつゝ今日ぞ我計策を施すべき時なりと前後に心を配り其隙を窺ひ居たりしに今しも吉徳公の御前へ出す椀物を持ち來れり凡て膳部は定式の如く諸役人の試驗を經て夫より配膳方運び來りたるに長玄御膳を受取り燭の下にて改むる形にて竊に袖の内に匿し持たる毒藥を手捷く汁椀の中へ入て遽敢く配膳方を呼び御膳妄りに差上難し熟と御試驗ありしやと問へば此方は不審き容躰にて定式の如く夫々諸役人相改め候なりと答ふに長玄少し聲を揚て凡そ食物に毒を加ふれば其色を變じ汁の類ひは泡を生ずると承まはる然るに此御汁の中には正しく毒あゝと覺へ候能く御點檢あるべしと差出せば配膳方は形ちを正し亀忽の詞も事故に寄るべし御膳番毒味役再三點檢を經て調進なしたる御膳に何ぞ毒の有べき謂れあらんと答へ夫れより双方大激論となり結局論より證據彼の膳部を御前に於て某し共御毒味を仕つらんとて御膳の汁を四ッに取分て島宅兵衞木村傳太夫森金太夫民谷宗十郎四人の者飲み下し暫時樣子を窺ひ居しが別に何事もなければ一人席を進みて云やう御膳部に別儀これ無き樣子御見屆下されし上は亀忽にも最大切の儀を申し憑候儀故長玄を私し共四人の者へ下し置かれ候樣偏に願ひ奉つると詞の未だ終らぬ内に四人の顏色は俄かに變じ目を見張り齒を嚙しめて苦痛を覺ゆる形狀なれば一座の人々是は如何にと見る内に早四人の者は一同に面色土の如く變じ呀と叫びて手足を震ひ身躰輾轉なすと等しく目口鼻より出血し空を掴んで死したりけり、此有樣を見てありし輩は恐れ驚き其席を避るもあり偶々殘り居たりし者も目を止めて是を見し者無りけり斯て此騷動の實況に吉徳公も大ひに驚愕き諸士に對ひ大槻長玄御膳部に毒有りと申し出し配膳方と爭論に及び其眞僞分明ならざりし處今斯の如く變死致したれば果して膳部に毒有りしに相違なし是は必定其根元無くして叶はじ汝等速かに不臣の族を探索すべし我計らずも危きを免れしは全く大槻長玄が功にあれば恩賞として五百石を與へ側役に拔擢て膳部の點檢を兼掌とらしめんと思ふは如何に汝等は異論無きやと在りければ何れも長玄が顯悟の働きを感稱せし際なる故に詞を揃へ御賢慮の如く然るべしと申上げれば吉徳公は大槻長玄を召して右の旨趣を命じ給へば長玄は君恩の深きを謝し奉つり有難き由御受をなして御前を退き心に笑を含みつゝ翌日より元服して名をば大槻傳藏丙藏之丞と改め專ら膳部點檢の事を司どり晝夜精勤なし居たりしは大膽不敵のしれ者なり偖も御膳部毒藥の變事により老臣の面々翌日出仕し事の旨趣を聞糺して紙面に委しく認め急使を以て本國

に通知し置き尚も不臣の族をば吟味の評議に及びけれども誰一人大槻の所爲と知る者なければ更に其手掛り無かりけり、斯て急使は夜を日に繼て急ぎし故漸く同月廿八日に本國金澤城へ到着し彼の菅翰をば差出せしに詰合の老臣大に慌愕き是只事に非ず迎急ぎ諸老臣を招きて評議しけれども是亦區々の説のみにて大槻を疑ふ者とてはなかりけり、此時前田土佐守清繼一人は如何なる思慮のありたるにや始めより一言も發せざりしといふ、斯て吉德公は毒藥者の主謀を探り索めらるゝも未だ其實分明ならねば日夜鬱々として樂み給はず熟々思慮ありけるは萬乘の國其君を弑する者は必ず千乘の家千乘の邦其君を弑する者は必ず百乘の家也との聖語の如く斯る時節となりし上は譜代古老の者なりとも其意測り難し獨り大槻傳藏は其身の生れ賤しと雖も幼少の時より身命を捨て上を思ふ節操あり今般の變事も彼が手より看破したるにて年來の忠誠感ずる所なり今に方つて予が腹心任さん者は彼一人より外になしとて前に五百石を與へし上なほ翌年正月一日鏡開きの嘉儀に際し更らに祿千石を增加し側役人を命じける、斯て元文五年の半過て吉德公歸國の間近くなりければ大槻傳藏も熟〻思慮を運らしけるは我一時の謀計を以て君を欺き寵愛を得ると雖も金澤には七家の老臣を始め深き老智勇の臣下數多有れは我が密計を疾くも覺り君の心を轉ずる者ある間敢にも非ず然る時はこれ迄盡せし謀計も皆齟齬とならん豫じめ未然を防ぐの設備なくんば有べからずと種々の奸計を凝らし

在國の諸士を殿に疑はしめ己れが忠義なる躰を裝ひけり、話し變りて吉德公は仁智の君にましますなれども色に耽るの癖あられければ姿色勝れし良家の處女を需めて數多の侍女となし給ふ其中にもお菊お貞といへる兩女は別して寵愛を蒙りて去ぬる元文三年の春兩女とも男子出産ありしかば吉德公の喜悅斜ならず兩女を直に側室と稱へお菊の方お貞の方と名付給ひ數多の侍女を附て加賀江戸の兩所に交る〳〵置き玉ふ今年はお菊の方江戸にあり元來兩女同月の姙娠なれどお貞の方は二月二日の出産にてお菊の方は二月七日の出産なり然てもお貞の方は國に在て其報知未だ江戸表へ達せざる先お菊の方出産ありし事なれば最早將軍家へ御屆ありし上の事なればお菊の方の産みし嘉三郎を次男としお貞の方の設けし勢之助を三男と定められしかばお貞の方是を口惜く思へ共報知の遲くなりたる故なれば誰を恨むべき樣も無ければ其事を色にも出さず只平穩にありけるに吉德公此頃は又花野といへる侍女を抱えられ是を專ら寵愛なし玉ひてお貞の方寵大ひに衰へ酒宴の席抔へは召るゝと雖も閨中の事は曾て無かりしゆえお貞の方只心に恨み歎きて光陰を送りける斯くて既に延享一年となり嘉三郎勢之助早五歲と成りたれば十一月の中旬に至りなば袴着の儀式あるべしと大槻傳藏フト考へ兩子の袴着の事を申し上げしに吉德公には眉うち顰め予熟〻考ふるに多くの男子ありて夫々封祿を分ち與ふるは外見は良しと雖も本家の食封減じて子孫の爲めよからず故に次男嘉三郎は嗣子宗

辰の控へとなし其餘勢之助を始として以後男子幾人出生致す共皆少祿を與へて家臣同樣たるべしと
瑠て意を決したり然れば幼少無智の時より瑠じめ貴賤の隔てを定め置かざれば成長の後爭ひの端と
もなるべし因て今般の袴着の式も嘉三郎は佐渡守の式禮の通り江戸に於て執行ひ申すべし勢之助は
本式の半減にして成る丈質素に計ふべしとの仰を受て傳藏は次男嘉三郎殿袴着の禮式の事を江戸の
役人へ申し送り又國許にては十一月朔日に三男勢之助殿袴着の禮を執行ひ衣服の類又行裝に至る迄
甚しく麁略にて大國の諸侯の庶子に似るべくも非されば也貞の方は此事を見聞し口惜き事先に百倍
し其身の行末數々思ひ廻らして遣るせなきの餘り我を吹擧せし老女藤枝と云へるを密に招き勢之助
殿御事正敷御次男に生れ給ひ乍ら國と江戸との隔たりにて報知の後れしより竟には御三男となり給
ふさへ痛は敷に末々は御家臣の列に加へ給はん迚今般の御袴着も嘉三郎殿と万事其品を分ち給ふ事
眞に口惜き次第なり左れども既に御三男と定め給ひし上は嘉三郎殿の上に立給ふ事は恪はず共切て
は肩を並べ給ふ御身と成り給ふ樣君へ御歎き申し上んと思へ共今は花野を御寵愛厚く妾を召るゝ事
もあらねば御歎き申す其機無く明暮心を痛むる許り御身思ひ寄り玉ふ手術もあらば教へ給へと涕を
流して云ひけるにそ藤枝は聲を低ふして云ふ迄もなく其方は我身が吹擧せし身なれば勢之助樣貴き
御身と成り給はゝ我が爲にも悪からじと瑠てより其事心に懸け候へ共御表の事に關る身にもあらぬ

ば計ふべき樣もなし此上は今專ら御寵愛深き大槻傳藏殿に御憑みありなば此事必ず成就すらんと是
より兩人共に計りて或日密に大槻を招き色仕掛にて勢之助の身上を頼みけるそ大槻は面を和らげ御
心中は瑠て推察致し居れり然し乍ら勢之助殿御事は今こそ斯くはあるとても正しく君の御胤なれば
嘉三郎殿と肩を並ぶる御身なるは勿論假令家督を嗣ぎ玉ふとも誰か誹議する者あらん我又勢之助殿
の御事には少しく思ふ仔細もあれば緩々思慮を廻らして一臂の力を副へ參らせん必らず焦慮なし給
ふなとの詞ばに兩人大ひに喜びて安心せしこそ尤もなりけれ、傳藏は勢之助を立て已れ一人權勢を
執らんと意茲に一決し其上也貞の方の妖艶に迷ひ是より後好機會あれば互ひに密會して事を謀れど
も素より老女藤枝が計ふ所なればお貞の方の侍女三人の外は曾て知る者なく其年も暮れて翌年夏に
至りしが或日お貞の方竊に傳藏を招きて呼きけるは今年も早半ば立ち大殿御出府も程近し然すれば
卿にも江戸に赴き玉ふなるべし假令彼地に移り玉ふ共頼み參らせし一儀必ず打捨玉ふなと云ひけれ
ば傳藏答へて此儀は兼て云ふ如く我今君の鴻恩にて重役を務ると雖ども元と卑賤なるが故に寵を憎
む者尠からず嗣君宗辰公の代となれば如何なる讒間に遇ひて祿を失ひ身を辱しめられんも知るべか
らず此故に御身の設けし勢之助殿を取立て君と爲ば其愛も更にあるまじ是素より我望む所なれば聊
か麁略に思ふべきに非ず然れ共我君は一旦思し召立れし事を變じ給はざる御氣質なれば迂濶には計

ひ難し必らず急ぐべき事に非ずと云ければお貞の方は大ひに安堵し互ひに密計を談じける、是より大槻は吉徳公に隨ひて出府の後種々の姦智を廻らして吉徳公を欺き「以後勢之助身分處置の儀は其方に任せ候間心置きなく取計らひ申すべき者也」との書面を得て尚も隠謀を企てける、斯くて延享四年となり吉徳公には江戸在勤の日數畢り五月上旬國許へ出立あり此時も大槻傳藏を隨へ騎馬にて旅行なし給ひ日を經て姫川に差掛りける是より先大槻傳藏は國許なる貞の方より傳藏へ送る密書を中途にて奪はれ事既に露顕に及ばんとする事ありし時に奸智の辨舌を振ひ君を欺き誓く其難を免れしと雖も傳藏つら〳〵考ふるに殿歸國の上は定めて吟味の事嚴重に命じ給はん其際は本國に明智の者在て事の顯れんも量り難く勢之助身分のことは我に任せ給ふとの御證言は取置きたれ共是迚も此身吟味に遇ふ上は所詮事の成就覺束なければ旅中に於て君をさへ弑する時は其難事を無に逃れ御證書を以て後に計ふ旨あれば此際を外すべからず迎一味の者と謀し合せ道中の川に於て殿が騎馬にて渉り給ふとき程よき所より水を潜りて殿の乘りたる馬の足へ傷けなば馬は驚きて躍り蹴ん然らば何程馬術に熟練せらるゝ共爭でか堪るべき忽ち水中に陷りて害を受け玉はんは必定なり斯の如く事を不意に發さば衆人則客の所爲なる事を曉らず是れ萬全の謀計なりとて今しも附け狙へども折節五月雨の頃なれば雨勝にて川水高く勢ひ強ければ馬の足立ち難く曾引舟或は蓮臺にて越し給ふ又小川に

ては水淺くして身を匿すべき所もなく兎角する內早姫川にぞ到るに前日の暴雨にて水嵩增り水勢殊に烈しと雖も一躰大河ならざれば馬の足の立ち難き共見へず其上少し濁りありて水底も見え分からず傳藏心中に思ひける樣今日を過さば方術を施すべき期もあるまじと思ひて態と吉徳公の御前に出で此川の躰を見るに水勢甚だ烈敷く御馬上にて越し給ふ事叶ふまじ急ぎ御船を申し付候はんと言上するに吉徳公笑ひ給ひて汝騎馬にて旅行せしは此度が始ての事なれば然社思ふも理りなり予は屢々此川を渡りて水勢の强弱瀬の深淺は能く知たり我は馬にて越すべしと仰せられつゝ川岸へ早くも馬を進らる是れ傳藏が謀計にて吉徳公の御氣性を日常能く知てあるゆへに必ず諫を容る時は却て馬にて渡り給ふと圖りて斯く激す所なり是に依て御側役抔二三騎馬を一齊に乘込て吉徳公を中に圍み左右に隨從ひ水を切り勢ひ込て渡つたり其中の同勢も殿が馬にて渡り給ふことなれば何かは猶豫すべきぞ各々川に飛込〳〵我劣らじと渡りけるに思ひの外水勢强く中流に至り各々馬の足立して浮つ沈つ渡りかけたり然れども吉徳公は性質剛强の上に馬術にさへ妙を得たまひしとなれば側役等を追越し給ひ水を切て三四間先の方へ進み給ふ此時傳藏の則客は疾より彼方の堤際の茂りし柳の中に身を隱し目をも放さず窺ひ居しが斯と見るより時分はよしと裸身に短刀を差込て川に颯と入と等しく水底を潜り吉徳公の乘り給ふ馬の後足を確と捉へ拳を固め短刀にて二刀刺しければ何かは以て堪るべ

き馬は俄に跳上り横に堂と倒れしかば剛强妙手の吉徳公も不意の事に堪りも敢へず馬諸共に水中に陷り給ふに側役の面々此躰を見て大ひに驚き君を救ひ奉つらんと我先にと水中に飛入たりし其中に和田源左衛門なる者は早くも水底へ潜り入り君を救ひ出し脇に抱き辛ふじて向の岸に到る頃大槻を始め孰れも追々と流れ着き吉徳公を水端の小屋に入れ藥を進め奉つると雖も多く濁水を飲み給ひ其上に落馬の時御刀の鍔にて胸を强く打ち給ひし故其惱み甚だしく早速に快方有るべしとも見えざれば途中よりの御急病と稱しつゝ徐々金澤へ御歸城をなし給ひしかば在國の諸老臣を始め悉皆く登城して評議をなし典藥の面々は云も更なり國中の名醫を呼び種々治療に手を盡すと雖も急所の打傷甚だしく治療も其功驗なく程なく逝去し玉ひければ大小の諸臣は闇宵に燈火を失ひし心地して歎き悲むと雖も返るべき事ならねば其旨を將軍家へ御屆ありて御嗣君佐渡守宗辰公へ御代替を請ん事專要なり迎老臣五人即日金澤を發足し道中を急ぎて江戸表へ赴きける爰に老臣前田土佐守清樹は毅に玉井市政なる者に言付て江戸屋敷の始末を聞きしより以來心中竊に大槻を疑ひ數年心を付て其所爲を窺ひけるに今度姫川を渡り給ふ際其危きを諫ると雖も强て乘入り給ふに及び自身守護をもなさゞる上水上に人數を置て水勢を拒ぐの備へもなさず僅の傍役にのみ任せ置し事を聞て大ひに怪みつゝ密かに動靜を探りける、斯て老臣等は日を經て江戸に着し吉徳公の逝去を申し上げ又佐渡守宗辰公御

代替の事を願ひ出で將軍家の台命を待つ所に同年九月將軍家は宗辰公を召れて家督相續相違なく仰せ出され官位先格の通り首尾好く事濟ければ宗辰公を始め藩中の者共始て安堵し万歳を祝しけり、去程に大槻傳藏は黨を語らひ再び君を換るの謀計を運らさんと豫て己れに隨身したる者共を己が屋敷に招き寄せ深く心を結び年來の大望を明しければ此輩らは高祿を貪り終身榮耀を極んとの欲に迷て敢て一議を論ずる者なく同意して各々誓約し血判の連署に加はりける是を始として江戸屋敷の諸士にして姦智あり富貴を願ふ意ある者には利祿を以て是を引入れ又愚直なる者には先君は勢之助殿を世に立て給ふべき內慮ありしと詐り曼に手術を以て申し下したる所の御書を以て示し誘ひしに依て是に徒し誓約連署血判する輩ら既に二百餘人に及ける斯て月日を經て寶暦五年の春大槻傳藏は一味の者數人を集めて一統に對ひ豫て申談せし處の大望を成就せんには先づ宗辰公を亡ひ次に嘉三郎殿をも無きものにせすんば勢之助殿を大守と仰ぐには至り難し然れども先年毒藥の事發りし際より して庖廚に與かる處の下役調味方膳番に至る迄皆篤實愚直の輩ら而已にして今毒藥を謀る事實に難し又先君御逝去の後餘人は知ず前田土佐守は頗る我れを疑ふの芽あれば今刺客を用ひて首尾よく仕遂げたり共再び渠が疑を引出さば我々が後の禍ひを免れ難からん案ずるに宗辰公には未だ壯年の事なれば時々導びき酒宴に耽らし美女を以て御心を蕩し神心亂るゝ時を待て種々の過失を引出させ御

行狀の惡きを以て明らかに隱居爲さしめん事某しが方寸に有り次に嘉三郎殿ごとき無智の小悴當君を隱居せしむるの時至る迄には如何にもして亡はん事强て思慮を費すに及ばず各々格式の高下はあれ共内外に在て傍を勤むる身なれば折に觸れ事に擬て淫逸の域に引入られよと隱謀を明しければ皆〻是に決し其謀計を受て時々放逸の業を勸んとすれ共宗辰公には平生儒臣と文學を講じ閑暇の時と雖も机に依て詩を作り又は和歌を詠るを事とし給ふにぞ大槻案に相違し然らば急に大守を害し奉つらんと腹心の姦臣を集め當君を害し其治りに就て後を謀るべし倩々思ふに今に當つて急速に事をなさんは毒殺に如はなし然れ共和田源左衞門を始め傍役の中にも豫て心を用ゆる族徒少なからず又臺所に係る者皆篤實の者共なれは骨て毒藥を施すの隙なし如何はせんとの言葉に一人そは水腰の内に勵しき毒藥を投入れ其水を用ひて御饌を調進する時は俄に其毒氣顯はれざるが故に人を損ずる事は多しと雖も萬に一も仕損ずる事は有之間敷候と申しければ傳藏悅び其計策極めて妙なりとて是より傳藏は病氣と稱して出仕を止め夜中竊に屋館出入りの魚屋何某の下男を招きて一塊りの毒藥を與へ密に謀計を言付ける此者は元來大槻が腹心の家來なるを方一の時用ゆる事も有らんと豫て魚屋方へ入込み置せたるなり魚屋は其後日々隙を伺ひ十一月二日の朝例の如く饌部に用ゆる魚鳥を臺所へ持參せし時側らに人無を伺ひ竊に毒藥を投入て歸しに更に知る者無りけり斯て其日臺所の面々午時の

御膳を烹立て膳番毒試役例の如く各々點檢を經て差出せば配膳の側役再び檢め食して別事なければ君に捧げけり御膳終り既に其日の夕暮に及んで膳番毒味役の二人俄に腹痛し惱亂する事頻りなれば皆〻大ひに慌ろき騷ぐ折柄又奥の方俄かに騷がしく大守宗辰公遽に御腹痛にて悶亂し玉ふ由を聞て諸臣以ての外慌き拜診の醫官等脉狀を伺ひ眉を顰て是は正しく御食傷の御症とは伺へども病惱甚だ劇し手延になさば一大事に及ばんと急に瓦劑をも勸め奉つると雖も更に其驗も見へず彼是する內宗辰公の悶亂甚敷一聲喚と叫びたまふと等しくはや鮮血七竅より噴出せしと見るしが須臾して遂に逝去給ひけり是に於て在合ふ人々其歎き言はん方なし大槻傳藏は此告を聞より大ひに悅び病中乍ら駭きし躰にて周章出仕して諸士と俱に宗辰公の御形狀を見るに正く劇毒に中り給ふと見て總身忽ち紫と黑の色に變じければ衆人舌を卷て恐怖をなし只忙然と呆るゝの外は無りけり傳藏は殊に駭きし躰にて是只事に非ず正しく毒を奉つりし賊あらん然らば詮議をなすべしと其日詰合の御側小姓役茶道を呼て今日の動靜を糺しける處に御膳番毒試役を始御膳調進に係はる者總て十一人皆悉く血を吐て死たりと申しければ傳藏眉を顰めこは尋常の事に非ず某し等而已にて事を定ば後の難義計り難し先此旨を御家門方へ申し上げ御一統の衆評に預るべしと即時に使者を以て事の次第を竊に通知しければ諸家共に大ひに駭き來潮ありて宗辰公御逝去の始末其外動靜につき衆評區々なりし處に御分家

松平出雲守殿進み出で仰せけるは此度宗辰殿逝去の形狀全く毒殺の所爲とは見え候得共俄に穿鑿を仕出し變死の動靜他に漏れ聞えては以ての外の事なり先づ急病と披露して未だ嫡子も無き事なれば舍弟嘉三郎重熙殿を順養子となして家督相續を願ひ其後に緩々事を糺し申すべき方然るべしと存ずるなりとの事に一統此儀然るべしと評議一決して先づ佐渡守宗辰急病死により舍弟嘉三郎を以て順養子に致度と願ひしに將軍家御聞濟にて夫より直ちに御家督相續の義是又願ひの通り仰せ付られける偖又今般の一件に付執事目付等の役人と倶に毒藥の實否を詮議すれども其日の臺所役人は盡々く死したれば他に探くるべき手懸りも更に無ければ詮議は其まゝ止にける、斯くて大槻傳藏は數年の間姦惡の心を藏し先に秘計を用ひて先君吉德公を害し奉つり今又密かに宗辰公を毒殺し本國金澤城に急使を以て逝去の始末を報知しければ先君に續て宗辰公の逝去し給ふことは唯事に非ずと金澤に於ても以の外騷動し老臣横山和泉守本多安藝守其外宰臣殘らず登城して評議しけるが各々眉を顰めて國家の安危如何と評議區々なり爰に前田土佐守は深き思慮やありけん病氣と號して久敷登城せざりしが此日俄に出仕して評議の席に列しけるが進み出で申すは某し熟々案ずるに斯る變事度々出來せしは正敷國家を覗ふ賊臣君の側らに在りと覺えたり某し不肖なりと雖も此度は各々に代り江戸に赴きて事を糺し當家靜謐の計略を廻らすべしと詞を放つて申しければ列座の面々是を聞元來土佐守

の正直智慮の勝れたる事を能く知る故に大ひに歸伏して何れも此儀然るべしと同じ即ち衆議一決して各々退出ありければ奥より人を以て土佐守の退出を待受け御錠口まで御出候へと申すに付土佐守は不審乍ら何事か奥向より江戸表へ御用の次第も有ることにやと參りければ錠口の傍らより老女玉笹、なる者出合て土佐守へ先にお貞の方の房にて奪ひ置たる手簡を取出し何やらん密話て渡しければ土佐守打點頭つゝ右の手簡を懷中して退出しける斯て前田土佐守は村井主膳西尾隼人等と倶に江戸へ赴き本鄕の上屋敷に着し先づ當君重熙公に拜謁なして次に在府宰臣執事用人共へ面會し此度の始終を委細に聞糺せし後一同の者に向ひ拙者今度衆議の上幼君守護の任を申し付られ當屋敷の諸役人の賞罰を正すに因て總て在江戸の諸士は年限を論せず一統に入換へ國老共が眼識に適ふ者を撰びて勤番せしむる間各々は速かに當屋敷を引拂ひ國許に廻りて緩々勤勞を慰めらるべしと威義沼々として述べければ在府の諸士は驚き恐れ敢て一言も出す者なく皆誤り入て其辭令を領掌す此時に方つて流石大膽不敵の大槻も雖を以て肝膽を刺さるゝが如く面を赧め總身汗を浸すと雖も一向其色を見せず土佐守殿の仰せの趣き至極せりといひ置き己が屋敷へ歸りて俄に歸國の準備をぞ致しける、偖も江戸表にて勤番の諸役人は總て國に歸ることゝなりければ大槻に黨せし奸佞の輩らは驚き若し密事の漏たるが故に他事に假託て本國へ歸し彼處にて吟味を爲んとの巧にても有らんかと心に危ぶみ各々

大槻の宅に寄り合ひ種々評議を凝らせしかども今此急突の際に臨んでは良案も出でざれば傳藏は球ねて己が身方に引入れある老女淺尾に出會して便宜を計り毒を用ひて幼君を殺さん事を言付たり渠は婦人乍ら勇悍の氣性なる故に少しも異識の色なく即時に誓ひを立てゝ承諾ければ奸人等は密かに悅びの眉を開きける、其后加州より交代の名士各々到着せしかば江戸に在るの侍士は支度を爲して本國へぞ下りける其中にも和田源左衞門を始として忠義廉耻の諸士も多かりければ土佐守は是等の面々を密かに招きて申しけるは某し千里相隔つと雖ども足下等の忠誠を知りたり因て今一大事を言付るなり其故は大槻傳藏は二代の君に寵遇を蒙り精勤衆に超過たる故諸士渠に從ひ靡きて面は天晴忠臣とは見ゆれ共心底心得難き事共少なからず此度の變事も正敵渠が所爲ならんとは察すれ共其罪明かならざる故に他事に託して本國へ退けたり足下達は歸國せば某しが計らひの行屆ざるを慣ほりし躰にもてなし何卒して渠に親み寄り動作に心をつけ疑はしき事あらば對馬守へ告知らさるべしと命じければ各々承はりて加州金澤に歸りける是より土佐守は自身江戸屋敷中万事を執行ひ宰臣西尾村井を始め忠勇の諸士を擧げ用ひて政事を一洗し國詰の老女玉笹が密かに告たる旨もあれば老女淺尾の心底を不審しく思ひ宗辰公の後室眞珠院殿の御附となして幼君の御側を退け内外殘る方なく嚴密に守護したる程に叛賊の族も手出しすべき透間なく先づ靜謐に治りしは偏に土佐守の功績なり

偖も老女淺尾は大槻が歸國の折に秘計を授かり再び毒藥を用ひて幼君を害し奉らん事を承諾ひし處其身は土佐守の指揮として新後室眞珠院殿の附け人となり殊にお菊の方共万事に心を配らるれば其間を得ず徒らに年月を過しける處或夜大尼君の御殿に於て幼君を饗應せらるゝに因り是幸ひの時至れり是非共今宵を過さじと心を定め日の暮るゝを待て毒藥を懷中し廊下傳ひに大尼君の御殿間近く忍び寄り物陰に彳みて茶の間の襖子を覗ひ見れは大尼君の側附の女中松枝只一人蜜子を護りて居たりしが暫くありて用便のために席を起て廁へ出るを見定め時こそ得たれと密に内に入り蓍へ持たる毒藥を釜の湯の中へ投込み人の見ざるを幸ひに何氣無く己が部屋へ歸り仕たり顏して御殿の動靜を待居るは誠に大膽不敵の婦人なりける斯て亥の刻過る頃お菊の方自ら茶の間に入たまひて手自ら茶を點て盞子を守る女中松枝を召れて毒試せよと仰せければ松枝畏まりて席を下り何心なく御茶を取て一口二口呑よと見えしが彼の淺尾が入置し毒藥劇しく此湯喉を通るや否忽ちに苦と叫ぶと等しく後方に倒れて悶絕せり大尼公驚き玉ひ人や聞んと四面を堅め急に土佐守を召て此事を仰せらるゝ中に松枝は七轉八倒して空を掴み紫黑の惡血を吐出し其坐に於て狂ひ死したり土佐守此躰を見るより是正敵奥向に謀計を爲者ありと覺えたりとて急に捕方の者に指揮して錠口を固めさせ一人宛呼出し仔細を穿鑿するに曾て夫ぞといふべき手掛りも無き處に柵と云へる女中一人先刻より何事も云ず默

して居たりしが土佐守へ對ひ私し事今日は御酒の事を掌どり數刻の間御酒の取扱ひ致居候故に其氣に醉て堪へ難く宵の中御廊下に出で風を入れんと存ぜし處に眞珠院樣御附の老女淺尾殿廊下傳ひに御茶の間に參られ姑く有て忍ひやかに部屋に歸られしを見懸候計りにて其外に見當りたる事も候はずと申し立てければ土佐守は豫て淺尾に心を附る處なる故必定彼者の所爲ならんと直ちに淺尾を呼出して聲を荒らげ如何に淺尾其許は今宵何等の故有つて竊に御茶の間へは來られしぞと訊れば淺尾は是を聞て驚くと雖も生得大膽の女なれば少しも懼かず今晩眞珠院樣御附の女中兩三人部屋に見へざる故に自然當御殿へ參られ不作法にても有らんに於ては殿樣御入の折柄殊に大事と存候故密と御茶の間を伺ひしに一人の女中御臺子を守り居られ候而已にて別の事は候はずしと答ければ土佐守確と白眼女中他の御殿へ來らんには誰にても一應申し斷りあるべきの處密に伺ひし狀甚だ以て不審し屹度取糺し申すべしと言つゝ左右を顧みれば土佐守の意を曉り諸士兩人衝と立懸り淺尾を取て引伏せ召捕りける此時土佐守は淺尾には何の鞫問をもせず先自身渠が部屋に到り偖道具を逐一に搜し見れ共さしも是ぞと云ふ怪むべき物も無ければ尙も隅々を探し索るに一つの守り袋を堅く封じて裏に「二月堂の御守」披き候事許さずと書付ありその中を見れば一通の書付なり土佐守是を見て大ひに慄き其儘懷中して急に役所に歸り宰臣西尾隼人村井主膳に對ひ今度の亂の張本は正敗本國にあれば

少しも忽せにすべからず各々には幼君を大切に守護せられよ某しは今夜俄に支度して本國に引取り首謀の者を捕へん又淺尾事は撥敗護衛の人數を添て跡より送られよと夫々に諜し合せて其身は直ちに用意を整へ乘籠に打乘り揉に揉んで道中を急ぎ加州へ赴き金澤城に着し直ちに登城し先づ國老の面々へ廻文を以て急御用候間早速登城すべき旨申し遣しける即刻登城の人々には本多安藝守前田對馬守横田和泉守奥村丹後守を始として宰臣の面々其他諸役人ども急ぎ登城をぞ致しける前田土佐守は去ぬる五日の夜の始末を述べ將又老女淺尾の部屋にて得たる書を一統の前に取出し披見なす其文に曰く「大槻内藏之丞を以て申入候一儀承知の由歟び入候内々の手段成就の上勢之助殿御代と相成に於ては恩賞は望みに任すべき者なり、貞印、前書之趣相違無之條仍て爲後證奥印を加ふる者也、大槻内藏之丞印、右の通り認め有る故一座是を見て大ひに慄き斯る證據分明成上は速かに大槻傳藏を召捕り申すべしと云ふを土佐守は頭を振て否々某し案ずるに渠は姦智に長たる者なれば一人を招かば其機を曉り虛病を撫へて來らぬ而已か藩中の諸士渠に黨する者も許多在らん然すれば自然事の漏たるを知て變を生ぜんも測り難し先詐つて渠を引出し城中に力士を伏て召捕へんには何の仔細のあるべき且又渠が方に在處の侍ひ下部下女共に至る迄同時に召捕べし首叛既に召捕るゝ上は其餘黨は密に身を遁るゝ謀計を爲者ありとも聚りて變を生ずるには至るまじと言へば何れも其儀に決し城

中には手配をなし置て數通の廻狀を出しける其文に今般幼君御遊例の由急書到來せり是に依て評議すべきの間即刻登城あるべしと觸けるに折しも夜中の事なれば諸士以ての外に驚き又もや大變の出來せしかと探る物も取敢ず我後れじと道を競ふて出で來る斯て大槻傳藏は年來の謀計露顯せしとは夢にも知らず正敢淺尾に言付けし一事成就せしかと心中に悅び何心なく急き登城して大廳間の入口に差掛りける處に西尾三郎左衞門井内左仲の兩人仰なりと聲悪て双方より手を掛れば心得たりと傳藏振拂ひ脇差に手を懸しかど兩人は聞ゆる柔術の手練なれば忽ち脇差を打落し左右の腕を捕て動かせず終に生捕たり爰に於て國老の面々諸士に對ひ此度大槻内藏之丞に御不審の廉ありて某し等仰を蒙り他事に託寄せ一統登城致させ既に内藏之丞をば召捕たり然る上は各々用事之なき間直に退散勝手たるべし尤も御幼君には益々御機嫌克在らせらるゝの間一同安堵あれよと申し渡しければ忠義の諸士は悅びの色を顯して退出しけり、是より老臣の面々は評議をなして直に捕手二百人餘を諸方に遣はし大槻の黨類を捕獲せしめしに早此事を聞き逃も遁るゝ途なければ重刑に逢はんよりはと心を定め切腹して死する者五十餘人に及び又恥を知らざる奴輩は何處ともなく逃走りし者も少なからず其餘の者は殘らず縛め捕りて入牢せしめ嚴しく拷問ありけるに孰れも包み遂ふせずして一々白狀に及びける、又大槻傳藏は始めの程は容易に伏罪せざりしも前田土佐守の明敏なる取調べに言葉屈

して是亦終に悉く白狀しけり、斯くて土佐守は一々罪の輕重を定め獄門以下夫々の重科を申し渡しける、然るに大槻傳藏は偵がおめ〳〵刑に就くを恥ぢたるにや或夜獄中に於て密に自殺して相果てけるこそ是非なけれ、老女淺尾始め奸人共は一々刑に處せられ、お貞の方は城下の真性寺に押込められてありしが後發狂して狂ひ死し勢之助殿も出家して圓頂黑衣の姿となりしも是亦同く變死しけり皆是れ天討の然らしむる所ならんと聞く人毎に舌を卷て畏れ合ひしも道理なり、是れ實に寶曆二年の事なりし、斯くて大槻の悪徒等を召捕り或ひは其隱謀を探りて功を顯せし者其輕重に因て夫々恩賞を賜りければ何れも其仁德を仰き加越能の三州共万歳歡樂の聲を揚て太平を唱へける是れ全く國老前田土佐守清繼が困苦明達によれるものなりと知るも知らぬも譽め稱へける

岡村十兵衛……仁惠……身を殺して以て仁を成す

仁者は必ず勇ありとかや茲に貞京の世土佐國安藝郡羽根浦の近傍は暴風大雨打續き魚漁の利少なく田畑の收穫更になかりけるより百姓漁民は日々に衰微に赴き終には其日の生活をも爲し難きに至り其困難謂ふ可らず若し此儘に幾日をか過んには遂に餓餒路に累々たる有樣にも立至らんと人皆眉を顰めけるに當時羽根浦の物産運上を徵する役にして廣拜行をも兼し五分一役を勤むる山内土佐守豐昌の家臣岡村十兵衛と云へるは生得仁心厚く義俠に富たる武士なりければ目前に悲慘の現況を見るに忍びず其實況を本城の執政に具申して救助の恩典を請ふこと屢ばなれども執政は徒らに日子を移すのみにて更に恩典の命なく餓餓日に迫りゆき死するもの數知れず十兵衛是に於て自ら謂へらく我苟くも職にあり乍ら舊例を墨守し執政か權威に恐れて言甲斐なくも袖手傍觀して民の困厄を見過さん事豈丈夫の所爲ならんや今や身を犧牲に供して人民の塗炭の苦みを救はんものと最と雄々しくも心を定め該浦にある藩のお廣米を開きて窮民を賑しければ其の喜悅一方ならずして何に譬へんやうもなく孰れも十兵衛を神佛の如く伏拜み歎呼の聲ぞ高かりけり然れども今度の一條は十兵衛一己の

專斷にて爲せし所業なれば忽ち其事執政に聞へ上の指揮なき內に妄りに廣米を開き勝手に民を賑せし段以ての外なる次第なりと嚴責を蒙れり十兵衛は豫て覺悟の前なれば御咎の旨畏まり堅く門戸を鎖して身を謹しみけるが或日浦の古老を招きて懇ろに云ひけるやう我今執政より重き御咎を受け今更何と申さんやうもなく唯謹身して命の下るを待より他はあらず然りながら汝等の知れるが如く當浦の人民日々餓に倒るゝを眼前に見ながら此を救はざるは仁人義士の所爲にあらず素御藏米と云へるは此度の如き非常の際に一時の急を救ふが爲にこそなれ若し之を開かずして安閑と其番をのみして過なば仁君民を治むるの道に背き我此浦に居るも却て居らさるに勝らん故に我の信ずる道に從がひて上命をも待ず斷然之を開き民を賑せり由て今我一命を擲ちて汝等の命に代る所存なれば今世の對面も最早是迄なり幸ひに察する所あれと最慇懃に申し聞すに一同の者涙をハラ〳〵と流し御決心の儀さる事ながら是皆御國に盡す赤心より出でし事にて又上にも仁人厚き人ありて能く今度の頓末をも知ろし召事もある可けれは縱へ法に違ふ所爲ありとて別に重き御咎も候まじ猶ほ下人等よりも詳らかに事情を具申し申す可ければ御心安く御謹愼遊ばされ候べしと只管其意を慰め一同家路に皈りけるが十兵衛は一旦斯うと思ひ定めし鐵石心たゝけども碎けず嗚呼我既に心の底は浦人にも告たれ思ひ殘す事更になしいで此上はと頓て役所に出で心徐に殘務の處分をなし人を遠ざけて一間の內

に端座し遙に本城の方に向つて再拜し微臣十兵衛我君をして堯舜たらしめ我民をして永く御恩澤に浴せしめんが爲に舊例を破り今度一已の專斷を以て廩米を開きし不法の所爲不忠これより大ひなるはなし主君幸ひに特別の恩典を以て罪數等を減ぜらるゝも微臣豈に甘んじて生を全ふすべけんや由て今日此所に割腹して相果て候哀れ大不忠の咎を宥恕せ給へと最後の詞を涙に云はせ諸肌脱ぎ出し短刀拔き持ち左りの脇腹に突立て右へ引廻して其儘反す刃に咽の笛掻き切り貞享元年七月十九日無道の夜風颯と一吹き此世の息絶へたるは實に潔よき最期と云ふべし斯と聞きたる浦人の驚きは一方ならず擧つて役所に入り來たり恰ども赤子の慈母をうしなひたるが如く聲をあげて打泣けるが頃て長分の者死屍を棺に納め同所氏神の社の靈地に埋め最と賑しく葬儀を營みけるが其翌日より參詣するもの引も切らず手向の水泉を灌へ香火雲と立昇りぬ縱へ如何なる貴人の墳墓なりとて斯はあらじと思ふばかりにて心あるものゝ羨まは無かりける日ならずして石碑も建ち今に至る迄香花たえずと云ふ其後浦人集り岡村氏の自刃は我等が爲めなれば其の恩德を上に具申し罪科を赦して跡目相違なく相立やう愁訴せんと爰に協議調のひ庄屋の左近右衞門其他の者連署し歎願に及びける爰に至つて藩主を始め執政にも初て十兵衞の誠心を知りて遂に其遺族の者へ跡目相續仰せ付られしとぞ其の後弘化四未の年の冬山内家十三世豐熙君東郡巡覽の節羽根浦の岡村十兵衞の墓を過き「人間無他義兼仁、有志勳鑑在此人、旅客更慕報國志、美名長及子孫身、土民仰望神如在、路畔古墳拂無塵、不受命勝於受命、忠魂赫々又彬々」と斯る七律を賦して彼の忠魂を吊らひたまひけると云ふ

奥平源八……純孝……俱に天を戴かずして恩義を戴く

世に復讎の談多しと雖も赤穂義士の復讎、奥平源八の淨瑠璃坂復讎、渡邊數馬の伊賀越復讎は德川時代の三大復讎と稱へ後世までも人口に膾炙せり然れ共義士伊賀越の兩復讎は虛實相半の書なれども兎に角其顚末を編述せし者少からざれば人々これを讀み又講釋師音曲師俳優等の伎によりて童女迄も知らざるはなしと雖も淨瑠璃坂の復讎は世間之を語るもの甚だ稀なり流布の讀本も少く宮川忍齋の奥平復讎錄、松崎堯臣の雜話筆記、戸田茂睡の紫一本等に所記の實錄あるのみ其餘は附會無稽見るに足らず今實錄彼是を參考し玆に其顚末を記さん、抑も此復讎の起原は下野國宇都宮の城主奥平美作守忠昌なる人病を得て寛文八年二月二十九日卒去ありけるに其臣杉浦右衞門兵衞といへる者當時殉死禁制の嚴命ありしをも顧みず忠昌の爲に追腹せり同三月二日宇都宮に於て忠昌君吊の式あり奥平家門閥の面々を始め諸士殘らず大勢其場に列席せし中に奥平内藏助折節所勞にて起居心に任せざれば止む事を得ず嫡子源八（當年十六）を名代として出席させしめたり時に家老奥平隼人は源八に對ひ父君はいかなれば出席なきやと問ふ源八其尋を聞き家嚴此頃宿痾相發し平臥罷り在り不本意

ながら出席する事を得ず名代として拙者出席したりと答ふ隼人不興の躰にて父君は文學好にて其爲に病身になられしものなり奉公に換て文學は無益の事なりと眉根を寄せ苦々敷躰にて聲高らかに放言しければ源八若輩なれども滿座の中にて父を譏る隼人が一言心魂に徹し早々宿所に歸り父に其情狀を告げければ内藏助大に憤り隼人は解しからぬ事をいふものかな我れ今日出席せずんば諸人隼人か言を尤なりとおもふべきなりいでや推しても出席すべしと漸くにして身を起し吊の場に至りしに隼人内藏助か來るを見て足下は日頃の學問增長の爲めに今日持病發したりと過刻令息源八が談話に聞きはべりしが疾くも快復せられしものかなと詰る内藏助聞て先刻豚兒にも其趣の示しありしと承知すれども夫は勘辨の足らざる所とこそおもへ其譯は學者も古今世に多しといへども其爲に必ず病身となりしといふ事を聞かず文學を嫌ふ人の眼より見る時は然もあらめ曾て文學をなしたりとて病身になるにはあるべからず其證は大儒博識と世上に聲價高き人も八十九十の長命の人も多し文學を嫌ひ一卷の書だに閲ざる人に短命なるもあり學問する者は病身なりとの論は信用し難し人の强弱生死の二ッは天にありしかのみならず奉公に換て文學を爲すとの足下の詞一圓氷解し難し和漢の忠心義士は文學に通曉し事の道理を辨へ知らんと皆奉公の爲にこそ學問はする事なれと最不興氣に縷述しければ隼人は默して何の返答もなく一座何となくしらけたる躰なり暫時ありて隼人是日の吊の入

室の看板出たりしを見て入室の文字はにうしつと讀むやじゆしつと讀むやと問ふ一座兎角の答に及者なし時に内藏助聞てにうしつとも じゆしつとも讀ますにつしつと讀むなり抑入室は宮方攝家公達門跡の入院を稱する名稱にて當家などには不相應の語なれども佛家の慣習にて此稱を爰に記しなりといふ隼人聞きも敢へず内藏助足下は日頃學問研究あるほどありて文學の事に精しく讀方の功者なり實に坊主勝りの人なりと嘲弄心にいひければ内藏助膝立直し足下は先刻より種々の過言ありといへども故殿の中陰といひ殊に一家中參集の場所旁々堪忍せしに坊主勝りとは何事ぞといひも果てず腰刀を拔打に磕と斬る隼人心得たりといひながら起上りて拔合せ切むすび互に痛手を負ふ兵藤玄蕃は大力の剛の者なれば隼人内藏助の兩人を搦抓み膝に敷き双方の脇差をもぎ取るを見隼人の弟與平主馬走せ來りてうつぶしに組敷かれ居し内藏助の尻より股にかけて拔打に斬付たり玄蕃二人を膝下に敷ながら大手をさし伸べ主馬を掴み力聲を發して投出せしかば三間ばかり隔てし襖障子を打ぬき遙か彼方にへたばり臥し起も上らず氣絶したり其間に大勢かけ寄り先づ双方に引分け各宿所に送りかへしけるが内藤助は堪忍なり難しと其趣旨を詳細遺書に認め自害したり一家の愁傷大方ならずといへども事のこゝに及びてはいかんとも詮方なければ藩廳に具狀せり藩廳檢使を出して點檢せしむるに一通の遺書ありて自殺の趣意明かなり檢使歸りて見聞の事狀ならびに遺書をも進達に及びけ

り然るに家老用人等いかなる了簡にてありけん遺書は廢棄し内藏助亂心にて隼人に刃傷に及ひ其身自害したりとの事にとりなし一先づ源八は兵藤玄蕃に預けられ幽閉の身となり居たりしが後日を經て詮議漸く落着し家祿を沒收せられ永の暇となり隼人も同じく家祿を召上げられて江戸に上り双方浪人の身となりけり此裁決邪正を明にせざる處置たりしとて双方の一族故舊は互に不平の氣を生し各々おもひ〳〵に自ら暇を乞ひ退出するもの多く夏目外記與平傳藏の二人は源八と共に立退き由緒ありて大關信濃守增榮に引取られ其領地那須の黒羽に至り兵藤玄蕃も又同じく立退きたり彼隼人が弟なりける主馬は同家中與平左馬允が養子となり家督相續し居たりし故何事もなかりしなり隼人が一言の暴論より内藏助が憤怒の餘り自害に及び其末歷々の數數名國を立退く騷動に至りしは歎かはしき事どもなり此事疾く江戸に聞へ將軍の上聞にも達しゝかば忠昌卒して吊儀の場に騷動起り其末毀名の家臣退國するのみならず近年布令ありし嚴禁を犯し忠昌が卒去の砌り殉死の者ありし等は畢竟嫡男大膳亮昌能未熟にして臣下に敎誡の不處置より統馭の道を失ひ人に主たるの權力なきに因るものなりと深く怒らせられ何分の處刑を加へらるべき處なりけれども祖先歷代の功績且つ父忠昌の盡忠をも思召され特別の寛宥を以て宇都宮十一万石を收め更に出羽の山形に移し九万石を賜ふの台命ありて二万石の所領を削られける是れ實に同年八月三日の事なり、扨も與平家に於ては杉浦が殉

死且つ吊葬の場にて不慮の刃傷其處置至當ならざりしより門閥の臣數名退國するの煩擾に至り竟に削封轉地の嚴命を蒙り一家中悉く新封の地山形に居を移しし時隼人の弟主馬も共に彼地に移り住居すること凡そ二年の後江戸なる兄隼人より頻りに出府を促すは若し源八等が襲ひ來る事もあらんかとの懸念に出るなるべしとて妻子を引連れ寛文十年七月十三日山形を立退き米澤を經て仙臺に廻り江戸に出んとの豫定なり源八が親友此事を聞き急ぎ手紙を飛して黒羽なる源八に報知せり其頃源八は夏目外記與平傳藏桑名友之允同人弟頼母等彼是五六人米澤領の内阿賀の湯といへる温泉にて湯治し居たる所に其報達し取る物も取り敢ず輕尻馬を屈ひて之に打乘りて同國村上郡上の山迄走せつけて待ち受け居たり主馬は然る事ありとは夢にも知らねど若し道中に異變あらんかと用心嚴しく妻子と道を別にして出府せしめ自身は鞍馬に跨り從者に夫々の武具を手々に持せ大勢前後を取圍み上の山にて暫時休息しそれより東郷といへる村に着きしに此地一方は在家一方は沼田にて道路の幅いと狹し是れ主馬が運命の盡きし所か此地に源八が一黨駈付け主馬が向ふの方より來るを見て馬より飛下り只今其處に來るは主馬ならずや源八是まで向ひたりと小踊し已に立向はんとす主馬はこれを屹度見て若盟共けなげなる擧動なり左れども此處は足場わるし今少し後に戻り美留目が原は究竟の平場なり彼地にて花やかなる勝負を決せんといふを源八聞て冷笑ひ死地に臨みいかで足場の良否を選

んや只潔よく最期の覺悟を爲よと云ひ捨て面もふらず討てかゝる主馬も今は爲方なければ馬より飛下り從者が持たる弓をつとり透間もなく矢を射放しゝかども源八些も不慮走せよれば主馬弓を捨て佩刀を拔き合せ打合ひ切鋒より火花を散らし戰ひしが主馬が運命こゝに盡きたりけん側なる沼田に片足を踏落したる虚を源八は得たりとすかさず壓かけて斬付けたるを主馬これを支へんとしたれども源八が打太刀に右の肩より左の脇に大袈裟に斬付られ其まゝ斃る此間に源八が助勢の輩は呼傳ひに其後に廻り前後より切立られ大勢の者ども此勢に辟易し右往左往に散亂し八方に逃げんとするを追かけ追詰め彼是六人を討留め主馬の首は同人の片袖を切裂きて包み死骸は往還の傍に引並べ置けり最初源八等乘來りし馬士等に途中に於て必ず變あるべし變ありとて逃走る事勿れ若し我等が言に背き一人にても逃んとするものあらば斬て棄つべければ努々懲きて逃くべからず逃だにせざれば汝等が身に怪我はなかるべしと豫じめ誡め置きたりし故戰慄をそれながら傍觀し居たれば各々馬牽き寄せさせ勇々と打乘り阿彌陀堂村に至り各々血に染し帷子をあらひ清め負傷者は創に藥を貼り暫く休息して其地を發し順て奈良下の宿に着きたり此地は上山の城主土岐山城守頼行の領分にて關門あり兼て主馬か通行せば晝夜の差別なく通さすべしとの依頼あるよしを源八豫め聞き傳へ居たれば關守に對ひ拙者は與平主馬なり同姓源八を討ち果し游手少々彼ひたりと欺く關守は策て通行の斷りあ

れば毫髪も疑ふ事なく心閑に休息し旅行あるべしと大に勞りしかば各々おもふまゝに支度をなし關守に謝し馬をはやめて猿が鼻を越え仙臺領に出で下野に着黑羽に歸り大關增榮の許に身を寄せ隼人が所在を知らんと江戸に間者を出して探偵させけり、却説隼人は遂に宇都宮を立出しより直に江戸に至り幕府の御鉄砲玉藥奉行松平助左衞門は兼て所緣あれば其屋敷なる一番町に尋ね至り事情を告て一身の落着を依頼す助左衞門は流石に拒絶もしかね其頼に應じ邸内に居らしむ隼人世を忍ぶ身なれば本名を秘し本多與兵衞と變名をなし父半齋弟九兵衞半齋が姪聟大塚與一右衞門等も共に隼人を保護の爲に來りて住まゝり其他宇都宮より隨從し來る隼人か家臣從僕等皆共に移り此處に住する事凡三年匿す事の顯るゝは世の常源八が間者何れよりかこれを探り得忽ち源八に告げ知らせけり源八は晝夜其音信を待居たりしに今隼人が所在を聞しかば直に襲はんも不便利なれば彼より我を待ぬるの策略にして早速從者を出府せしめ或夜主馬が首領の擬濱せしを洗ひて札を附け助左衞門の邸の塀より内に投込みたり隼人これを見て心中大に驚き扨は源八我在所を知りて斯る所爲に及びしなるべしと其首級を見て哀傷なせども今更爲方もなく先づ彼此地に來りて我を狙へば油斷ならず最早永く當邸に足は留め難しと助左衞門にも商量の上密に潛伏の地を索けるに小石川鷹匠町住居の鷹匠頭戸田七之助の組同心大繩の屋敷なる市ケ谷淨瑠璃坂上の搆内に相應の家作ありと告る者ありしかば

助左衞門より七之助に依頼の上其處に移らせしは誰一人も知る者なかりしとぞ隼人は其處に潛伏する事凡二年餘りなりけり抑も此地を淨瑠璃坂と字せし原因はむかし此坂の上にて操淨瑠璃芝居ありしを以て斯名けしなり扨も源八が間者は少も油斷なく隼人が身の上を探ぐるに今淨瑠璃坂の上大繩屋敷の搆内にあるを探知せしかば間者源八に密告せり源八其報を得て今は猶豫すべきにあらずと一味の者に一擧を急がん事を報じけるに各々同意せしかば源八は從兄の奥平傳藏始め夏目外記兵藤玄蕃桑名友丞桑名頼母其外四十餘人と共に黑羽を發せり斯く多人數なれば陸路を行かば人目に立ち若し怪まれ途中に於て如何なる故障あらんも計り難しと商議を定め海路を渡らんとせしは同十二年二月朔日の事なりしが是日は朝辰の刻より西風吹起り其後乾の烈風に變て陸は土烟空に立て宛然出火の如く海上は波高く所詮渡船の叶ふべくもあらねど勇を鼓して船を漕しかば辛ふじて山川といへる地方に船を着たり各々蘇生の心地にて此地より上陸し陸路七里を往く又川船に乘り同二日に淺草川に着岸せり江戸は昨日の大風中本郷お弓町通に出火あり且三度の地震にて人心騷動し今日も亦烈風にて人々の周章大方ならず源八が黨は上陸場近き茶屋に立寄り暫く昨日よりの疲を休め食事を調へ烈風の爲に衆人の立騷ぐは是れ時機の來たるなりと心に勇み其處にて時刻を待つに申の刻頃又地震せしかば彌々恐怖を重ね騷がしきといふばかりなし斯る騷動に取紛れ源八等を怪しむ躰もなけれ

ば風の風を待躰にもてなし徐に討入の支度をなす其形裝は各々鎖帷子の着込をなし上には兼て作り設けし所の夜討の目標に白木綿の袖なし羽織に黒にて丸の内に一文字を書いたるを一同一樣に着用したり各々手々に覺えの道具を携へ兼て夜討を定めたれば松明を貯へ時刻をはかり火消組の見廻りのよしにいひなし立出で勇み進んで市ケ谷に向ひ急きしに辻番所の番人其形裝の異るを怪しみ尋ぬるものあれば昨日よりの烈風にて火の元危きによりて見廻りの者なりと答ふ强て糺す者もなければ其夜丑の刻淨瑠璃坂上御鷹匠同心屋敷搆内隼人が住宅に押し寄せ直に討入らんは容易なれども場所は幕府の同心屋敷の搆内なれば謀略を以て靜に入らんには如かじと先づ携來たりし松明に一同火を付火事よ〳〵と口々に呼ばりしかば門番人大に驚き出火よといふ程に總門の木戸を開きし故忽ち飛入案内者を先に立て隼人が住宅に押寄せ見るに外の長屋を堅固に建廻し門塀嚴しく搆へ容易に討入らるべきもなければ人々案に相違し當惑の躰なり玄蕃其躰を見て是は我等爲方ありと刄の徑り八九寸許なる斧に樫の柄の一握にあまる上に筋金打たるを振り上げ門の柱に打付切込み力聲を出し推かゝればさしも堅固なる門も瓦落〳〵と半ば倒れて扉は兩方へ開きたり内にても此物音に驚き周章皆〳〵起き出で鎗を搆へ寄らば突んと待つものあり源八きつと其者を見て憎き擧動かなと飛かゝり討んとするに後より何物とも知れず飛出で源八を掣除け彼の鎗を搆へたる者に向つて無二無三に切てかゝるを彼は鎗取直し胴中を突く突かれながら心得たりと其柄をたぐり近寄らんとするを見鎗を打捨て刀を拔き只一打に切伏せられ死生もわかず倒れける、退去の前に至り死傷如何と檢するに其倒れし者は桑名友丞が子三七といへる者にて鎗疵も胴中を突貫かれしと見しは夜中のひがめにて着込の鎖帷子を突かれしのみなり一同茲を引上る頃は氣息復し扶られて歸りしとぞ、隼人方には斯かる變あらん事は豫て思設けぬにはあらねど父入道半齋弟九兵衞も襲込の襲來支度の用意もなく衾衣搔除け拔刀おつ取立出づれば敵味方火花を出だし切結び雌雄をあらそふ最中なれば面も振らず切入て味方を助けんとすれども源八が黨は年來覺悟の夜討半齋等は最初門を推明けし勢に瓦の落し音に初めて驚きしよりの防戰なれば主客の位置を替へ猥狽して十分の働きもなしかね大に苦戰のありさまに半齋は老人ながら些も躊躇事なく九兵衞と共に力を極めて防ぎ戰ふといへども竟に力盡き父子共に討れにけり其外半齋が姪聟なりける大塚與市左衞門食客澤邊六右門衞半齋の召使石下藤助山下吉兵衞藤堂彦兵衞隼人の召使内野太郎兵衞其外輕部九兵衞等も立向ひて此處を先途と蹈込〳〵能く激戰に及ひしかども源八等が徒は夜討の支度にて充分の用意あり此方は不意に敵を引受け寢衣の儘の素肌なれば皆々切伏せられて落命す金見半平青柳四郎兵衞市川與兵衞は各々重傷を負て何處にか隱れしかば今は支ふる者もなく隼人は父弟共に討るゝまでも出合はざれば源八大音聲にて如何に隼人

何時まで一命を惜しみ隠れて出でざるや親族悉皆討れたりしに身を潜み遁れんとするは甚しき卑怯の擧動ならずやイザ出合て勝負をせよと喚はれども何の答なし是れ必ず隣家に遁れしならんいざ打入て搜すべしとはやるを人々制して否々非なり隼人が居住たる屋敷は苦しからずといへども他家まで搜すは不法なりつゝしむべし假令逃竄るゝとも重て住所を搜索し討取るは容易なるべしと切りに意見を加へしかば漸く源八承諾し一先此塲を立退んと各々其用意を爲す人數を算するに即死負傷も數多ある中にも友丞と頼母は深手を負ひ其外歩行なり難きほどの負傷者は各々着用せし袖なし羽織を假に畚となし是に扶け乘せて鎗を集め又は斧の柄或は垣根の杭を拔とり棒となし無疵淺疵の者二人して舁き順々に綾引の如くにし若し追撃者やあらんかとの慮あれば究强の者のみを撰び殿となし徐々繰出し牛込御門外土橋の前に至り用意の腰兵粮をつかふに此時既に夜は仄々と明たりけり、却説も隼人は豫て源八等が狙ひ來るの恐あれば半齋の住居とは家を隔てゝ臥し居たれば亂入の最初は知らず事急なれば告知する者もなく騷動の物音に目覺め馳せ出みれども敵の形勢堅固なれば此儘立向ふとも敵すべからずと身支度のため一應はせ返りし間に當の敵は退散し父半齋をはじめ弟九兵衞其他の者討果されし慘狀を見いかで猶豫すべき無念十分馬に鞍置きこれに打騎り從者磯部太郎兵衞高橋五左衞門中間二人都合主從五人源八外記等の後を追ひ田町の堀端迄馳出で左右を見わたせば

牛込門の方に數多の人あるを見て其方へ馬を乘むけ一散に追行きけり源八等も遙かに騎馬の者の此方にむかひ追來るは必定隼人ならめとこゝろかまへして待居たるに隼人間近に馳着て其處にあるは源八が徒黨ならずや當の敵たる我を討たず恨なき多勢を殺し其儘引退くは卑怯なり引返して勝負を決せよと喚はりながら馬より飛下り鎗おつとりて立向ふ源八か徒是を見るより何かは少しも猶豫すべき我討留んとする中にも源八は目ざす敵は隼人なり彼を討ち得ずかへりがけしは生涯の遺憾なりしに今當の敵の追來るは是れぞ天の與なりと隼人を目がけ槍先鋭く突かゝれば隼人も鎗さし向け一上一下突戰す隼人が從者は隼人を助けんと後に控へ勝負を伺ふ同從者太郎兵衞五左衞門は殊勝にも主に力を添んと多勢を相手に切結ぶ源八隼人は人交りもせず火花を散らし戰ひしが隼人いかゝしたりけん西側の大溝に足を踏すべらし横さまに落入り倒れしかば源八透さず飛かゝり只一鎗に突貫き忽ち首を搔き落す太郎兵衞五左衞門は此躰を見て勇氣も拔け二人共々討れにけり最初隼人が後に控へ居し下僕は逃て行方を知らずこれを追捨にして今は是までなり一同して退去せば人目に立たん首級を亡父の墳墓に供へざる内に異變ありては詮なしと別々に退散す源八は途中に於て一の古箱を購ひ半齋隼人父子の首級を納め心利たる若黨を呼び汝は是より道中に心を付て此首級を携へ宇都宮に至り先考の墓前に供へ立歸り來れと命す若黨領承し其箱を負ひ東をさして別れ去りぬ斯く散々に別れ

て退散せしかば一時は互に所在を知らざりしとぞ既に組屋敷構内に於て復讎の大騒動ありし旨を支配頭七之助に急使を以て注進に及びければ七之助も大に驚き異變の旨趣を具狀す牛込御門外の御堀端に於ても變事ありしを以て當番方よりも御目付に達し神樂坂下市屋の前戰場となるのみならず隼人が首なき死骸は町方持の大溝内にあれば同町吏よりも町奉行所に注進に及び檢使淨瑠璃坂上の邸内及牛込御門外等の有樣を見聞し其旨を町奉行御目付兩役へ具申しけり又兩役よりの上申によつて執政先づ下知して源八等捕縛の命を下し大目付御目付の兩役に達し万石以上以下の武家方に布令し町奉行に達して浪人奥平源八同傳藏夏目外記等の輩其行方を知る者あらば早速訴へ出づべし若し一宿させしめ或は隱し匿く者あるに於ては屹度曲事たるべしとの嚴令を布告せられ近鄕近在には同斷の旨を御勘定頭一承り代官をして嚴達させしめらる、斯く搜索嚴密なる上に其黨主昌能に令ありて外記の父源八の祖父なる夏目勘解由は同十六日に江戸に於て逼塞を命ぜられ昌能の腰物奉行菅沼伊兵衞に同斷逼塞、外記が從弟桑名主水奥平總兵衞桑名源左門衞生田權右衞門奥平五郎左衞門奥平久之丞以上六名は山形に於て逼塞す其他讀愼の者廿餘人ありけり、話變りて源八等一時散々に分れ立退しが追々相集り源八衆に對ひ讐の首級を亡父の墓前に供へざるまでは存命んとも思へ今は世に念ひのこす事もなき身のいつまで斯てあらんや若し躊躇して捕吏の爲に縛せらるに至らば武士の身

の大耻辱にして後世に汚名を殘すべし速に自首して死を潔くするに如かずと發言す皆々一同其言を可なりと感じ同十七日外櫻田なる井伊掃部頭直澄の邸に至り各々名刺を出し我等は去る二日の夜市ケ谷淨瑠璃坂に於て復讐せし者どもなり專ら行方御搜索せらるゝを傳承せしかば即刻自首すべかりしを遠方各地に別れ居り速に會合する事を得ず不本意ながら延引相成り漸く貴邸迄自首の爲め參上せりと述ぶ取次廣瀨主殿松平武太夫出會ひ源八より委細を聞取りければ傳藏外記の兩人も其語の足らざるを補ひ尙三名連署自首狀を呈しける、是より三名は尙語を繼ぎ斯く我等自首仕り候迎決して助命を願ふの心底毛頭これなく只然るべき御處刑を蒙ふなり宜しく其の旨を含まれ主侯に上申を請ふと述べければ取次の兩士は奥に入て其主直澄に三名の自首の旨を逐一具申に及びける直澄聞て奥平家は美作守信昌以來其家政宜しきを得治國摸範とも賞すへき家風なりしが當主昌能若年にて統馭軟弱なるより最前嚴禁を犯すものあるのみならず吊儀の庭に重臣等刄傷に及び其末門閥の士數名國を立退く等の不政に至り竟に封を削られ宇都宮を轉し山形に移さるゝといへどもいまだ全く信昌以來忠昌までの士風を失はず三士の者等が神妙の自首感歎するに餘れりとて直に三名を奥の小座敷に通し先づ懇切に饗饌し尙委細を聞き取り始中終變る所なき神妙の擧動感心せり早速執政に達し公裁を仰ぐべければ心閑かに待たるべしとて長屋の内一ケ所を明け三士を其處に移し居らしめ尙隼人の

餘類忍び入らんも計り難し他所より出入の者は嚴重に穿鑿すべし三士の居室には給人十二人徒士十二人付添ひ晝夜交番怠るべからずと命し三士の側には茶坊主を付置き其用事を勤めさせしむ等最懇切なる欵待なり三士の從者六人も其次の間に居らしめ是又丁寧に處置せらる又三士自首の屆として家士吉用隼之助を使者として執政に達し程なく直澄登城し一應執政に面接の上自首の神妙なる擧動を陳述ありて其日は其儘退城し翌十八日直澄より訴訟の事件あるを以て總出仕すべしとの令ありしかば大目付評定一座布衣以上の諸有司悉く登城せり直澄も早朝より登城ありしに昨日訴へし所の奥平源八外二人の處置を評議に及び衆說各々意見を異にし三率行の說は假令復讐の名はありとも大勢徒黨を與み府内を憚らず同心の組屋敷搆内に亂入せしは公儀を恐れざる所爲罪甚だ重し死刑相當勿論なりと評す大目付御目付の兩役は其罪狀の輕からざるは勿論なれども其根原は孝義より出たる所なれば亂暴を以て處刑あらんも愍然なり假令死刑に處せらるゝとも士法を以て處置ありて可ならんなど述議論紛々たり直澄は熟ら衆說を聞き畢り執政に對し蹤跡搜索の三士嚴躍あらんは勿論なれども自首せしは公儀を恐るればなり又多勢をかたらひ討入りしといへども同族親戚其他家從のみにて他人の無縁なるものを一人も加へしにあらず是れ徒黨といふべきものにあらず尙府内を憚らざる罪は免れ難しといへども現在親の仇たる者府内たりとて討たざりせば其仇他方に出ざる日は生涯嘗

を報ずる事なり難く孝子の本心これを忍ぶ事を得んや斯く上を敬し孝義を立たる者を一途に暴發の者と見做され重刑に處せられん事悶然なり仰ぎ願は三士を直澄に永く預られん事を宜く言上あるべしと思ひ入りたる躰にて依賴しけるに執政等は兎に角即時上聞に達して親裁を仰ぐべしと協議の上頓て上聞に達せしかば將軍家綱公委細を聞かれ無論死刑相當のものなれども直澄が達ての請願默止され難く特旨を以て其請ふにまかせ死一等を宥め遠流に處すべしとの台命ありしかば是より三士は伊豆の大嶋に流す事と定りければ直澄は歸邸して三士を呼出し豫ての希望は領地彦根に留置んと思ひしも台命重ければ心に任せず殘念ながら遠き海島に送るに至るは吳々不本意なりといへども爲方なし併し各々方は未だ年若なれば末頼母しゝ暫時在島せば時機を計り重て歸參の愁訴に及ぶべしと懇篤の說示ありしかば三士始め從者六人は其懇情に思はず潸然落涙し深く恩儀を謝しける同廿一日伊豆の代官伊奈兵左衛門御藏奉行間宮造酒之丞より明朝出船の事を達し來り直澄日限切迫なるを嗟嘆あれども爲方なければ家臣等に命じ船中の用品米穀鹽味噌をはじめ諸調度に至るまで與へしめ奥方よりも出船の際祝ふべしとて節分の豆に熨斗蚫を添へて贈らるゝ等殘るかたなき愛憐深き恩遇に三士は只管多謝するのみ尙遠流の者滯刀の例を聞かずといへども直澄預りて遠流させしむる上は帶刀も適意たるべき旨を達す三士は我々罪人に斯まで特別の恩命を蒙ること死しても忘るべからずと

厚く謝し明朝出立の準備を爲しける翌日各々駕籠に乘り其從者は銘々主人の駕籠の左右に付添ひ尚直澄の家人其左右に十二人づゝ同心百人駕籠の前後を守護し騎馬の士十騎宇津木治郎左衛門吉用隼之丞後騎して海賊橋船手頭間宮造酒之丞の邸に護送し流人船に乘らしめ直に開船して大島に送りける、其頃の落首に

かたり出す淨瑠璃坂の敵討扨も其後流されにけり

是より前過る二日復讐の風說都鄙に高く當時の談柄となりしかば忽ち其事遠近の諸國に傳聞し半齋の弟にて當時宇都宮の城主なる松平清良の臣奥平源四郎並に同人の男彌十郎半齋の甥にて武州岩槻の城主阿部備中守正邦の臣本多瀨兵衛等之を聞き兄伯父の讐手を束ねて座視するに忍びず源八等が疾く遠流に處せられしを知らざれば共に其主〳〵に暇を乞て出府し源八傳藏外記等の動靜を窺ふに井伊直澄の邸に自首せしを直澄稟請て遠流に處せらるゝに決し今猶出船まで井伊家にありて守衛嚴重なりとの巷說を聞き所詮大藩の邸内に在ば推かけ討べき手段なければ乘船の途中不意に討べしと粗計策を撰へ其日を待しに豈計んや井伊家の警固數百人卒忽に事をなせば却て世の嘲を受け志を遂べきにあらずと斷念す然れども一旦復讐の爲め暇を乞ながら手を空くせば後日の誹謗も亦面目なしと各々苦心し進退如何とも爲方なく只世上の景況を窺ひ居たりけるに同月廿六日傳藏の妹婿菅沼治

太夫兵藤玄蕃の養子上曾甚五右衛門二人所用ありて本郷の方に至しを源四郎が從者認め走り歸て其主に告げければ源四郎瀨兵衛と評議し彼等は目ざす當の敵にはあらねど其餘類なりせめて是にても討たずんば再び人にあふの面目なしとて源四郎瀨兵衛其外十數名打連れたち湯島五丁目の横町に待伏し兩人が歸路の時不意に飛び出し兄伯父の敵尋常に勝負せよといふより早く甚五右衛門に切掛たりしが其初太刀に右の腕を打落され爲方なきまゝ桶屋へ飛入りしに追ひ來りて竟に討留たり治太夫は心得たりと腰刀を拔合せ多勢を相手に働きしかども相援くる者なければ大勢に前後左右を取つまれ防ぐに方術なくこれも討れて死したりけり是より源四郎瀨兵衛等は直に自身番所に至り兄伯父の仇討のよしを訴へけるにより町吏事の旨を町奉行所へ注進せり町奉行渡邊大隅守は翌日一同の者を呼出し委細糺問の上揚屋へ入れ改き再復讐の顚末を執政に具狀せしに事柄容易ならずとて大目付高木伊勢守守久御目付土岐十左衛門頼親に係りを命ぜられ守久綱貞頼親評定所に於て追々糺問を遂げしに復讐の趣旨立難きに決し同五月六日源四郎、同人男彌十郎、瀨兵衛の三名は遠流に處せられ隱岐國へ移されけるといふ、さても源八外記傳藏の三名は寛文十二年二月廿二日の朝井伊侯の邸内を出でゝ間宮造酒之丞方へ護送せられ其日出帆せしが涙しづかにて船は陸地を行くが如く海上無難に同廿六日の朝大島にぞつきける、素より罪人の身とて心浮き立つほどの事はあらねど井伊侯の惠

み深くして衣食に乏しからざれば何となう心平かにして島人などに恭しくもてなされ、やがて子弟に手跡讀書などの授業しけり斯かれば身に思ふ節もなく心にかゝる隈もなく今日とくれ明日とあかし早くも十年の星霜を過しける、さる程に天和元年の春計らずも赦免の奉書を戴き夢かとばかりに悅び合ひて江戸に歸り直ちに井伊侯の邸に至り重ねて鴻恩を拜謝しけるに井伊侯早速三士を召して祝盃を下されし上三士を井伊侯の領地なる江州彦根に送り各々百人扶持づゝ賜はり其後ち擧げて家臣に列せられ三士ともに二百石づゝを賜はり屋敷を拜領して其子孫繁昌しけるといふ、

高田屋嘉兵衛……堅忍……我心匪席不可卷

數十年の昔北海に渡り荒茫漠々の地を拓いて今日の文化に向はしめたるは實に高田屋嘉兵衛其人の功績と云ふべし嘉兵衛は淡路國津名郡都志村の生れにして父を彌吉と云ひ世々商人にして彌吉に六男あり嘉兵衛は其總領息子なるが傾伽は雛子の内より其聲諸鳥に勝るとかや實にも嘉兵衛は幼きより剛氣にして兎角人と爭ふ事を好み一度も敗を取りし事なくまた朋を多く集めて嘉兵衛餓鬼大將となり日毎に戰陣遊戲をして屢々諸方の小供に傷など負することありけるゆゑ四隣の者も大ひに嘉兵衛を憎みし内嘉兵衛或る船頭の許へ住込み船こぐ道を習ひしかど痛く使役さるゝより忍耐できず逃げ渡りその後は船乘を業として人々に傭はれ居たれど元より船頭などに使はれて一生を終る心なければ是に於て五人の弟を引連れて兵庫に赴き晝夜汗を流して金を貯へ大船を造りて種々の品物を積乘せ一期の浮沈のるか反かの運だめしと遠く松前に至りて之を商ひしに意外に儲けありて家も富裕になりぬ然るに寛政十一年幕府蝦夷を招撫んとして審院番頭松平忠明 勘定奉行石川忠房に後志擇捉の諸島を巡視せしめて方略を定めんとし又よき航海者を求むるに嘉兵衛は固より大志ありて機を

待し事なれば之を聞て大ひに悦び早速弟どもを集め申けるやう今我家の身代汝等の力に依て斯く迄富裕にはなりしかど又一つには御國恩にも依るなれば我今募りに應じて咄か御國に忠を盡さんと思ふは如何にと問ふに皆々そはよき御心がけと大に感じ相談頓にまとまりしに嘉兵衛募りに應して國後に至り風浪を測りて漸く擇捉に達するに當嗚は見渡すかぎり原野茫々として土人の數も少く海岸には魚類あつまり手にて捕ふる程なれば嘉兵衛大ひに悦び直さま積來りし粱十七ケ所を設け土人を種々に諭し漁業の道具を備へ衣食を與へ我國の有樣より御國恩の深き次第を說き聞かするに土人も打悦びて漁業に從ひしに嘉兵衛ひと先松前に歸りこの趣きを詳かに上申せしかば早速役人は嘉兵衛を案内として擇捉に渡りて巡廻すこの功に依りて嘉兵衛は享和元年二月俸米を賜はり官船の長となれり是より數々同島に往來し身代いよ〳〵富裕となり支店を松前函館に開きぬ斯て文化四年となり魯西亞の船樺太に渡りて營所を燒き船を奪ひ散々の亂暴を働きしを漸々にして追ひ散せしが同じく八年魯將ゴロヲン、リゴルドなる者軍艦を帥ひて蝦夷の諸島を測量し國後に錨を卸せし機を窺ひて我國の官吏はゴロヲンと水夫七人を捕へて松前の牢に打込みしをリゴルド聞て大ひに恐れこはかなはじと夜に紛れて遁去りぬ扨是より以前の事南部の人にて五郎次と云ふ者あり魯人の爲に捕へられて彼國に流浪し言語も覺へて我は蝦夷の長官中川瓦左衛門と云ふ者なりと詐り居ける然にリゴルドはゴロヲン等の擒となりしを痛く憂ひ瓦左衛門によりて之を取返さんと思ひ同く九年八月リゴルド又々二艘の船を發し瓦左衛門と漂民六人を送り國後に來り只管に前の罪を謝しゴロヲンのゆるされん事を願へども許さず却てゴロヲンは既に死刑に處したりと告しめける是に於てリゴルドは大ひに怒り何卒して我邦人を捕へ其實否をたゞさんと其の機を窺ひ居けるに折しも嘉兵衛擇捉を發船し函館に入らんと乘組四十四人にて搖あげ搖下ぐ荒浪を事ともせず乘切り來るに忽然耳許に大砲の音響きわたり凄ましなんど云ふばかりなし左れども未だ夜は明けず四方は霧深く下りて咫尺も辨ぜず人々たゞ腑をうばわれ立騷ぐを嘉兵衛漸くにして之を制し靜かに舳頭に至り向ふを見るに外船近寄り來るにぞ俄かの事といひ退がの嘉兵衛も暫し茫然たりしが乘組の者等は一人として役に立べき者なく一同に狽狽さわぎて船底に匿れ神佛を祈念して頓へみるにぞ防禦ともならず是に於て嘉兵衛心を決し泰然として大胡座をかき近よる模樣を詠め居たりぬ頓て外船は近々と乘付け數名の魯西亞人劒を拔き鐵砲を列ねて亂入し嘉兵衛を捕んとす嘉兵衛は突然に立あがり屹と四方を睨んで我こそは日本の船師高田屋嘉兵衛なり何故に我に無禮を加ふるぞ返答によりては其盜には得置じと船板どう〳〵と踏鳴らしおどり揚りて呼びける魯人共此の勢に荒膽挫がれ暫しは手出しもならず後込せしが頓て手眞似にて一度我船に來り呉れよとの事に嘉兵衛納得し靜かに衣類を着かへて一刀を腰に横た

へ魯國の船に乘りうつるに魯人七十人嘉兵衛の回圍を嚴かに護り劒戟鐵砲きら〳〵と輝きわたり最どすさまじき有樣なれども滿身膽にて叩きあげたる嘉兵衛のことなれば神色自若として少しも動せず船長リゴルドの前に進みぬ船長も案外嘉兵衛の膽太きに感じ入り頓て自分の居間に伴なひ入れ種〻に饗應し後に小本を出して日本擇捉の中川良左衛門と云へる者を知り給ふかと問ふに一向に知らずと答ふ然らばとて今度は書翰を出して見せける嘉兵衛熟〻之を見るに皆國字にて記し中に國後の役人に贈りし文あり是に至つて始めて中川良左衛門と云へるは南部の五郎次にて先に日本に歸りたるを知りたれば嘉兵衛はリゴルドに向ひゴロヅン等の人々は皆な恙なければ安堵あるべしと云へども容易これを眞實とせざるに然らば是非なき事なればと腰なる一刀を渡し若し我が詞に相違あらば其時にはこの刀をもて我が頭を刎ねよかしと眞實を面にあらはして一厝聲を勵しぬ漸くにしてリゴルドも疑を解きこの上は乘組の水夫四名と共にひと先づカムサツカまで來り呉れよとの事に嘉兵衛容をたゞし他の者は何事をも辨ざる者なれば連行とも何の甲斐かあらん我一人行んと言へども是を承引ざれば今はとて船に歸り乘組人の内より吉藏金藏文次平藏の四人を撰み出せしに他の一同の者皆涙を流し俱に連行れよとて只管に別れを惜たれども何と詮方もなければ國後の役人に一封の書を送り某等今度不幸にして危難に遭外人の手に捕はれ遠く彼地に赴けども決して志は變らずこれも皆な御國の爲めなれば縱へ身を碎き骨は粉となつて散るとも只今までの氣節は失なはざるべし云々また家へ宛てたる一封の手紙を認めこれを乘組の者に托し其れより米油鹽類を始めとして衣類道具に至る迄魯船に運び込み乘り移りしにリゴルド小船を出して嘉兵衛の妾を迎へしに其厚意は賊に辱なき次第なれど今貴國に行くに婦女などを連行んは如何にも心苦しければと切に斷るにリゴルドも大に其の志の壯なるに感じ婦女には琥珀衣などを與へける此の夕魯船は出發する前に水を汲入れんとすれども岸を守る者ども拒みて許さゞるに嘉兵衛立出でゝ十分に水を汲込しめ日本海八月の空を後にして船は出發しシコタン島を過る折しも遽かに異風吹起り其の凄ましき云べくもあらず數日の間何所ともわかず押流されしうち嘉兵衛水底の淺きを認めたれば此所へ碇泊する方よからんと云に一同も之に從ひて錨をおろし暫らく爰に船がゝりせし内風も漸やく止み東の空もほの〳〵と曉けわたりしに嘉兵衛立出て岸を詠むるに山岳聳へ岩石峙ち見渡すかぎりの銀世界に始めて魯西亞の領分に入りしを知りぬ斯くて或る日の事リゴルド嘉兵衛に向ひてかねて虜となりしゴロヅン等の樣子を聞くに如何にも其の人は丈高く顏かたち威あり煙草を好まずなど語るに始めて其の恙なきを知り大ひに喜びけるがまた中川良左衛門と云へる者を知りやとの事に嘉兵衛うち笑ひ中川は詐りにて實は奥州南部の五郎次と云へる下賤の者なりこの男少〻文筆あり其れゆゑ國後の書役となりし旨

を聞るにリゴルド始めて詐られしを知りぬ是より嘉兵衛を手厚く待遇し部屋をも一にして起臥を共にし間もなく船はカムサツカに入港し俱に上陸してリゴルドの宿に至りしが是よりいよ〳〵厚き待遇を受け幾日をか過しける然るに嘉兵衛はまだ言葉の通ぜざるに當惑しよき傳もわれかしと待つうちに近傍のテーリカといへる小童の今はよく馴れ親しみたれば日々に戯れながら言葉を習ひ覺へ二月ほどにして普通は覺へ込みたれば或日リゴルドに向ひ客言葉にも通ずるやうになりしかば是より例のゴロヲンの事につき種々の相談をも爲し度旨を述べしにリゴルド喜びこの事につきては我も日夜心を苦しめ居たる所なれば最と幸ひなりとの事に嘉兵衛の云ひ出でけるやう先年貴國のポーシーウと云へる者きたり我蝦夷を散々に荒らしたる故にこの後魯船の近海に來らば皆な悉く捕ふべしとの事にてゴロヲンを松前へ送りしもこの故なりと一件の言葉にリゴルドも打驚ろき實はこの事に付ては我帝も知しめさぬなり其の次第といふは先年レサノツト使者となりて貴國の長崎に至りしに最と無狀なる待遇を受け歸國の砌ポーシーウに命令を下し蝦夷地方を荒して其の怨恨に報ひたり然りながら是れも一時の怒りにて非を悔ひ直さま手紙を認めてポーシーウを呼歸さんとしたるに同人は短慮一徹の男なればなか〳〵に受引ずして手紙を火に投込み急き蝦夷へ渡りて腕かぎりの亂暴を働らくに至れり是に依て我國の役人共も大に胸を痛め私の怨にて兩國の災禍の端緒を開きては容易な

らぬ事なりと嚴しく其の起因を糺す内にポーシーウは短慮を悔ひ身を投げて終に死しレサノツトもまた大ひにこれを愛へ後に病を得て死亡ぬ是よりして遂に禍を延ひて今日に至りし事なれば何卒推察ありてよきに計らひ給へと云ふに嘉兵衛は打點首我は生れつき愚なれども貴官が若し我を信じて共に兩國の間に周旋して互に宿怨を霽らし專ら平和を主とするの志あるなれば我も又充分に力を盡さんと云ふにリゴルドも大に嘉兵衛の詞に感じとれ我身の爲にあらずして國の爲なれば決して苦慮したまふなと是よりリゴルドは早速旅の準備して都へ發足せしが此頃は佛蘭西のナポレオン大軍を率ひて魯西亞へ攻入りし時にてリゴルドも都に至りしが戰爭の時なれば軍務に悩はしく漸やく翌年の二月戰爭おさまりて歸り來り嘉兵衛いよ〳〵歸國の運になりしに不幸にも文治吉藏の兩人病を得て死亡ぬ同年四月嘉兵衛リゴルドと共にカムサツカを出船し日を經て漸やく國後に着し役所に至りて委細に是までの顛末を述べリゴルドの書信を出すに役人之を披らき見て始めて其の疑を解き早速に返書を認め嘉兵衛又魯船に至りこれをリゴルドに渡し尚其酋より先年の罪を謝し武器財物も悉く返償すべきとの事なれば相違なく囚人を赦し遣すべき旨を傳へけるにリゴルドも大ひに嘉兵衛の働きを感じ功を謝して還る是より嘉兵衛は函館に赴き魯船の着するを待しに九月になりてリゴルド先に掠めし物品を積乘せて着船し品物を返納してゴロヲン他七人を受取り喜びて歸國せり其後は蝦夷

地を荒さるゝ事なく平穏に躋せしは偏に是れ嘉兵衛の功勞なれば上にも之を賞し翌年の三月褒美として金子を賜ひ嘉兵衛は是よりもとの商業を營みます〳〵勵みけるに家富み榮へて常に奴僕を數十人使ひ後に家を舍弟に讓り程なく故郷に隱居せしに淡路侯に召出され小高取となりぬ嘉兵衛は人となり丈短く眼光人を射る言語さわやかにして書は讀ざれども略大義に通ずまた隱居後は只管慈悲を心がけ金錢を惜まず貧人を賑はし親戚を厚ふして樂みとなせり嘉兵衛又大金を抛ちて同國鹽尾浦の港口を開きこれを高田屋港と云ふ文政十年五十九歳を一期として病死せしが人皆これを惜みけり明治十三年　天皇陛下西に御巡行の時兵庫縣令森岡昌純表文を上つて嘉兵衛の功を奏上に及びけるに陛下も感歎淺からず厚く其子孫に物を賜はりたりと承る

根岸鎮衛……奇偉……醜夫を惡く者亦美人を惡く

有情の生身なれば如何なる人とて終生微塵の過ちなくして濟すものは稀なるべし根岸鎮衛は御勘定方根岸肥前守の次男に生れ通稱を善三郎と呼びけるが其實いたつて良からずして父肥前守も大に後來を案じわづらひ何卒して人並に育てんものをと種々に心を苦しめけれど善三郎は父の心の万分一をも思はずして武士の家に生れし甲斐もなく心の儘に振舞ひける然れば父もほと〳〵持て餘し此儘に捨置なば家名に汚點をも付かねまじきに寧そ今の内に勘當爲しなは其のうれひもなかるべしと妻にも此の事を打明て談合の末遂に未だ八歳なる善三郎は勘當と定まり家を追れしかど別に詫んともせず早々邸を出で四谷傳馬町の出入商人總藏の家に食客となりしが善三郎は結句氣心よく邸にありて數名の者にかしづかれ父母に叱言を受くるよりは優なりとて不自由も順着せず早くも三年の星霜を爰に過せしが總藏は當分の事と思ひの外なか〳〵善三郎の邸へ歸るべき氣色も見へずして度々の異見も何の甲斐なければ詮方つきて小僧奉公を勸めしに善三郎は快よくこれを承引總藏の世話によりて近傍の商人へ住込めども朋友と喧嘩などし三日經ぬ間に追出され數十軒を渡り歩るきて腕白の

札付となりしに彌々德藏も持て餘したれどもこの年十六歳の春まで八年の間世話したるものなれば今更手離さん心もなく思案にくれて居たりしが或日善三郎は德藏に向ひ豫て新吉原の遊女町は面白き所にてまた金を得んにも都合よき所と聞けば何卒遊女屋奉公を世話し呉れよと切に懇むに一度は諫めもしつれなか〳〵云ひ出でし事後へはひかぬ氣質を知れば然らばとて連れ立て吉原に赴き其頃廓で一二を爭ふ遊女屋江戸町一丁目の玉屋方へ住込みぬ斯て善三郎は三年程の月日を廓に過ごせしが牛馬の如きかせぎをして何時まで暮さんも呆氣た業なりと玉屋方の暇を取り其後神田に道場を搆へて柔術の師範をする會津の浪人某の下僕となりて暇ある毎に柔術を習ひ覺へ間もなく立派の技倆となりしかど善三郎は父の許へ詫て歸らんとはせず寧そ武士を止めるなれば終生を遊んで暮さんものと是に思案を定め師に暇を乞ひて江戸を出發し武州八王子に至りて土地の大親分と敬はるゝ長脇差長右衛門方へ行き乾兒の類に入りて何時か背中へ矢根五郎の刺繍をさへぼりぬこの矢根のところ白く肌の透て見へければ白根の善三と異名を呼れ追々顔もうれしに或時五兩程の金子を懷中し中仙道の上板橋清水の森と云ふ所にて閻魔の藤五郎と云へる博徒が花會を催し居る所へ賭場荒らしに踏込しが緣となりて遂に兄弟の義を結びしが閻魔の藤五郎は相摸屋と呼びて其頃江戸湯島天神前に住居をしけるにより是より善三郎も同家に寄泊りをなせしが四谷の德藏には永らく世話になりたれば久

しぶりにて尋ねしに德藏は其後商法の手違ひより多くの負債をなし今は夜逃をもせねばなり難き仕儀となりし趣きを聞て善三郎氣の毒に思ひ金五郎と云へる同じ兄弟分の者に賴みて金子を調達せしが其後金五郎は不圖も人殺しの嫌疑を受けて牢舍の身となりしに善三郎は大に慾き種々心を痛めしが頓て證據を得たれば急ぎ奉行所へ訴へ出んと思ひしが當時南町奉行は父肥前守なれば今更此有樣にて對面せんも恥かしきが若し此儘に過して罪なき者を所刑して後に惡人あらはれなば如何ばかか父肥前守の恥辱ならん今は決して躊躇べきの時にならずと頓て四谷の德藏方へ馳せ行きて種々に賴み身には見るもいぶせき襤褸をまとひ古手拭にて頰かむりを爲し一箇の面桶を持ち乞食の姿に扮裝て數寄屋橋内の町奉行所の近傍を徘徊せしが根岸肥前守は浩かるべしとは夢にも知らず西丸より下りて南町奉行所の門前まで馬上緩かに來かゝりける善三郎は今こそと横合よりお願ひの趣ありと飛出しを近侍の者どもそれ直訴の曲者なり逃しはせじと左右より捉へんとひしめくを物ともせず突のけ進むに今はとて前後より打てかゝるを面倒なりと小腕とつて大地に投げつけ尙ほも進んで馬の轡へ確乎と縋り天地間に身の置所なき白根の善三御訴訟申す今罪なき者牢内に苦しむ聖代の不德下の難儀これに越す事候はず何卒御慈悲を以て我願意御聞届下さるべしと云ふ顏偶肥前守のぞき見るにこは奈に十八年前に勘當せし善三郎にて今は身躰一面に刺繍をなし身は襤褸に纏はれ居れども昔

懐しき我子の顔に暫し見つめて詞もなかりしが稍ありて誰かある此者を内控所に引置けとて門内に入りしかば善三郎は神妙に細にかゝりて引かれける頓て庭先へ廻され孤の上に坐して下役両三名附添ひ居りし所へ肥前守椽端に出でゝ細目を解かし下役共を下らせ密かに親子の對面を遂げ善三郎は是より邸を出でゝ今に至るまでの顛末を委細に述べまた金五郎は眞實の罪人になき旨を告げ立派に證據も立ち程なく人殺しの罪人は捕はれて磔罪に行はれ金五郎は嫌疑晴れて出牢しぬ斯て其頃の老中間部下總守この事を聞て密かに肥前守を招き種々懇篤なる相談ありければ遂に善三郎は勘當許りて家に歸りしが總領善之助は先頃急病に死亡次女は本多家へ嫁づきたれば跡目は善三郎の打續ことなり是より邸にありて只管學問を勵み大に先非を悔ひたりしが間もなく聖堂に通ひて五年の間和漢の書籍に眼をさらし十分螢雪の修行つみて勘當の許りし八年後始めて御勘定に撰ばれ其れより追々進みて公事方留役勘定吟味役勘定奉行等に任せられ後終に寛政十年十一月南町奉行となり今は亡き父の名を繼ぎ肥前守と受領して鎮衛と名乗り祿高千石を領せしが鎮衛は長く各所に流浪せしかばよく下情に通じ其の上才智勝れし人なれば大に功績あらはれて世に刺繍奉行と稱譽られぬ、俗傳に遠山金三郎或は能勢肥後守など云へる話あるは右の事實を根據として例の附會せしものなり

大石眞虎……磊落……眞虎は死して名を殘す

有職故實の翻を以てつとに名譽高き大石眞虎の一生は磊落奇偉求めずして可笑きふし多く其行ひ或は中道を外れたりとも其氣節は邪なくして貴むべし眞虎は尾州名古屋の醫師小泉隆助の二男にして寛政四年に生る母は浪花の狂歌師一本亭芙蓉の娘なりと幼名を門吉太郎また衛門七とも小門太ともいへり眞虎は生れ得て何業にも器用にして取りわけ畫を巧にかき色白く眉秀若き頃には今樂平などと綽名を呼ばれて若き婦人連の月旦には何時も第一位を占る程なれば已れも其方に心浮かれ毎夜宮驛の遊里に遊びたわむれけるに父は度々誡め醫道の家に生れながら其業を學はず剩へ女色にふけり淨瑠璃本に頬杖つき左なくばむだ書の翻案に其日を送るが如き果けたる振舞は何事ぞと叱りけるに何時も只頭を下げて誤り居るのみにて別に改むるともせず左れど幾分か瞳みて夜は遲く出るとも朝は必ず父の起出る前に歸るやふになしたり或朝例の如く宮の遊里より戻りしが父の手前強て睡き目を見はりて玄關の方に居たるに常々出入りの宮の看屋來り今日は如何と呼ぶを中の間に居りたる父は聞付け立出で密かに件の看屋を庭に呼入れて何事をか頻りに呟く樣子なれば眞虎は是を見て必定我

が宮通ひの樣子を探り知らんと仕給ふならんあわれ斯くまでに隱し果せしを彼が爲に露顯して又もや懲さるゝ事か左るにても何事をか告げんとすると襖一重隔てゝ立聽に遑は思もよらず父は前夜宮の某娼家に遊びしが皈朝の別に煙草入を忘れ左れば明日にても次手に取來り呉よと頼むにぞありける眞虎はひとり笑壺に入り元の座に戻りて素知ぬ面持して居たりしが其夜暮るを待て宮に至り散々に遊び興じ翌朝遲く歸り來るに父は嚴然として衞門七昨夜は何所へ行きしぞ此間聽めし舌の根もかわかぬ内にはや打忘れて此有樣は何事ぞと苦り切て云ひ放つに少しもおめたる色なく袂より煙草入取り出だし實は昨夜父上の御使に參り候と目前に差出だされて遲の父も暫し言葉なかりしとぞ眞虎の天性斯の如く頓才ありて人の謎を解きまた能く人の頑迷なるを諷せり眞虎十五六歲の頃より月樵を師として畜を學びしが其の筆才驚く程なりしとぞ其後江戸に出で松平樂翁公未だ田安家に居りし頃總て古式によりて舞樂の木偶を作り此模樣を眞虎に命ぜられし故好める道とて故實を調べて勸めける是より特に舞樂の道を深く研究しまた伊勢某に從ひ武家の古實を學びたり其後京都へ上り又長崎まで至り同地に暫らく滯在して繪を業とせしが或は畜は賣れずして幣間の如き事をして糊口せしと又大坂に遊び後に安藝の嚴島へ赴き間もなく名古屋に歸りまた大坂に出で常住の所なかりしは此の人の一癖ならんか大坂にありて幣間をせしと云ふ頃吉田屋に藏する夕霧の文を美くしく摺りて之に

句などを添へ百五十回忌の追福とて雅客たちへ贈る者あり虎眞は謂へらく夕霧のみを追福して其沙汰伊左衞門に及ばざるは心外なりいで我伊左衞門の爲に追福を營まんと靑中と云へる悪紙へ自畜と追福の句を摺りて配りたりといふ又酒をよく飲みて滑稽諧謔座興を助く或時某方へ招かれて酒宴たけなはに耳熱する頃席を立ち我いま吾妻ぶりの沙汲を踊りて見せ申さんと順て手桶貳箇を荷ひ出で之を田子とし腰に五布浦團を纏ひ腰蓑と見せて座敷に躍出でたる其踊りぶり俳優も及ばぬ身のこなし一座感に堪へ暫しは鳴も止ざりしとまた或時某方へ貴人來り夫を待遇んとて招かれ席畜を頼まれけるに其の依頼方如何にも尊大なると且つ我技を以て貴人に諂ふの具とするを心に怒りながら酒宴の席に出で其場へ出でし筆硯の具を片寄せ先づ一杯傾けて後の事と筆洗ふ器に涙〳〵と引受け快げに飲みほし最と醉たれば一さし舞て興を添へんと云ひさま敷たる毛氈を腰に卷付け踊り狂ひて其盤、繪も畜で歸りしとぞ又名古屋の或町に町代を勤むる某といへるは平素町人と云はるゝを忌み何がなして武士がりたく幸ひ町代をも勤むるに肩をいからし本町の大通り狹しと風を切りて通りしが此男猿子狸ゆゑ女房に對しては隨分禮義厚かりしが隣人へは其割にゆかざりしかば譏る人も多かりき此男武士がる所より頭を狹くわづか持二本位に剃り明け大髻に結びて揚々たるを見て眞虎面憎く思ひ如何にもして此頭を人間並に剃り擴げてやらんと謀りしが斯る謀計を廻らす者の近きにあらんとは

神ならぬ身の町代は或時何時の如く程近き金床と云へる髪結床に至り金平宜い天氣でやと壁を掛けたりメレお町代がお出だお前さん跡にして先づ此方へなどゝ忙しき手を止めて奔走す眞虎は急き後より行き床屋を小蔭へ招きて云ひけるは汝の知れる如く町代の可笑頭は當人はよく知れども哀れ養子の悲しさには女房の好みとて迷惑ながら前を狹くなし居れど今汝の手誤りとして少しづゝ剃り擴げんには仔細はない其折町代は他目あれば汝を叱りたりとて決して恐るゝに及ばぬ此事は町代もまさか自分で汝に頼まれぬから己を以て云ふのだが是れは少々なれども其心付なりとて一分銀一つを手へ渡せば髪結は委細かしこまり一月も經ぬ内に並の頭にせん事容易業なりと大きに飲込み町代の頭を剃りにかゝりオイ是は麁相と右の方を一分ほど剃落して是にては外見わるければとまた左の方を當分に剃り擴げて髪を結びしまひしに町代は頭へ手をやり以來氣を付ろとて睨廻して出で行たり四五日過てまた髪を束ねに來たりて過日の如き誤すなとて頓て取かゝらせぬ床屋は委細飲込み顔にもてなし又々一分ばかり剃り明けて頓だ不調法と謝るに今更如何もならず怪しからぬ奴と面ふくらし散々の躰にて出でゆきけるが又幾日をか過ぎ左も嚴めし氣に其所等を睨め廻して入り來り若し今日麁相を致す時に於ては其分にはさし置かぬと云ふに床屋は揉手をして何も彼も飲込居れば御心やすく思召せとて頻りに打笑むにぞ町代ハタと怒り度々麁相を致し置き人を笑ふとは不禮な振舞と早

や息まき事六ケ敷なり行に床屋初めて其と知り眞虎より一分貰つて頼まれし事を打明けるに町代烈火の如く怒り直に眞虎を呼び付け何の恨ありて我頭を弄りものにせしぞと壓を叩いて責かくるに眞虎は差俯向たるまゝ只管誤り入るに詮方もなく貴様の如き者は誤り證文を板に摺りて置がよし戯れも程にこそよれと散々に叱り付られ眞虎一言もなくはう〳〵の躰にて逃帰りしが直に瓦板と云へる燒場方角などを拵へる家に至り大急ぎにて彫らせし板は「誤り證文の事、一我等〇〇に付貴殿へ對し申譯なし之無儀誤り入り候以後斯樣のやりそこない不仕樣精々心掛け可申誤り證文仍如件〇年〇月〇日大石眞虎〇〇殿」と誤りの箇條を書入れる所と月日と名宛だけ明けしを摺せ翌朝になり町代を訪ひて御申聞の如く早速誤り證文板行に致したりと差出だせしに遉の町代も呆果餘りの事に詞もなかりしが是より己の非をさとりて頭も常並になしいと丁寧なる人物になり此瓦板を今に其家に傳たりと又文化文政の頃名古屋にて狐振舞と稱へ虎子の新しきに玉子の汁など汚げに盛て客を招き困せて興とする事頻に流行し眞虎も此の連中に加はり諸所遊び廻りしが或時亭主番に當り平素より斯る業には工風多き男なれば人々も其日の來るを樂み居けるが扨當日になり夕刻より皆々眞虎が獨住の家をさして赴きけるに途中にて眞虎に出あひしにイザ設けの席へ御案内との事に扨こそと一同後に就て行に頓て横町に曲り怪しの煮賣屋へ案内し畑際の汚き座敷へ通し眞虎は甲斐〳〵し

く立廻りて酒肴を勧め皆々醉たる頃を見て何所ともなく姿をかくしたるを稍ありて知り亭主を呼て聞ば早先刻立皈りしとの事に詮方なく勘定を濟せ左るにても憎き事よと直に眞虎が家に至り見れば手拭にて頭を包み蒲團の裡にもぐり居て頭を擧げて皆様ようこその御來臨なれど悪き風邪にて今日の催し思ひもよらずと苦しげに云ふに皆々打笑ひ其まゝ歸りしが眞虎翌日未明に其人々の家を廻り表戸をほと〳〵と叩きコン〳〵と狐の啼く眞似をして歸り後に逢ひても尚ほ知らず顔するに人々いよ〳〵興じ笑ひしぞ又眞虎の近所三日にあげず夫婦喧嘩をする菓子商ありける眞虎何うがなして此喧嘩を根絶じにして呉れんと考へしに間もなく喧嘩はじまりしと注進する者ありけるに鍾を投捨て飛び出だし菓子屋の前へ行き見れば近所の小見等群りたかりて見物するにいで我れ仲直りさせて呉れんと人を掻分けつか〳〵と店に上り突然其所に並びし菓子を兩手に掴んで群る小見に與へける夫婦の者は此の有樣を見て打驚ろき掴み合も何所へやら眞虎の手に左右より取縋りて先生何をなされますと涙ぐんで咎むるに眞虎は打笑み汝等はいま互ひに殺せ〳〵とわめき罵しりしが何方が死んでも一方は下手人にて命を取らる左れば當家も今が限り死だ後の迫福を營まんよりは兩人が存命の内に施行をなしたらんが增ゆる我いま汝等に代りて執行ひたり此後とも殺せ〳〵が始まらば又きたりて菩提を吊らふぞよと戯れて立歸りしが跡にて夫婦は顔見合せ呆れ果しが此より至極仲よき夫婦と

はなりぬとぞ又名古屋門前町に凝り法華の老婆あり終日珠數押し揉み題目を唱へ戸外の軒に貼り置く御札にまで向ひて高聲に題目を數百遍唱へて四隣の迷惑も思はざるを眞虎面憎く思ひ或夜南無阿彌陀佛の六字を貼置たるを老婆少しも知らずして相變らず此に向ひて只唱へにとなへ居けるに或時法華托鉢の僧不圖軒を見上て心づき淺間しや何時の間に念佛宗となりたるぞやあな汚はしと行過るを老婆慌て止めて軒を見れば何時の間にか字躰の變り居るに打驚き御僧の思召も恥かしや全たく改宗せしにあらず其證據はこれ見給へと踏蹙して佛號を剝して見せけり婆は後にて此の悪戯らは眞虎なりと心づき其後はいと殊勝に題目を唱へ四隣へも憎まれずなりぬ又或時名古屋にて蕃椒の異物を數十種集めて互に誇ること流行しとき百種の上にも出づる名なれば誰も覺へたるものなし或人眞虎に向ひ汝は何事も博く知り記憶も能けれどよも蕃椒百種の名は知り給ふまじと云ふに知らぬ事の有べき試に數へ給へと始め十種ほど賊の名を云ひ餘は龍田川の唐にしきのと口より出るまゝ百に滿ちたれば聞く人感にたへたりとぞ山王の神職にて白鬚老人と名乘る人滑稽嘴口なりしが或日眞虎同家に至り社壇の扉は何方へ開くものなりやとの問に白鬚老人打笑みてンハ外へ開くなり三ツ子も知れるにと云ふを左らば尚ほ問申さんに謠曲の竹生島に我は人間にあらずとて社壇の扉を押開きとは云は

で引開きと謠ふべしと云ふに老人も口を噤みしと又眞虎が近くに物識自慢の陰陽師ありける最と憎げなれば是を懲さんと豆腐一つを細に碎きて梅酢に浸して嘗試むるに其味ひ何んとも知り難し彼の陰陽師が入來るを待て其壺を前に出だし近頃長崎の友人より蘭物の由にてわざ〳〵贈り越したり嘗め試むるに腐りたるにはなきかと思はれど遥々贈り越すに左る物もあるまじ併しながら物識らぬ我等は毒にやあらんと心おかるゝなり願くは何物なるや鑑定し玉へと云へば陰陽師は高慢の鼻を搖めかし其壺を引寄せて一嘗せしが首を傾ぶけ稍ありてハテと手を打ち偖も羨ましき珍物を得たまひたるものかな名は俄に忘れたるが是は此の腐りたるやうなる工合の處が最も珍重さるゝ物なり大切になし玉へと云ふに眞虎は仕濟したりと思ひながら笑を隱し君の御蔭にて去る尊き品なる事を悟りたり君は此品の知己といふべし我が家にありても何にかせん此盤まいらせん持返りたまへと云へば陰陽師は厚く幾度か禮を述べて其壺を持返りたる跡に眞虎は轉げかへりて笑ひしとぞ今酢豆腐とて生利の者をいやしむる詞も或は此等が始めならんか又或年正月の事なり萬歳の來りて門に立つを眞虎呼入れて座敷へいざなひ屠蘇引廻して其内へ太夫と才藏を入れいざ早く舞へよと云ふ見物人とては眞虎一人なり萬歳も舞だよりなく拍子ぬけし才藏も皷を打たずしてぼんとしたる顏付き面目なげに匆々辭し去りたりとぞ是も正月の事なり眞虎父の家の玄關に至るに小き俵をかつぎし乞食來り千

石は千俵萬石は万俵と永々しく饒語をいひて通れといへど聞ぬふりして猶去らず眞虎立出で其文句だけにて一文かと問ふ乞食ぬかづきて一文下されば有難しといふ左らば錢百だけ續けてやるべしといふに乞食は悅びしが一度俵をかつぎて一文句終れば一文與へまた二度目終れば一文與へふ同じ門にて一ッ事を斯く繰返すはさすがに馬鹿〳〵しきと見る二十度程して乞食は逃げ去り次の日より此門へは立ざりしとぞ、眞虎の畜風は四條より入りて土佐を出で一家の風を爲す最も心をつくして學しは飛騨守惟久の後三年合戰の繪卷なり此繪卷中の繪の一所を他を隱して見するもよく云當てたりとぞ始めの畜風は文鳳などに似たり中頃は北齋風も交れり眞虎は瓢箪角力が殊の外好にて足をかゝへたる手を放せば十番のまけに相當すといふ事は眞虎が掟せしなり友來れば頭りに瓢箪角力をすゝめて爭ふ亦一奇といふべし眞虎は己れの眼と己れの技と釣合はず己れの技はまた世の眼に合はず氣逆せて終に發狂せり一旦よくなりたれど聾となれりまた後に發狂し兄の家にても持餘し檻めくものを座敷へ作りて入れ置きしが或日畜をかきたしと云ふゆへ紙筆を與へたれば大きなる達摩を畜きたりは是より少し心靜まり病本腹して大坂へ出でしが其後間もなく名古屋へ歸り天保四巳年四月十四日死亡し名古屋大須の眞福寺に葬むる墓石には生前の遺言により「大和繪師大石眞虎之墓」とのみ記す戒名は遊林信士といふ元より妻なし子なし又門人もありたるならんが失れと知られたるものなし同人

は文章も妙にして書も見事なり又俳諧をよくす其著す所は百人一首一夕話、鹿島國風、鹿島百物、神事行燈初篇、永暦大雑書、花鳥百家發句集等あり其他宮島名所圖繪、尾張名所圖繪にも助筆あり斯く此道に志し厚く高手なるに僅か初老にして寶を易へしは眞虎一人の爲めのみならず美術の上に付ていと惜むべき事なりといふべし

後藤又兵衛……剛勇……噬氣滿身

萬物と共に盡きず卓然として朽ざるものは名なり後藤又兵衛基次夙に英名ありあくまで剛氣にしてよく大節を知る基次幼名を甚太郎と稱び元龜二年に生る父は後藤將監とて別所小三郎長治の臣にてかねて勇健の聞へありしが長治は中國の毛利家に屬せしゆゑ織田信長が秀吉をして長治の三木の城を攻させけるとき將監は主家を思ひ種々苦心して長治に降參をすゝめしが却つて老臣の意に悖ひ終に天正八年の正月三木落城の前に討死せり其の時基次は未だ八歳にて父將監もこれを孤兒とするを不便に思ひかねて秀吉の臣黑田孝高とは兄弟の約ありしかば討死の前夜密かに書寫山なる秀吉の陣に忍び行き孝高に對面して基次の行末を只管に頼み快よく相果ける然れば孝高は基次を養ひて後藤の家名を繼しむるとこそ將監への義理なりと隨分懇切に待遇し自分にも長政といへる子息あり此の時は未だ十歳にして佐市郎と云ひしゆゑ基次をば我子と少しも隔なく養ひしに基次も孝高に仕ふると師父の如くなれば彌よ寵愛しける然るに秀吉三木の城を攻るに城郭いかにも堅固にして攻あぐみ或日雨降りて陣中の軍議をも止め諸士を集め雜談の折に孝高偶基次の事を云ひ出でしに秀吉聞て其

の小悴をとゞめなひ來り給へとの事に孝高畏まり頓て基次を遣れ來りぬ秀吉基次を近く招き汝は三木の城の者とのことゆゑ城の樣子はよく知りつらん明白に我に語り聞せよと賺し問ふに如何にも城中の二の丸までは案内こと〳〵く存じ申せども言上致せば如何相なるやとの尋に秀吉打笑ひ相違なく案内致さば大軍を以て城中に乘入り攻つぶさん其時の恩賞は望みに任すべし然らば父もさぞ滿足ならんと云ふに暫し返答もなくさし俯向て居けるが頓て頭をあげ只今案内を申すときは忽ち落城に及び我父も討死を遂ぐべし然れば我手を以て父を害するに異らずこの上の不孝ある可らずと詞すゝしく述べしに秀吉も道理に服し小膝を打て天晴行末頼母しき小悴かなと譽稱へぬ其うち後藤將監討死と聞き秀吉基次を招き汝が父討死してさぞ悲しく思ふならんと問ふに父の討死は兼て期したる事にて暇乞もはや前に濟たれば今更嘆きて詮なしと答へながらも遺がに涙を流す切なる心ぞあわれなる秀吉隙さず然らば父も現世を去り最早城中に親しみもなければ今こそ案内を致すべしと云ふに仰の如く今は何憚る所もなけれど父が討死も主君への忠義なり我今城への案内を致せば父の忠死も空しき道理この儀に於ては承諾致し難しと少しも憚る色なく申せしに秀吉も手を打ち感じける此より間もなく三木の城も陷り斯て天正も十年となり四月の上旬信長の命により秀吉數萬の軍兵を引率し中國の毛利征伐の先陣として備中國へ發向す黑田孝高も隨從て當時我子長政十四歳基次十二歳になり

しを兩人引連れ出陣す備中の敵城は宮地山の城無里山の城河屋の城高松の城日幡の城とて目ざすは此の五ヶ城なれど一城〳〵攻んには暇どり殊には何れも要害堅固なれば秀吉五ヶ所を木火土金水の五つを以て容易く攻落さんと先黑田孝高を河屋の城へと差向けぬ當城はかねて土を以て攻落す謀略にて孝高一萬餘騎を引率し城の此方五六町の所に陣を搆へ秀吉の本陣よりは一千餘人別に兵士百人に鑓包の荷物三十餘駄之を五百人づゝ別け福島片桐宰領し福島は城の左片桐は右にありて謀略を用ひしが當城は向高にして要害堅く前に一丈餘の堀をうがち橋を引き防禦の備へ嚴重にして大手は平地に等しく次第のぼりなれど左右は嶮しく後は巖石嶮々として自から深谷を爲しなか〳〵容易く近よるべき便りなく大手の一方より攻かゝる外は道なき最と難儀なる城攻なりしが孝高は翌日早天より攻寄せ福島片桐は城の左右を堀り其の土を陣へ運びて數万の土俵を作り其の間に奇計を運らして城兵を惱ましけるが此時本陣より送りし荷を披らき車の蠻と輪を數多とりだし組合はし車となして土俵を積べき準備せり基次孝高に向ひ是は敵城の堀を埋る爲に候かと尋ねけるに如何にも今宵此車を押行きて土俵を堀へ投込み勢ひに乘じて攻入る謀計なりと語りしに其は甚だ危ふし其理は是より敵城向高にして多くの土俵を積上げなば車重くして押行くに難儀なるのみならず萬一士卒敵方の弓鐵砲に驚くか或はものに躓づき終に車に押戻されて轉覆ば思はぬ難儀を爲すべし故に今車輪を三箇

にして前に小輪を附け後へ大輪を二箇附けて押行けば向高も平地に異ならずして最と心やすかるべしと述るに孝高大に感じ早速基次の詞に從ひぬ元來本陣より送り來りし車輪は大小打雜ぜし物ゆゑ極めて都合よく忽ち百餘輛の車を作りあげ一輛に土俵五六十積上げ寅の刻を合圖に敵城へ押行きしに果して車重からず易々城際まで押登り件の車を堀へ投込み之を足掛りとして乘り入らんとするに城中の者ども月あかりにてすかし見て大ひに驚き扨は敵の寄たるぞ防げ〳〵と松崎太郎左衞門叱り呼はり下知すれど只一同に騷ぎ立ち狼狽まわる其隙に早や寄手城中へ亂れ入り長政基次兩人も扳がけして先手に加はり城中へ乘入りよき首を取て孝高に見せけるに大ひに怒り重ねて斯樣な振舞なす可らずと敎訓して陣中へ送りかへしける斯くて城將松崎太郎左衞門も自害してさしもの堅城もたちまち落ちけりこれ一つには基次が考案圖にあたりし手柄にもよるべし續いて高松も落城し毛利三家と對陣して秀吉は只管信長の出馬を待ほどに六月三日の夜京都の飛脚到着し昨二日信長本能寺に於て明智光秀の爲に討れし旨の注進あり秀吉大ひに驚ろき一先づ毛利三家と和睦し早速明智光秀を討て亡君の仇を報ひんと高松表を引拂ひ京都を差てはせ登る黑田孝高は先陣に進み兵庫表一里餘り此方の駒ヶ林と云ふ所にて基次行手に伏兵ある事を見ぬき孝高に向ひこれより慢りに進み給ふな左の方は鬱然たる樹木にして必らず伏兵あらんと云に少年とは云へ基次の言葉なれば孝高も少く躊躇大

將の下知を待んと一と先づ手勢の進軍をやすむるに程なく秀吉の惣軍も到着し孝高本陣に至りこの由を述るに秀吉も大ひに感じ我も左こそ考へつれ暫らく爰に休息し敵の謀計につき計略を運らすべしと先づ惣軍を駒ヶ林に休息せしめ頓て計略を以て伏兵を散々に追ひ立て數百人を討取つて通りける斯て秀吉明智を討滅ぼし威勢旭日の登るが如く天正十三年三月に内大臣に任じ豐臣の姓を賜はり武威を四海に輝かしける然るに四國の長曾我部元親自己の威勢に慢し隣國を掠め威を振ひければ同年四月秀長秀次を將として大軍を發し讃岐國へは黑田孝高發向と定まり長政基次も此度の四國征伐には天晴功名を顯はさんものと心がけ居けるが大坂より發船すべきの所折しも風雨しきりにて樹木を吹倒し荒まじき空模樣なれば中々船を出し難く今宵は爰に逗留と決し明日の晴間を待つて勇ましく乘出さんと一同英氣を養ひける基次は長政をすゝめ二十艘の船に屈强の兵士一千餘人を乘り込ましめ四月二十日の夜風波を凌ぎ扳がけして海上射るが如く僅か二時餘にして寅の刻に讃州に到着し土民を案内として高松の城に進みけるこそ勇々しけれ當城は河合民部少輔一千餘人にて守りしが大風雨の後なれば敵兵渡海して押寄せ來らんとは夢にも知らず一向に防戰の準備もなさず塀の破損などを修復居ける所へ忽ち鯨波をあげて長政七百餘人にて大手より攻めかゝり基次三百餘騎にて北の方塀の下へ押詰め大手搦手一度にどつと込入りけるに不意を討れて城中恰から鼎の沸くが如く素肌

の儘にて防戦もなり難く散々に討たれ大將河合も裏道より逃出さんとするを基次追かけ只一鎗に突伏せ首を得て城は忽ち陷りける是より一先づ味方の勢の到着するを待ちしに廿二日の巳の刻頃に後陣一同着船し高松の城に入りて休息しける此時國中の植田には植田角兵衛長曾我部新左衛門楯籠り要害堅固に搆へ植田角兵衛は元より智謀深き勇者にて豫て敵の陣取るべき所に伏兵を設け待かけたるに翌れば廿三日の早天に浮田黒田の總勢八千餘騎高松を進發して植田へ押かけたり基次は敵の謀計を見ぬきたる事なれば早速この旨を孝高に告げ奇兵を搆へ夜討をかけて散々に惱ましければ伏兵も何の甲斐なく切立られて手負討死數知れずして寄手の勇氣いよ〳〵加り勝ほこつて立歸り一息つきけるに東の空ほの〴〵と白みそめける其後寄手より使者を送り天下の爲め國家の爲を述べ降參するとも又は土州へ歸り元親を諫め秀吉の下知に從がふやう兩條何れなりとも思案を定めて返答あるべし味方は既に二十餘萬の大軍にて四國へ亂れ入れば所詮防戦かなふまじと云はしむるに實にもと て速かに角兵衛新左衛門を始め一人も殘らず連立ち土州へ歸り爰に於て讃州一圓は治まり程なく元親も兜をぬぎて降參し土州一國も安堵し諸將皆々歸陣し基次の名譽あらはれ長政も大功なりとて厚く恩賞を賜はりしをこれ基次の功なりとて過半を分ち與へ黒田家の臣として厚く待遇けるかくて天正十四年となり九州の島津四隣を切りなびけて益々威を振ふに翌十五年正月秀長大將として紀州和州及び幾内の軍勢三萬餘騎にて九州へ下向し秀吉も豊前の國へ着陣あり吉川小早川黒田と一圓になつて島津勢の引退くを追ひ基次屢々謀計をめぐらして島津勢を惱ましけるが耳川にて黒田主從敵を追討し大功を顯はせしに秀長大に感賞し自ら太刀一振を長政に賜はり基次には黄金を賜ひしに主從いと〻面目を施しける之より將軍直ちに佐土原まで押行んと進み行く所に耳川より行程七里計りにして山の麓に高城といへる孤城あり三原彈正山田新助なんどといふ武勇名譽の武士を初めとして敵夥多楯籠りしに秀長八萬の兵を以て取かこみ攻立ける島津家久は之を聞き耳川の敗を取かへさんと引返して高城の後結をなし謀計を以て寄手を責め敵陣二ヶ所まで乘取りしが基次忽ち敵の裏をかき散々に駈惱まし終に白濱周防守を討取り勇み進みて陣中へ歸りしかば即時に孝高より基次へ感狀に及び恩賞數多あたへける其後佐土原の島津家久は降參し秀吉秀長の大軍家久を案内として鹿兒島に押寄せしに義久義弘の父子も續いて降參し九州平穩に及びしかば秀吉は目出度歸陣し筑前博多の津に暫らく逗留し戦功の諸將へ恩賞を與へ殊に日向の寄手秀長の下に於ては黒田孝高父子の軍功隨一なりと秀長より申し出しに秀吉則ち孝高を召しあつく戦功を賞し豊前小倉の城主としけるに孝高申しけるやう某父子忠勤に於ては誰に劣るべくとも存ぜず去りながら戦功を立しは先年殿下に拜謁仰せ付けられし小悴の甚太郎事今は後藤基次と名乘る者の働らきなりと始終の謀計を言上せしに秀吉

御感あり對面せんと仰せに從がひ基次御前に伺候するに秀吉はるかに見て先年は未だ十三歳なりしが扨もよき男振とはなりぬ天晴勇士の骨柄頼母し、此度嶋津の大軍を破りし無双の手柄滿足なりとて盃を賜はり手づから太刀一振を與へけるに基次面目を施こしける當時天下の武將として御家人と雖も容易に御目見への叶はざるに基次陪臣として恩賞を蒙むる事ひとへに軍功の爲す所なりと諸人うらやみ感じける、扨も去る天正十一年より秀吉天下一統靜謐になさしめんと心を碎きける甲斐あつて今度島津父子も降伏し萬民安堵しけるに未だ相州の北條氏政氏直等歸伏せず此上は是非なし征伐せんとて天正十八年四月二十萬の大軍にて押寄せけるが此時基次も長政に從つて武功を顯はし遂に氏政氏直は弓折れ矢盡き早雲より五代の名家を失なひしこそ是非なけれ其後奥州の伊達最上佐竹里見の輩も悉く命に從がひ扶桑六十餘州豊臣の武威になびかぬ者もなかりける然るに翌天正十九年より秀吉朝鮮征伐を思ひ立ち其翌文祿元年の春より加藤清正小西行長先陣として西國の諸將皆々渡海し黒田孝高長政父子も催促に從ひ長政は陸路の將に加へられ朝鮮に渡り彼國にて基次初度の渡海第一の軍功をたて普州城の合戰に龜の甲と云ふ車を作り城際へ押詰め石垣を崩して一番乘衆軍に勝ちて名譽を顯はし又後の渡海にも加藤清正蔚山籠城の後結として諸將發向せしに基次眞先に鎗を合して敵を破り比類なき働らき有けるゆゑ清正も基次の武勇を感じ太刀一振を與へける長政も基次が

數度の高名に數通の感狀を與へ歸國の後若し恩賞もあらば折半は汝に與ふべしと稱美しける基次も衆軍の内にて鬼將軍と呼るゝ清正の稱美をうけし事武士の面目此上なしと思ふに又長政もかく申すゆゑいよ〳〵忠勤をはげまんと勇ける其後日本勢大に打勝ち和平とゝのひ諸勢日本に歸陣しける、長政は釜山に殘りて守りしに手勢徒然に堪へかねければ後藤虎狩を催ふして猛虎三匹を獲たれば長政大に悅び之を秀吉に獻じけるに感賞淺からず黒田主從の勇を賞しける然るに其後また〳〵兩國の和平破れ再び諸將渡海し合戰に及ぶ事三年抑も文祿元年より慶長三年迄前後七年の間に亘り今年慶長三年の春より秀吉永年のつかれ出て心地例ならざりしが終に同年八月十八日薨去し大老德川家康前田利家遺言を受け幼君秀頼を補佐し扨朝鮮渡海の諸將を召歸せしに一同暗夜に燈火を失なひし如く愁傷かぎりなし然るに間もなく慶長五年の秋九月石田三成等家康を亡さんと關ヶ原に出陣し東西の勢合戰始りしが長政も濃洲に進發し藤堂高虎田中吉政等と合渡川に出張し大垣の石田小西濱田の上方勢岐阜の後結として押來らん事必定なれば其の押へとして川の此方に備を立待かけたり當日は八月雨の後にて合渡川水かさ增し各自床机に據て川をや渡らんといふ者あり又之を非とする者ありて評議一決せず基次打笑ひ仔細は候はず此川を討死と定め然るべしと云ふに諸將も尤もなりと川を渡す事に評議一決する所へ案に違はず三成三千の兵を率ひて押來りける基次は山田幸右衛門片山

勘兵衛を始め士卒三百餘人を率ひ敵の控へたる川下に廻りて押渡る躰をなすに西方は松田十太夫齋藤權左衛門淺瀬と見せかけ馬を川中へさつと入れ眞一文字に押渡る躰をなし敵を川中へ釣出し鉄砲を一時に放しかけ打取らんとの計略なりしを基次早くも敵の氣を察し鎧を脱ぎ兜ばかりを着して身輕に出たち大將と見せん爲主人長政の陣羽織を着し采をとつて士卒を勵し自分眞先に川中に馬を乘入れ渡せや者どもと大音に呼はり鞍壺搖あげ〳〵押渡り敵の間近く進み黑田甲斐守長政の從兵後藤又兵衛基次日本一の剛の者此川の先陣と呼はりしに上方勢すはや好敵なり討とれと川岸に伏たる兵ども鉄砲の筒先揃へて打掛れど味方の松田の向ふに後藤が働き居れば十太夫が邪魔になり鉄砲の玉は皆水中へ落ち基次の身には一つも當らざりける松田は郎等の鉄砲を追取り馬上より切て放つに基次わざと打落されたる躰にもてなし水中へ横さまに落ち暫らくは影も見へざりしが水練に妙を得たる基次なれば水をくゞつて松田の馬前にあらはれしに十太夫得たりと鎗さしのべ下げ突きにせんとするを基次松田の乘たる馬を前足つかんで引倒し松田を深みへ引摺り込み水中にて首搔き切りて兜を脱せ之を自分に打かむり松田の首へは我兜を着せ太刀の先に貫き向ふの岸へと游ぎゆく浮田の臣齋藤權右衛門も川中に馬を入れけるが此の躰を見て味方の松田後藤を打取りたるものと心得天晴なりと稱美しながら近よるまゝに馬上より手を取りて引上んとするに基次心得たりと齋藤の手をとつ

て引倒せば鞍壺にも堪らず水中へ落入しを基次取て押へ同じく首かき切り即時に齋藤の馬に打乘り味方を招き渡せ〳〵と呼はりしかば郎等片山山田の輩一同に押渡り川上よりは黑田の手勢眞先に進んで押渡り向ふの岸へかけ上る續いて藤堂高虎馬を入れ石田の陣へ無二無三に切入ければ一戰にも及ばず總崩れとなつて敗走す基次急に追かけ突伏せけるに右往左往に散亂す中にも渡邊新之助林利助山田忠右衛門林藤藏等さすが一戰にも及ばず敗走するは無念なりと取て返し追來る敵に渡り合ひ必死となつて戰ひける長政は山田忠右衛門の比類なき働きを見て自身これを討取らんものと思ふ間に基次かけ來り長政の馬前を横さまに駈通り忠右衛門に渡り合ひしが基次の鎗術にかけて並ぶものなければ散々に突立られ終に首を取られける大將分のもの大方討死しければ殘兵ども八方に散亂し黑田藤堂田中の三將川を渡り赤阪に着陣し今日の合戰黑田隨一の功名と記し就中基次水中の働き無双の高名なりと諸士みな感じける長政密に黑田三左衛門を召し今日基次の振舞聊か心得がたし川を渡る時自の姓名を呼び先陣なりと名乘り次に小西の兵を追はんとする時基次我馬前を駈拔け我目ざす敵を討取り自身の手柄としける是れ我を輕んじたる所爲なりと以ての外なる氣色なるに三左衛門これを慰さめ是れ基次敵をあざむかん爲めの所業にしてまた君は眞先に川上を渡り黑田長政先陣なりと名乘りしかば何の不審もなく次に基次御馬先をきり敵を討たる事いそがしき戰場には往々あ

る習ひ君一人駈抜け危ふきと見ば基次に限らず某にても其過ちあらんを思ひ先へ駈抜け戦ふ事忠臣の習ひ基次何ぞ心あつて仕らん必らず左様の事は御心に掛けらる可らず却つて基次の功を賞し御疎意なくもてなし給ふべしと諫めしに長政質にもと得心し三左衛門の詞には從ひたれど心中何となく不快に有し是れ主從義絶の起因なりと後にぞ思ひ知られける、徳川家康は八月十四日美濃の赤坂に着陣し諸將の意を察するに福島正則の心底如何にも心もとなく何卒して跪伏させんものと内々長政に頼みしに長政元より無二の關東方なれば早速に承知し種々に義理を盡して正則を説きしに福島も漸々得心したりければ家康も大に悦ひ大名頭の正則一人違背なきに於ては他の者に假令變心する者出で來るとも心を苦しむるに及ばずと、思ひし事圖にあたり諸將何れも心一致して戦功を立んと勇みける基次は初めより長政の心底面白からず宜敢家康の爲のみを思ひ秀頼の事に就ては聊か思慮せず其上福島に跪伏させん爲め詞を飾りて種々に説きし事心得ずと内々諫むれども長政却て之を無禮なりとして却けゝる斯て彌よ十五日の早天より戦ひ初り長政三千五百餘騎を率ひて出陣し基次も之に從ひ石田の五千餘騎と入亂れ火花を散らして戦ひける、元より黒田の從兵は數度戦場になれたる者共なれば敵の多勢をものともせず駈立て突たて勢ひ猛く振舞しに石田奚驚ろき亂れ騒ぎ立ち遂には敗軍して二町ばかり引退く黒田の兵砂煙りを立て破竹の如く迫立て來るに石田の郎等林宇助き

たなき者共の振舞かな返せ〳〵と呼はり乍ら六尺ばかりの大太刀真一文字に打振つて只一人取て返し黒田勢の群る中へ面もふらずわめき叫んで駈入り當るを幸ひなき廻る基次名乗りかけ鎗を捻つて渡り合ひ人まぜもせず只二人秘術を盡してたゝかひ基次終に半助を討て取り首をあげしに石田勢いよ〳〵亂れ立つ折から松尾山にありける西方の小早川秀秋裏ぎりして西方の大敗軍となり續いて大垣も落城し今朝辰の刻に軍始り今未の刻迄三時餘りの間東西の軍勢數万死生を忘れて戦ひし事なれば見渡すかぎり野も山も士卒の死骸甲冑兵具にて埋め果て喊に近代無双の大合戦なりける然るに大坂城中には毛利輝元秀頼を補佐し關ヶ原の軍勢味方敗軍と聞き大に心を惱ませし折から家康の使者として福島正則黒田長政兩人京都を發足して大坂へと急ぎける此事はや大坂に聞へ下々の者共討手の軍勢向ふぞとて騒動したりしを城中より役人出で制し漸やくにして安堵しける此事上方にては大坂城に防戦の用意するよし沙汰しければ三人の使者はひらかた迄至りて暫らく休息したり此の暇に基次主人長政に近づき密かに申しけるやう何時までも此所に遲滞あらん事よろしからず福島にもすゝめ早く大坂へ御越あり御母公及び諸士にも安堵させ其上にて輝元に御對面あり如何やうとも御計ひあるべく斯樣の砌は種々の虚説となり大坂に防禦の用意あらば一大事にして幼君の御身の上にも及ぶべくと諫めけれども長政此度濃州合渡川の戦ひより基次を不快に思ひしものから忠誠の諫も心

に合ずして猶豫せし後やう〳〵に決心し福島と共に大坂に赴き城に入るに片桐且元出でゝ對面し城中も平常と少しも變らざる氣色なるに安心し頓て且元の案内にて奥に入るに淀の方秀頼を抱きて立出でしに両人平伏しこの後は少しも御心を苦しめな我々かくある上は若君の御威光薄きやうには仕るまじとて其場を退き評定所に至りて輝元に對面し今度の合戦に付き徳川内府の心に疎意なしといへども衆への手前有により御心底承り呉れよと内意を得て參りたりと述べしに輝元別心なき旨を答へ直ちに城を出で川口の邸へ引取り頓て福島黒田本多の三人京都へ歸り此旨委細に述ければ家康大に悦び直さま下向し城に入りて秀頼淀の方にも對面あり片桐且元に向ひ秀頼未だ御幼稚なれば成人ある迄當城を居城とし摂州の内にて御賄ひ料參らすべし幸ひ汝がかしづきたるを以て家老職と定むる旨を申すに且元一旦領承して退き後に福島黒田両人に對し秀頼公の賄ひ料なか〳〵當國一圓にては不足なれば何とか取なし給はれと頼むに長政は此節の事ゆゑ追ての願ひ然るべしとあり正則は片桐の申條尤もなりとて種々取なし終に摂河両國にて百萬石を秀頼の藏入と定めらる基次此の由を聞て彌々嘆息し正則の計らひこそ賊に忠義と申すべし主人長政幼君に對し一點の義氣なき事こそ淺ましけれと只管呟き居ける斯て家康上洛し權威日頃に十倍し終に天下は徳川家の掌に歸し忠誠功勞を盡せし諸將に夫々恩賞を與へ長政は前々より父如水軒と共に忠志を運び殊更此度は諸將に擢んでゝ

忠を盡せしにより筑前一國五十萬石を賜はり筑前守に任ぜられて相良郡福岡に城を築き子孫不朽の基を爲しける依て長政も數年戰勞する所の郎等に恩賞を與へ基次は家人とはいへ由緒ある者にて且つ武功並ぶものなければ數多の所領をも與へ家老の上席にもせしむべきに濃州合渡川以來長政とかく基次の心底面白からず左のみ賞する心もなかりしかど數年の功勞もだし難しとて一萬五千石を與へて基次に云ふやう汝數年の戰功あるを以て此度の所領あて行ふなり謹しんで是を領し我が厚恩を忘るゝなかれと申しければ基次承り仰の如く數年戰場へ出れどわづかに微功を立つるのみにして今諸將と共に過分の恩地を賜はる事忝けなき仕合と拜謝せしかど基次元よりかばかりの知行を悦ぶ器量にあらず然れども如水軒この由を聞て長政を招き基次幼少より御身と共に我子の如く養ひ育て外〳〵の家人とは同じからず又武功も抜群なれば大禄を與へ家門同樣に懇誠を通ずる時は彼も義を知る勇士なればいよ〳〵忠勤をも勵むべしと申しける長政これを聞き父は左樣に慈悲第一に宣へども人の心は計り難き世の中如何にも基次は由緒ある者なればこそ是までの如く厚く待遇せしに自分の功にほこりて我を輕んずる心ありと覺へたり彼も普通の家人なれば早速暇を遣すべきなれども舊功由緒あるにめで〻今度の所領を與へしは莫大の賞なるに然のみ悦びの氣色なきこそ心得ず若年の砌は只管に忠を盡せしかども今は自然と懈心を生じ邪智深くして厚く用ふべき者にあらず且つ智勇武略

勝れし者ゆゑ尤も恐るべき事なれば某し隨分遠慮をめぐらし一萬五千石を與へ置たりと悪しざまに申しければ如水も何の詞なく其儘に差置たり長政是より彌々基次に心を置き外の武士同様にあしらひ密事を談ずるにも殊更基次をのみ除くこそうたてけれ然るに基次に一子あり大次郎と稱び今年慶長六年に十三歳に成ける色白く氣高くして無双の美少年なるゆゑ長政只管是れを望み出勤致すべき由を申し送りしかど基次所存あれば我子の出勤心に望まず是によつて未だ幼稚にして物の用に立申さず今一両年行儀作法を教へ其後に出仕致させ候はんとて辭退するにぞ長政も強て懇望もならず是非なく其儘となり翌慶長七年二月中旬の戒日長政川狩に出でしに基次嫡子大次郎を召連れ川の下にて頻りに水馬の稽古を爲せし所へ數多の屋形船岸に添ふて來りしゆゑ基次遙かに是を見て扨は大守の川狩と見へたり此所は程近ければ漁遊の妨げなるべしと急ぎ川向ふの目標など取片づくるを長政目敏く見て取り今日川狩に出しに計らず水馬の稽古の邪魔いたし近頃氣の毒に存ずる悴大次郎をも召連れ居らば幸なり我船に乘るべし一酌催ふして長日のうさを忘れんと申し送られ基次も力及ばず有難しと早速大次郎を召連れ船に至るに長政も大に悦び基次に向ひ大次郎は明しに勝る男前にて然も而ざし其方に肖たり後年は武畧も嘸と悦び思ふ此後は我目通りへ出で給仕等を願むなりと長政滑せし脇差を大次郎に與へしに基次も殊の外打悦び扨其日も夕陽になりしかど船中には長政餘念なく

酒くみ交すに基次申やう日も追々傾きたれば今日は御歸館あつてよろしからんとの事に長政も實にもと川の下より船を岸に寄せ居城をさして歸りながら小山の陰を通るに谷水流れ出で最と涼し氣に見へたれば長政醉に乘じ流水の邊に寄り水を掬びて左右の者に向ひ歌に「水くゝる水に秋こそかよふらしむすぶ泉の手さへ涼しき」と云ふ事あり此歌の意は夏の末より水は金氣を生じ底澄みわたり是に依り秋の水底は悉く見へ渡りいと心よきものにて恰かも大丈夫の心ともいひつべし人の心も秋の水の如く底まで見へ渡る如くなれ邪正の分別のなきを佞人とこそ云へりと基次を後目にかけしに後藤親子はたゝさし俯向て居たりしが頓て基次我子を召連れ宿所へ歸り夫よりは病氣に事寄せ出仕をやめ領分の隈山の城へ歸りて引籠りぬ元來長政は男色にふけり基次の悴大次郎の容色勝れしに心をかけ數々基次に出仕を促せども事に寄せて承引ざりしに依りいよ〳〵基次を疎みけるこそ憂てけれ去程に基次隈山へ立歸り明暮家臣等を呼寄せ軍術教導の暇には碁などを圍みて樂しみたり或夜家臣の山本藤太夫基次の所へ來り物語りの末申すやう珠てより出仕を斷はり斯の如く引籠り給ふ因由は如何にも臣等の心得がたく日夜案事奉るといへども平生の御氣質を恐れむざとお尋ねも申上ざりしが何卒今宵は御心中の大事を御明し下されなば有難き仕合なりと誠忠を顯はし尋ねるに基次莞爾と笑み能も尋くれたり我當春より斯く引籠りたるは深き仔細なくてかなはず倩ら主人長政の胸中を

察するに如何にも小量にして我を忘れ信を失ふに依て見かぎりしなり元黒田家は播州小寺家に起立せしを秀吉の取立に依て今日の如く世上に武名を輝かせしに去年關ヶ原一戰の節東軍の味方として武名をふるふ是れ一旦は武道の義に依り家康に從ふも斷りながら逆徒亡びて後は幼君秀賴に忠誠を盡すべきに家康の恩賞に眼くらみ關東へ無二の心を運ぶ事本意にあらず且つ家康臣として豐臣家の賄料を定むる事何事ぞや爰に於て段々逆心顯れたれば速かに加藤毛利福島立花等の忠臣と心を合せ家康關東下向を待受けて討取り太閤への報恩に備へ給へと勸むると雖も長政一圓承知せずまた當國筑前を拜領せし折に申けるは帝都へ程遠くして大事の妨害なれば先祖の舊地播州か作州にて賜り給へと申せしに長政我詞に仰天し基次こそ天下を望む謀反人なりと怒りける是に依て常々我に心を置き政道の儀は申すに及ばず何事も我と評議を共にせざるこそ是非なき次第なれ既に朝鮮征伐の折も陣中にて我に向ひ我身に兄弟なし弟といふは其方なりと云ひしは實情ならずや是にほこりて我れ家門の列に加はらんとするにあらず然れどもこの言空しく僞りとならば君子のはづる所ならずや然るに依て斯の如く病氣と稱し折を見合せ暇を請ふて山林に入り世の盛衰を見んと欲す我身は武運つたなく成果るとも其方を初め山田兄弟片山寺本其他何れもの郎等は何方へも勤仕すべし是迄の武功をいひ立仕官せば大祿につかん事難きにあらず然れば數度の戰場に死生を共にせし汝等と今離るゝ

事如何にも心苦しく我心中は詞に餘なりと落涙す山本藤太夫も是を聞き共に涙を流せしが主人に向ひ我々君の恩惠に依て數度武勇の名をあげたり是を捨て二君に仕へなんぞ子孫の後榮を思はんや必らず御心を勞し給ふなと尙種々と閑談に及び今は是非に及ばず此上は當國を退去せんより外なしと一決して退去の準備に及び斯て基次預りの隈山城を差戻し永の暇を請ひけるに長政元より後藤の武勇を忌嫌ふの心ある故に一儀にも及ばず承知あり基次も故なく退去するを悅び此よりは當國を去つて暫らく四國へ退かんと主從退城の支度して都合二百七十餘人白晝に筑前國隈山を出で豐後の府中より便船にて豫州川の江に着し是より阿州に知己ありて暫く住居したり基次又家士を集めて申やう今我を初め行末知らぬ浪人の斯樣に多く一所にありて若し他の疑を蒙むり罪を得ば武門の恥辱なり然れば主從住所を隔て夫々何方へか仕官せば其時各々と再會し今の愁眉をひらく事あらんと申しけるに一同も是に同し各自知己をもとめ中國四國たよりの能き所に住居し互に音信を通じあひ只管時機の至るを待居たり基次は刀劍の術は申すに及ばず鎗法に於ては尤も稀代の達人にてまた孫吳の兵法にさがしく數度の戰場に其功を顯はせしゆゑ近國の諸士是を聞き皆門人となり基次が涙宅に集る事市の如し然れども此の輩は皆主人に仕へ公儀にも知れわたりたる人々なれば故障もなく各々其の道を學びて月日を送りしに扨近國の諸侯は申すに及ばず遠國といへども使者を以て基次を招かん

とするに基次は只管辭退に及びける然るに細川忠興名士を抱へんと四方を尋ね基次浪人と聞き家來氏家甚左衛門を使者として招けども種々に辭退するにぞ今はとて忠興自ら阿州へ來り基次を訪ふて詞を卑ふし我家に來りて不肖の某を助け給はゝ此上の悦びなりと云ふに基次暫し默然たりしが稍あり て忠興に向ひ斯く迄に御心を盡されわざ〳〵御越の段は基次生涯の面目此の上なし然れども今二君に仕へて齎恩を捨るは丈夫の恥とする所なり我又國政を預る大才にあらず勤仕の義は何分御高免下さるべしとなか〳〵承引の躰なければ忠興も再びすゝむる詞なく重ねて基次に申しけるやう夫も かなはざれば子息大次郎殿をたまはるべしと有るに基次も忠興が切なる心に感して斯く御望の上は悴大次郎御奉公に差上げ申すべし然れども未だ若輩といひ行末とても覺束なし兎も角も御心に任せらるべしと承引しに忠興大ひに悦び早速大次郎に對面するに容貌勝れ天晴勇ゝしき骨相なれば誠に基次が愛子日頃の教導も左こそと感じける基次は胸中に大望あり忠興の所望に任せ大次郎仕官の儀を快よく承知し忠興の運をはかつて血脉を殘せし智慮のほど餘人の及ぶべき所にあらず終に後年元和の合戰に豐臣家亡びて基次志望を達せずといへ共子孫は長く細川家に殘り五百石を領して後藤又兵衛と名乘たり然るに後年基次世上の安危を見る所に先見少しも違はず關ヶ原以來家康の威勢朝日の登るが如く慶長八年に征夷大將軍に任じ諸侯招かずして來り服し秀頼は有てなきが如く太閤恩顧

の者共も大坂に登城する者なく今は豐臣家も斷絶に及ばんと見へけれは執權片桐且元是を嘆き密に諸方の名士を尋ね探し浮田家の勇士明石掃部之助を抱へ其外赤松彌三郎鈴木藤右衛門を語らふといへども未だ軍師なきに依り且元密に真田幸村を招き城中の軍師とせり然れども尚ほ城中無人なれば四方に勇士をもとめたり基次阿州にありて是を聞き時いたれりと豫て離散せし山中山田兄弟片山等を密に招きこの事を語り終に大坂を志し先づ泉州堺に獵師某といへる舊來の知音あり爰に逗留す某も下賤には珍らしき義心あるものにて甲斐〳〵しく待遇ぬ基次片桐の方へ書翰を送り對面を望みしに早速に對面し閑談數刻に及び基次終に大坂に入城し年來の望みを得て秀頼に謁え五千石を以て諸侯格に仰せ出され隱岐守に任ぜられ間もなく基次の郎等山中藤太夫寺本八左衛門山田幸右衛門同外記片山掃兵衛山中小藤太大井河右衛門片山主馬坂田庄太夫等皆千石にて召抱られ基次が支配の組下と成りける去程に慶長十五年八月三日太閤十三回忌にあたり高野山に於て大法事を執行し其壯觀おびたゞしく翌十六年の春より大佛殿建立に此入用また目を慫かし大坂の失費言語に絶たる次第なり然るに大佛殿の造營終りて慶長十八年四月十六日開眼供養なかばに至り鐘の銘に關東調伏の趣意ありとて供養停止あり是より片桐且元下向し種々に申しひらくといへども其の甲斐なく終に三箇條の難題出で片桐遠計を以て是非關東の勢ひを碎かんと計りしに讒言にて忠誠を空しくし半途に捨てら

れしこそ是非なけれ基次さま〳〵に利害を盡して諫言すれども新參と云ひ大野等が妨げに依て用ひられず然るに今度いよ〳〵大坂關東手切れとなつて急に合戰の評定と成り此節眞田幸村長曾我部基親毛利豐前守御宿越前守明石掃部之助等皆新參の勇士なれば諸老の意見取るに足らずと耳にもかけずして手配りの評定に及びたり基次席を進み今某に一萬人を預けられなば眞田殿と二手になり東海東山兩道より逆寄に攻下り駿府の家康と雌雄を決し一攻にせめつぶさん又長曾我部殿を始め其他の方々は京都を攻め禁裏を守護し勅命と號し諸國の大名を語らふ程なれば忍るゝ事ある可らずと述るに大野道犬織田有樂齋大野脩理介の輩後藤の詞を用ひずして終に籠城に一決し是より諸方の手別を定め後藤の遊軍となりて諸方の虎口を救應する事に定まりける隼田兼相矢野正友の兩人は血氣盛んなれば何卒和州を亂暴し虛に乘じて近國に攻かゝらんと出勢し近邊の村里を亂暴せしに藤堂高虎の上野の城より板屋平左衞門討て出でしも散々に打負け板屋は終に薄田に討れたり高虎關東より馳登る半途にて是を聞き五百人を撰み渡邊勘兵衞を大將として上野の救ひとしてはせ登りしに桑津にて眞田幸安の百五十人の勢ひに立られ散々に成て逃歸りしに高虎大に怒り再度大勢を引率し大坂へ出勢せしに折ふし井伊掃部頭京都に着陣し兩御所の着なき內に一あて當てんと牧方迄押來りし同勢と牒し合せ大坂へ押寄ける基次是を聞き猶間堤より人數をくり出し大和川の兩岸に兵を伏せ其身は

纔かの小勢を引率し旗押立悠々と待かけたり去程に藤堂高虎遙かに向ふを屹度見れば下り藤の紋付たる旗一流おし立あり彼こそ後藤基次の備へなり一戰に打破れと鯨波をつくりて押かゝれば基次少しも騷がずときを合せ鐵砲打立て追つ歸しつ攻戰ひ堤は狹く兩方は深田なれば互に難儀いふ計りなし此時基次時分はよしとくり引に兵を引上るに藤堂勢は是を見てすわや敵は引色なるぞ爰をばすかすな者どもと揉立〳〵五六町追ひ駈しに忽ち合圖の法螺の音と共に堤のかげより後藤勢一度にどつと起立ち鐵砲打立〳〵無二無三に突立たれば藤堂勢散々に亂れ立つ基次得たりと馬を飛して大將高虎を目がけ日本號と云へる名鎗にて突かゝる高虎も今は堪らず鎗を合して戰ひたれど鎗術無双の基次に突立られ逃出すを基次追駈け未練なる藤堂の振舞かな朝鮮以來武勇の名高き和泉守にも似合ざる次第なり返せきたなしと叫ぶに高虎も名譽の勇將敵に聲をかけられ命生て何かせんと引かへし突かゝれば左こそ有るべしと基次馬を進め駈合して戰ふる基次の鎗先鋭どく高虎今は危ふく見へしが後藤がくり出す鎗の穂先電光の如く閃めき乘たる馬是れに驚き深田の中へ跳込みしに終に道を隔てられ詮方なく基次馬上に突立ち一息つきける、高虎の臣渡邊勘兵衞斯くと見るより馬を飛してはせ來り鉄棒を眞向にふりかざし基次を目掛て一打とふり下すに勘兵衞己が力に餘されて馬より下へ眞逆さまに深田の中へ落入りたり基次鎗を横たへ叱つて云ひけるやう我相手として一生の武邊を爭は

んもの當時天下に覺へなし家康父子着陣せば是ぞ基次がよき相手なり早や〳〵本陣へ歸りて此趣きを通ずべしと諸勢を集め靜々と立歸りしに高虎も基次の勢に駈立られ散々になつて敗北す然るに家康秀忠大阪へ着陣し諸方の口々を攻立て穢多ヶ崎の守將散々に敗走し既に大坂方總敗軍とならんとするに基次遊軍の役は此時なりと奇計をめぐらし十分に敵を破り長追ひせず引鐘を鳴らし味方をまとめて靜々城中へ引取りける其後間もなく鳴野口の合戰始まり上杉勢は進んで一二の柵を打破り早や三の柵へ攻入り城中以ての外に騷動す基次この由を聞き下り藤に後の字を書したる旗を押立て其勢纔かに五百餘騎敵陣に恐れ氣もなく討入しに上杉方にも斯と見るより引つゝんで討取らんとするに基次どつとおめいて陣中へ馬乘入れ突立〳〵東西南北へ駈通り勇を振ふて戰ふにさしもの上杉勢も散々に討破らる上杉定勝本陣より是を見て敵は小勢なるぞ追取卷て討取れと下知するに上杉勢又むら〳〵と起り立ち備へを堅め寄せ來る後藤方も同じく我劣らじと突合眞黑になつて戰ひしは賊に今日の晴れ戰是なりと數萬の寄手も爰を大事と詠むるに基次は勇を振つて上杉方の諸將を討取りしに上杉方既に總敗軍の色現はれしを上杉の老臣岩井竹股杉原等鐵砲を打出し嚴しく攻立しに後藤方は今朝よりの戰ひと云ひ小勢なれば少しくひるみて見へければ基次是を見て自ら敵を突拂ひ馬上に立ち鞍を叩き勝敗は兵家の道なるぞ早や〳〵備を立直して我に從へと大音に呼はりしに山田兄弟大

井片山山本等綱を傾け鎧の神を射面にかざして筒先を防ぎ息をも吐かず揉立〳〵戰ひしに終に本陣も打破られ大將上杉定勝も大和川の堤まで揉立られ引退きしが如何しけん大和川の深みへ眞逆さまに落入たり是に依て上杉勢大に亂れ四方八方へ逃散り大將を救ふものなく既に後藤の從兵に討れんとする折しも上杉の家士兩人馳せ來り水中に飛入りて主人を助けほう〳〵の躰にて本陣へ引入れしにより後藤も引別れて勝どきをあげ諸軍を休息致させける此時木村重成は佐竹勢を討て城中へ引つりしが若盤の木村が爲に討破られしを慣ほり再び押出さんと有けるを執權澁江内膳種々に主人を諫め自ら佐竹傳來の馬印を押立主人の鎧を着し五百餘騎を從がへ姓名をかへて討て出でれど終に内膳基次に討れてける扨も鳴野今福の合戰に始めは大坂方敗軍せしかど後藤木村等が武勇に依り城方勝利となり是より互に戰ひを止め暫らく對陣となりしが爰に眞田幸村智略にて寄手の陣々へ悉く火を放ちて燒立しゆゑ秀忠城は勿論茶臼山の本陣も救ふ事能はず家康も大坂勢に不意を討れ本陣に歸る事もならず岡山をさして逃出せしに後藤木村の兩將嚴しく後を追ひかけ家康は只一騎となり此の上は南都をさして落行んと闇り峠へ差かゝり既に後藤の爲め討れんとせしをやう〳〵に危難をまぬかれ再び茶臼山へ取てかへす此時禁裏より烏山大納言三條内大臣勅使として關東大坂和睦のあつかひありて爰に一度干戈をおさめたりと雖も翌元和の元年春より再び合戰始り基次は道明寺堤へ出

張し柏原に陣を取りしがかねて城中老臣の輩權威を爭ひ上下の心和せず且つ此度は味方の要害をも失なひ敵に先を取られし上は合戰の勝利覺束なし一戰して敵味方の目を驚かし末代に美名を殘さんと主從共に今日をかぎりと見へにける關東勢は早や野に滿山に漫り頓て溝口伯耆守手勢を引具し鯨波をつくりて一番に後藤の陣へ押寄せたりしが散々に敗走し二番に松倉豐後守攻かゝり是また追立られて一たまりもせず退きたり關東勢は新手を入れかへ德永左馬助遠山久兵衛兩人堤の上に押上りときの聲をつくり鐵砲を打かけ後藤が疲れ勢を討たんと押かゝりたれど忽ち突崩されて退にける次には堀監物越後勢三千餘りを一手として勇み進んで車掛りの陣法にて揉立〳〵押かゝりしに基次謀計をめぐらし逃げ出せば堀監物得たりと備へを亂し追駈くる基次時分はよしと相圖の馬印を高く差上しに後藤の勢取てかへし前後左右より駈立〳〵砂煙をたてゝ攻めかくれば左しもの監物基次の奇計に陷いり從兵大半討れ後陣をさして引き返へす去程に同年夏四月二十九日大坂方の諸將思ひ〳〵に討て出で基次も道明寺表へ陣を据へ本多忠政の押寄せ來るを無二無三に突立て本多勢散々に打負け命から〳〵逃散りたり基次は本陣へ引返へし只管家康秀忠の兩軍着到の上目覺しく合戰せんと思ひける此の時越後少將忠輝分部左京を先陣とし越後勢跡に續いて二三の備へを設け一同にときをつくり勇ましく押寄しが忽ち先陣二陣も攻破られ忠輝毒水の謀計にて後藤を破らんとし却て基次の奇

計に陷り士卒郎等數多討死してける然れば基次は關東の先勢を打破り兼ての軍略なれば片時も早く大和路の峠を越して堅固に陣を取り寄手を見下し家康秀忠の旗本へ押かけ雌雄を決せんと眞田長曾我部木村毛利の諸將へ使者を立て軍の用意する所に早や伊達政宗の手先片倉水野等國分峠を越て押來りしが日も西山に傾きしゆゑ戰は翌日に及び明れば五月五日の早天仙臺勢山の上下に充滿兜の星鉢長刀を朝日にかゞやかせ勇ましく後藤の陣へ押寄せける此方はかねて期したる事なれば基次味方を勵まし透間もなく打立〳〵勇を振ひしに遁の片倉も堪りかね思はず三町餘り引退き後陣の兵を招けども早や總敗軍となつて何の甲斐もなく片倉ぼう〳〵の躰になつて逃出す此度は屈强の騎馬を撰み眞先に乘立馳かゝる基次は馬乘の達者名譽の鉢術なれば勇氣盛んに突立〳〵駈散らすに堪らず關東の若武者と呼ばれたる片倉も詮方つきて退きたり基次は敵を破り手輕く勢を引上げ一息つきたる所へ眞田幸村方より一大事の密計あり早々其表を引拂ひ歸城あるべしと使を以て告來れども基次更に承引はず軍門に君命なし況んや敵と懸合最中に爰を引ば末代迄の恥辱なりと返答しける此時仙臺勢は二度の敗軍に憤怒つよく奇計を設け再び新手を加へ鯨波をつくりて押寄たり基次は又々敵の寄るを見て備へを配つて待つ所に眞田より再び使者あり其表引難く候はゝ暫時の間當城まで是非共御越あるべしとの事ゆゑ基次も今は詮方なく家老古澤四郎兵衛山田幸右衛門を招き秘計を授け我今大

事の陣を退ては後日の恥辱なれば幸ひ山田の武者ぶり我に能く似たれば我名を名乗り味方の英風を助け敵の氣をひしぐべしとて基次は山本寺山山中の三士に近習少々召連れ城中へ歸りしを此事敵も味方も少も知ざりける此時早や仙臺勢は間近く押寄せしに山田孝右衛門真先に進み双方揉立〳〵真黒になつて戰ふに古澤四郎兵衛は流れ丸に當りて死んでける孝右衛門は是れに少しも屈せず采を振て下知する所に片倉の鐵砲頭山路小左衛門近々と進み伺ひ寄て急所を目がけ打出す鐵砲に幸右衛門胸板を後へ打抜れながら鎗を枝に突き卑怯なる敵の振舞かなと大に罵しり其儘倒れて相果たり後に山路は大熱發し狂ひ死に死しける片倉を始として仙臺の諸士等基次は和漢名譽の勇士なるに鐵砲にて討取たるは末代迄の恥辱なりと却て落涙に及びたりとかや斯の如く大將討死せしに其他の士卒も思ひ〳〵に自害して相果ける是より先家康より基次方へ使者を向け味方に參らば播磨國を與へんと云ふに基次云ふやう今大坂の運傾き秀頼の御運も近きにあり其れを見て二心を抱かんは弓矢取る道にあらず仰の趣き基次冥土の面目なり然りながら基次生てあらん内は一日に破るべき大坂も十日は支ふべし我討死するを德川家の恩に報ふべき志と存ずる旨返答したり扨も基次は真田が招きに依り城中へ歸り平野燒討及び薩州退去の相談に及びて後また〳〵道明寺表へ歸らんとする所に早や後藤基次討死と呼はつて從兵討死したれば再び戰ふ手段なく真田幸村等と共に秀頼を守護し薩摩へ落

ち後藤傳之進と變名し遂に志を達せずして終りしはまた是非もなき次第なり嗟呼基次忠を一圖として薄氷より危ふき大坂を助け義に依りて命を輕んぜし事誠に末代までの龜鑑と謂ふべし

袈裟御前……節操……美しい袈裟で黒染二人出來

一婦の爲に心をみだし果なき戀の暗路に迷ひ入りて遂に一度身を誤まりしも翻然心を改め髻を斷ち武士の兩刀投すて丶佛門に歸依し遂に百千難行の功顯はれ後に頼朝の源家再興に與りて力を盡せし遠藤盛遠の原動者たる烈婦の事歴を記さんそも〳〵盛遠は近衛將監持遠の子にして早く禁中の滝口の侍士に備へられしが盛遠若き時より心ざま雄々しくして武藝に秀でぬ頃は嘉永二年三月中浣攝津國渡邊の橋出來せしかば渡り初の式を執行はんとて嘉規に照らして其の準備ありける盛遠も今日は晴れの場所なればと美々しく打扮て至りしに見物の内に齢十六七にもや成りぬらん最と艶麗婦人の女房數多の内にまじり笑ひ興ずる面影露をも滴りなんばかり遒がの盛遠もこは如何にと暫しは目を奪れしが漸う我にかへりて心の裡に想ふやう世にはまた浩る美人もありけるよ夫につけても誰が家の女房なるかと見へがくれに後を慕ひ行くに並びの郷なる左衛門尉源渡の家に入りぬ扨はこの美人こそ我伯母衣川の女見袈裟にて源渡の妻なりしかと一度は驚きもしづれ戀さは彌益して金鐵の如く鍛へし丈夫も哀れ今は想に沈みて寢食も易からず夫につけても伯母衣川の心なしさよと深くも

怨みかこちけるが如何にも堪へずやありけん或夜衣川の許を訪ひ切なる思ひを述べ何卒袈裟は我に賜れと大太刀引寄せ横に車を押かくるに衣川は大に迷惑し種々に事よせ慰むれども盛遠は承引く氣色さらになく果は眼を怒らしやよ伯母御前袈裟をば何故に渡に嫁がせ給ひしぞ斯までに我を疎んじ給ふとは仔細なくてかなはず此の道理を明らかに分疏ことの候はば宣ひ給へと面は恰ら血をそゝぎし如く鍔もと叩いて詰り寄るに衣川も殆々困じ詰もなかりしが稍ありて云ひけるやう御身の詞件々に道理なれども左りながら今こそ袈裟は渡が妻なれば如何とも詮術なしとの詞も待たず太刀きらりと引拔き衣川の胸元へ差付け斯ても我詞を用ひ給はねば最早詮なき事なれば目下此處に失ひ申し某も後より冥土のお供申さん御覺悟あれと既にこうよと見へたるに衣川は其手に縋り今更命惜むにあらねど斯くまでに聽わけ給はねば詮すべなし今宵必らず袈裟を招きて見せ申さん其折に我を殺すも遲かるまじ是をば承引たまはれと云ひ聞ゆるに盛遠もさすがに伯母の詞を無下にも爲し難く然らば袈裟を呼び其の心を見たる上にて兎も角もと漸やく刀を收め必らず約をば違ひ給ふな今宵またこそ參らめと我家にこそは歸りけり衣川は頓て病の由を云ひ送り袈裟を招き寄せたれど胸まづふさがり涙のみさしぐみけるに袈裟は對面して熟々其のさまを覩ふに物を案ずる有樣にて愁色見へければ心裡深くいぶかり御心地如何にか渡らせ給ふにやと問ふに母は涙を押拭ひ盛遠の來りて斯くの

始末なりと一什を物語りて後にやをら懐劍取出して差付け今は我身生て何の甲斐もなければ御身の手にかゝりて死なんとぞ思ふ迚も盛遠の氣性として一旦云ひ出し事非なりとてなか〳〵後へ退くべき氣色も見へず甲斐なき命ながらへて苦を見んよりは寧そ我身を亡きものにして給べと我子の膝に縋り付き潸然と打泣きぬ袈裟は其の物語を聞き慈ろく事一方ならず暫しは共に縋り付き四の袖をば絞りけるが袈裟は心の内に思ふやう子として今親人の難儀を看過す可きにあらず要こそあれと胸をさだめ今宵盛遠參らば妾よきに計らひ候へば決して御心を勞し給ひそとて只管盛遠の來るを待けるに既に夕刻近くなる頃ほひ盛遠只一人ぞ來りける衣川は立出て迎へ一室の内へ請じて扱申すやう先刻約し參らせたる如く袈裟を呼寄せ暫はべりぬ妾が言葉の信か僞かは今こそ知らし申さめとて袈裟を呼ぶに返答して襖を披き立出る姿は畫にもかけず盛遠暫し恍惚とし見惚れてこそは居たりける袈裟は只管に機嫌を取り笑をつくりて最と悅ばし氣に待遇に盛遠も打興じ居たりしに頓て袈裟は暇を告げ其場を起て歸らんとするに盛遠進み寄て裳を捉へ最とも難面この有樣と既に氣色變ずるに袈裟は今更何と云ふべき詞もなく只さし俯向て默然たりしに氣早の盛遠早や心中むら〳〵として傍に置きし大刀引寄せ御身渡に貞操をたてゝ我心に從はぬとなればおん身と渡を殺さんといきまくに袈裟もあなやと計りに打驚きしが蘇ろく胸を押ししづめて微笑を湛へ左な急きたまひそ今妾の此場を起

しは實に御心の程も知れねば其を試みん爲にはせし如何で戀しき御傍を離るゝ心あらんや盛遠殿察したまひねまた妾事渡の家にありて日頃心に稱はぬ事のみ多く今日逃ん明日は走らんと思ひし事も數なれど母の心に違ふが胸苦しくて今日までは過ぬあわれ君の心に誠あらば一日も早く渡を殺して我胸の靜まるやうに計らひ給へと述べけるに盛遠夢かと計りに打喜び宣ふ如く爲んずるがそは奈何してよからんと問へば袈裟の申すやう妾今より家に歸り渡をすゝめて髮を洗はし酒に醉しめ高樓の東の方に臥さしめん夜半過ぎ彼所へ忍び給ひ濕たる髮をしるしとして殺したまへと聞へける盛遠呵〻と打笑ひいみじくも覺しつき給ふものかな必らず手筈は差はじぞと約をかためて別れける袈裟は首尾よく盛遠を詐き果せて暫しの危難は脫れしも脫れ難きは我命死ぬる此身は厭はねど後に殘りし母や夫の嘆きの程ぞ奈何ならんと力なく〳〵我家に歸るに袈裟の顏を不審氣に打ながめ母御前の病痾いかにおわすぞ頓におこたり給ふとも今頃還りたまふ可しとは思はざりきと云ひけるに然れども老の身はさせる病にあらねども俄かに心例ならぬに夕べも知らずと思ふから早まりて迎を越しけれど參らぬ前に病は癒ぬと兎角にして云ひこしらへ頓て袈裟は銚子盃を取り揃へて夫の前に差置き母の病事なく癒にければ其の喜びに一盃を參らして先の鬱を慰めなんいざきこしめせと勸むるに渡も喜び打くつろぎ夫婦睦びて酒酌かはし稍盃の數重なれば渡も醉て袈裟の膝を枕にして餘念なく夢

に入りぬ夫の寐顔熟々見て涙に咽び我が胸の苦しみは露ばかりも知り給はずいと樂しげに見へ給へど此身は今宵消ゆけば是が御身の顔の見おさめ我身の死せし其後に不便と覺し給ひなば思ひ出し其の時には一遍の回向を頼み參らすと口に云はねど心の裡千萬無益の思に堪へかねホロリと落す涙の乖夫の顔にかゝりしかば渡はこれに唾を覺し袈裟の顔を仰ぎ見て夫婦の間にありながら泣ほど悲しき事あるになどで語り給はざる隔てたまふぞ心得ぬと云ふに袈裟は涙を拂ひ今日しも母の許へ行き暫し遊ざかり申せしが最となつかしく早々歸りし程なれど定めなき世のならひとて若しや妾が身のはかなく成りもし候ひなば後に我身の事などは露思しも出し給はじと思へば頻りに悲しく漫涙にくれたりぬと云ふに渡も詞の内何とはなしに憐れ氣なれば心細くて醉も醒め尚ほ兎角に諫め慰めまた盃の數を重ね再び醉て寐室に入り何時か夢路にたどり入りぬ袈裟は豫て盛遠に約せし時の差ひなば母や夫の身の上にも禍あらんと心急き其身は密かに髪を洗ひ高樓に登り死を待つ身こそ憐れなれ爰に盛遠は袈裟の詞を實とし豫て指圖を受けたりし彼の高樓に忍ひ入り密かに障子抑披けば裡には屏風を建こめて熟睡しつる人こそあれ是ぞ渡と思ふ時しも木枯し颯と吹入りて燈光消へしに幸なりと屏風引のけ探り見るに髪の濡れたる人あり得たりと上に乘かゝり首をふつゝと搔切りて袖に包みまた元の道より忍び出で頓て月あかりにすかし見るに扨も遺猿や渡の首と思ひしは袈裟が頭にてあり

しかば遺がの盛遠左手に首を偖かと握りしまゝ後居に搖と打倒れあきれ果てぞ居たりける稍ありて漸う我にかへり其儘家路に戻りて熟々思ひ廻らすに袈裟が節義に引かへて我不義の程ぞ恥かしやと我身の惡を悔悟して既に自害と思ひしかど又思ひかへすやう今爰に死したりとて人は仔細を知らずして盛遠狂氣と沙汰せんに其のみならず渡も左こそ無念ならめ迚も死する命なれば彼に討れて死せんものと翌朝早々渡の許に至りて對面し袈裟の首を出し事の始末を詳さに語り既に自害と心得しが同じく死する命なれば御身の手にかゝり果なば袈裟の怨みも霽なん道理いざ速く殺し給はれと襟くつろげ合掌してぞ居たりける渡は始終を聞て盛遠に向ひ今其許の首を落したりとて何にかせん我れ今より浮世を脱れ佛の道に入りて亡き妻の菩提を吊らひせんこそ專要なれと即座に己が髪ふつゝと切り拂ひぬ盛遠も一度は其意外に驚ろきしが遲れはせじと同じく髪を斷りけり、是より渡は俗名の字を取り渡阿彌陀佛を名乘り遠藤は盛の一字を頭に盛阿彌陀佛と名乘りしが衣川も其後尼となり翌年十月生年四十五歳にて大往生を遂にける扨また渡阿彌は己が別莊鳥羽里に一箇の草庵を營み其傍らに袈裟の白骨を埋め二人の入道この草庵に居て袈裟の爲に勤行怠らざりしが盛阿彌は求法の志氣ありし程に名も文覺と改め鳥羽の里を出で雲水の旅路に赴き普く諸國の靈地靈場を修行遍歷し行々紀州熊野に詣りて大願を發し那智山の瀧の下に六七日の垢離を取りけるが折しも臘月寒空なりしか

ば踏來る瀧は氷となりて躰も膚も冱り入れども豪氣の文覺事ともせず遂に首尾よく勤行を果て京都に歸り益々苦心を積て佛道に分け入り或時高雄の神護寺に詣でしに堂宇いたく朽損じ道路も草木に埋もれ住僧さへも無きものから文覺深くこれを嘆き何卒して修覆の營みをせんものと思ひ立ち是より普く各地を勸化して喜捨を乞ひける或日の事後白河上皇の宮にいたり御奉加を願ひ奉らんとせしに此日殿上には管絃の御遊びありて群臣共奏問の暇あらず文覺を終日待たせ置しに氣早の文覺なればこれぞ近侍共の計ひにて斯は延々にせしものならんと推し早や怒氣滿面に溢れ九重近くつか〳〵と進み入るに殿中一同ソラ狼藉者よとひしめくを文覺少しも騷かず今貧道高雄の神護寺を再建するの大願あり何卒多少の御寄進あらせられたし其僞りならぬ證明にとて勸進帳を取出し聲高らかに讀み上げける上皇大に逆鱗ありて誰れかその法師生捕れと下知の下より近衛尉公朝右馬太夫安藤助宗の兩人左右より走りより漸くにして取押へしが文覺はなほ殿上を狂ひ廻りて止ざりけるを獄に下し日を經て伊豆國に流されぬ此時上皇より何か密に宣旨ありけるとぞ斯て文覺は配所にありて頼朝に對面し其後は互ひに緊々往通ひしが或時文覺頼朝に向ひ平家の小松内府既に薨じ後に世を治むべき人もなく早や平家の末運とこそ思へば疾々旗揚げをなし給へと云ふに頼朝默然として思案にくれしが稍ありて我今勅勘の身なれば是を免されずしては大に恐れありと云ふに文覺膝おし進め聲をしの

びてやよ佐殿眞實謀心あるならば我京に上り院宣を申し下すべし其の代りとして事成就せは貧道に神護寺を再建せしめ給へと云ふにそは最と易き次第にて事成らば何事も貴僧の望みたるべしと堅く誓ひしに然らばとて文覺は密かに京に上り院宣を得て頼朝に與へしかば直に關東に旗を揚げ文治の始め平家を西海に亡ぼし天下の大權を握りて鎌倉將軍と仰がれける是れ文覺の力與かりて大ひなりと云ふべし後に頼朝丹波播磨土佐の内十三ケ所を文覺に與へて寺田とし又神護寺の造營も不日にして成就し更に東寺をも修覆し始めて多年の志望を果しけるとぞ、是れ皆其起因は袈裟一人の貞操にありといふべし嗚呼偉なる哉千古の女丈夫

矢部定謙……聰敏……淵々たる其淵

名を爲す人は必らず敵を作るとかや、矢部定謙初の名は彦五郎と稱び生れは寛政の末年なり世祿百石を賜はり番町に邸宅を搆へける定謙人となり廻身にして丈高く眼のうち涼しく音聲朗かにて人と語るに折々口の端鉤曲るよしなるは肝氣の强き證據にやあらん衣服は殊に清楚を好み常に新なるものゝ如く坐隅に置ける机の類に至るまで種々の好みに造り爲し又和歌を好みて再昌院北村季文の門に入り刀劍の目撿をもなし常に慈悲の心深くしてよく下々をいつくしみける定謙幼き時父彦五郎定合堺の奉行に任ぜられ從がひて同地に行きし折り父は何れよりか柿の種を得て庭に栽しに定謙之れを見て當地は奉行の人々時々に換れば美果を結ぶも我等が嘗る事は得て叶ふまじと云ふに父は痛く之を叱り汝は未だ物の道理を辨へず若し此樹美果を結ばゝ後に來りし奉行は喜びて之を味はんに決して無用の事にはあらずかし汝は未だ年若く思慮も淺ければ能く〳〵言葉には愼みを加へよと敎訓ありしが二十六年の後に料らず此地の奉行となりしが父が種たる柿の樹今は鬱然として蔭をなし秋の末に至れば其實を結びければ坐ろに昔しを思ひ出でゝ手厚く栽培ける元より定謙は明敏の資なれ

ども一つには此の如く父の誨よきにも由るべし壯年にして番騎士と爲りしが當時騎士の風惡しく古參の輩が新參を凌ぎて使廻す事は恰ら奴僕の如くにして言語に絶へたる振舞ひ多かりき或る宿直の夜寒氣つよかりしかば古參の者ども例の如く定謙をして粥を作らしめしが此粥は衆僚が夕飯の辨當に食餘せしを集めて作るものにて其の賤しげなる言ふばかりなきも古參の者どもは少しも恠しまずまた作かた惡しき時は痛く罵しり辱かしむる事などもありぬ定謙は日頃これを恚り居りしが今宵こそ好期なりと竊かに行燈の油を粥の中に注ぎ入れ之を攪混ぜ素知らぬ顏して差出せしに一同空腹の咽を鳴らし足下の調理方なれば定めし鹽梅よからんなぞ譏れて箸を執るに一口もまいらぬ內早や嘔氣胸もとに込みあげければ大に怒て定謙を散々に詰りけれど只兩手をつかへて其の拙劣を謝するのみなれば何と詮方もなく口をきわめて辱しめけれど始終默して爭そはず明朝はやく退出し家に歸らず先づ番頭の家に至りて詳かに前夜の始末を語りて後に仕へを辭しければ番頭も止を得ず其請を容れて職を免しまた古參の者ども數人を斥けしによりて惡しき風儀は忽ちに止ける後幾程もなく定謙は徒士頭に吹擧せられしが是れ人に知らるゝの始にして當時の天下靜謐にてそよとの枝も鳴さず錆鎗は袋に納まり太刀は床の裝飾ものとなり自から政令も寛かなりしかば無賴の者ども各所を橫行し其からぬ噂のみ立ける元と此等の友輩は身元定まらずして大抵諸大名のお抱へ仲間の中に入混り主

家の名を笠に着て諸所をゆすり歩るきければ偵吏も後の難儀を思ひて漫りに手を下し難く大目に見過しければ彌々亂暴はつのりゆきて今は手の付かたもなく殆々あぐみ果て遂に矢部を擧げ先手頭火付盜賊改役を兼勤めさせけるに定謙は極めて剛直の性質なれば大名などに微塵の遠慮はなく無賴の者どもを片端より捕獲て傳馬町の牢獄へ打込めければ有繋の惡徒も膽を寒して一度は跡を絶つに至りぬ定謙は此の功によりて間もなく天保二年堺奉行に轉じ駿河守に任ぜられけるが五百石の身より直に布衣千石の徒士頭に擢んでられ再び千五百石の先手頭に到り程なく二千石の堺奉行に陞りしは其頃稀なる出身の速やかなる人なりければ誰とて羨まぬ者こそなかりける定謙の堺浦に赴くや其地の古老は定謙の尙ほ總角の頃先人に從がひて邸宅にありし事などを思ひ出でゝ喜び合ひたりけり定謙は奇敏頓才のある人にて堺浦在任中一首の古歌にて兄弟久しく結んで解けざる難訴をさばきし美談あり其の因由を尋ぬるに堺浦に歷世醫を業とする廣岡爲次と云へる者あり田畑山林等も所有し可なり道理も辨へ居る者なるが元と養子にて養父死して後ち家を嗣ぎ何事もなく月日を送りける爰に養父生存中かくし妻ありてそが腹に生れし男子あり母は卑賤ものなれば養父も深く羞らひ別家に養なひ竊かに物など與へ置きたるに養子爲次も之を知らざるにあらぬも云ひ出ては事面倒なりとて素知らぬ顏して過けれども快からず思ひ居たりぬ、程なく養父も現世を去りければかくし妻の方へは

誰も手當する者なきに到り取殘されし男子追々と貧に迫りゆくに事情を述べて爲次の方へ合力を請ひしに養父は我の他に悴のあるべき筈なければと其の合力を承引ざるが起因にて遂に公けに訴へ出で双方とも腰押など出來て事いよ〳〵六ケ敷なり行き先勤の奉行も持て餘し唯歲月を過しそが疲るゝを待つの姿なりしが定謙は之を引受けてより種々に手を盡して探りけるにかくし妻の子なりと云ふも慥なる證據こそ無けれ眞實らしくも思はるゝものから双方を呼び出して申渡しけるは是迄幾度か尋ねに及べども眞實の證據出でぬ上はかくし妻の悴は言掛りに近し以後急度慎しむべしと申渡に爲次は雀躍して喜びける頓て定謙は兩人を一室に呼入れ奉行の役目は早や濟たれば此より一條の物語をして聞せんに我は兄弟も持たぬ身にて日頃は何事をも思はざるも事ある日には實て兄弟にても有たらんには何かと語り合ふ事もあるべきにと思はざるはなく其れゆゑに他人の兄弟多きを見ては常に羨しく思へりまた是は戀歌なれど古歌に『無きなぞと人には言てありぬべし心の問はゞ何と答へん』と云るあり爲次汝は醫師にて學問をも好むと聞けばこの歌の心は能く解し得たるべしと懇ろに語り聞せけるに兩人とも姑し默然と聞ゐたりしが頓て兄弟抱き合ひ潸然とて泣きけるが迷の雲霧さらりと霽れ翌日兩人打揃ふて廳に出で公けに訴を願ひ下げて睦み合ふ中とはなりぬ其の後はいよ〳〵定謙の評判高く又陞りて大阪の町奉行に任ぜられしが下吏に大鹽平八郎と云へる者あり王陽明

の學を修め遐々と徒弟の多くなるに從がひて大事を企だてけるが有繋の大盜も定謙在任の内は後迂して色にも出さず自分は隠居の身となり養子格之助に世を譲りて日を送りけるうち天保度の飢饉にて定謙は勘定奉行に轉じ江戸に歸りし後へ跡部山城守良弼着阪せし間もなく騒動を惹起して近畿を騒がせしを見ても定謙の器量の勝れしを知れり、定謙大城在勤中遠藤但馬守か玉造口の加番として大坂の城にありし頃定謙屢々訪ひ音づれしが或時定謙の云へるやう我が職は人の罪を訊すにあれど若し自己疑の罪を蒙りし時は眞實を述べて隱さず再三に至りても屈せざるこそ可るべきやと問ふに但馬守云ひけるは我も同樣疑ひの罪を得たる日は只これを不幸と斷念むるのみ去るからに初めは眞實を盡して述ぶべけれども後には上の不明を疑すの恐れもあれば枉ても服從するこそ臣下の道なるべしと我は悟るなりと答ければ定謙も其理に服し然なりと答へしが此ぞ後に至り其言を守りてあらぬ罪に服したるは如何にも正道なる人にて但馬守も老後常に子に語りて之れを譽稱ける又定謙常に水野若狭守と親しく往き通ひしけるが或る時若狭守申しけるは足下の才氣餘りあれど氣性に任して忍の一字に意を留めざれば後に悔る事あるべし宜しく今より古人に倣ひて毎日忍の一字を百度書して自ら誡めとせられよと云れけるを定謙實にもと其詞を用ひ二日ほどは敎の如くせしが以爲に忍の字を額にして之れを誡めとせし方簡易ならんと其旨を若狭守に語りしに若狭守眉を顰め此人吾が觀

所に露違はざりしと其儘に過しゝが定謙後に禍を獲るに至りて人始めて若狭守が先見の明なるを知りたりといふ、又一と年例によりて玉川鮎を將軍の膳に供する季節になりても一尾も差出さず早速小納戸役より代官江川太郎左衛門方へ催促に及びけるに本年は未だ一尾も獲れずと云ふに左らば相摸川の鮎は如何にとたづねるに相摸川は澤山捕れたれど之を玉川と僞はりて差出さんは恐れあれば有のまゝ相摸川と稱し納めんとあるに夫にては差支あれば矢張り玉川と稱し納められよと云ふに江川剛直の人なれば頭を掉りて中々聞入れず人々も持てあましけるに定謙之を聞きそは氣の毒の次第なり余は幼年より知る中なればよく江川を服せしめんと偶ま殿中にて江川に逢ひける折り定謙は江川に足下の御年齡は何程なりしやと問ひければ江川何心なく何歳なりと公齡を答へける當時は十七歳以下にて家督する者は祿を世々に受くると能はざれば齡を增して之を公齡と稱し來りしが自然習慣となりて上にも別に咎めず人も之を怪しまざりし左れば江川も之を答へけるに定謙は壓みかけて足下の年齡は已に公儀を欺けば相摸川の鮎を玉川と云ふも前に差支のなかるべしといはれて遁の江川も言句つまりて服せりといふ、定謙の勘定奉行にありし日は百方に力を盡し金座役人後藤三右衛門を始め其他富豪家に諭して冥加金を出させ飢に泣く窮民を賑はせしが偶ま西丸城炎上して文恭公本丸に居を移され俄かに西丸の普請に着手し諸大名に献金を仰せ出されしに定謙は勘定奉行の職に

あれば默止がたく列座の中へ申し出けるは今西丸炎上せしかど要害に缺くことなければ文恭公には姑らく三の丸に移られし方然るべく又諸家へ献金を仰せ出されしも未だ仇讎の後にて太だ難儀なるべし假令彼方より之を出さんと願ひ出るも謝して納めしめざるこそ天下を治むるの道なるべしと憚る色なく申ける此の事上の旨に忤ひ遂に勘定奉行を罷られて西丸留守居の職を命ぜられ隱居同様の閑散なる身の上とはなりぬ此より二年餘りを過て天保十三寅年の改革に町奉行筒井伊賀守罷られ此に於て定諫再び擧られて町奉行となりしに前に定諫が蹴けられしを嘆ぜし人々も愁ひの眉を開きけるが間もなく奇禍を招き重き科に處せられしがこれぞ鳥居甲斐守が平素定諫の器量を娼嫉て百方術を搆へ終にあらる罪に陷しいれけるなり評定所にて申渡書は

矢部駿河守其方儀町奉行相勤候節組與力仁杉五郎左衞門同心堀口六左衞門外五人去る申年中市中御救米取扱掛り相勤品々不正之取計に及候始末巨細之儀は不相辨候共最前御勘定奉行勤役中町方御用達仙波太郎兵衞より右御救米勘定書控内々爲差出或は西丸御留守居役中堀口六左衞門え申談内々爲取調候由に付追而町奉行被仰付候はゝ早速嚴重の取計方可有之の處其儀は無之右六左衞門悴貞五郎を同心佐久間傳藏及殺害高木平次兵衞も爲疵負傳藏自殺致候節同人並妻かね〳〵心當之有無其方相糺候御救米勘定之儀に付六左衞門等其身之不正を可覆爲傳藏重立取計候樣申成心

外之由兼々噂に聞候間右を遺恨に含又偽候儀にも可有之段書面を以相答傳藏儀變死も五郎左衞門等の不正より事起り候趣に相聞候上は同人重科難逃儀に心付不罷在ば不相成儀之處右之趣は有躰に不申立五郎左衞門其外之者共凶年の危急を救候塲合格別骨折候迚寛宥之御沙汰を希候心底を以役儀等閑之趣意にて御喝押込申付る方に内意申聞候に付遂吟味候處品々不屆之始末及白狀五郎左衞門死罪其外夫々御仕置被仰付候右一件其方町奉行不被仰付以前支配違之者共と申談穿鑿に及候段は筋違之取計に有之處町奉行被仰付候後は却て取繕候取計に有之殊に最前御尋候節は覺無之旨相答候箇條再尋に至相違無之段申聞候儀は彼是以御後閣致方に有之且又右吟味中は別て萬端相慎み可罷在處猥に懇意の者共へ此度の儀は冤罪之躰に自書を以申遣又は御政事向並諸役人之儀等品々誹謗令め且又同意の者を以所々へ爲申觸候段人心誑惑爲致候手段相聞更に身分に不似合心底不屆之至に候依之松平和之進へ御預け被仰付者也

渡奉畏候仍如件

天保十三寅年三月廿一日

矢部駿河守印

鳥居甲斐守は渡邊華山高野長英などをも罪科に行ひし人なるが矢部を重き科に處せし如きは尤も悪

むべきの驛なりかし定謙評定所に出るの前妻を招き必らず涙など浮べて醜き有樣を人に見られなと誡めければ妻もよく教に從がひ毫しも未憐の事なく夫の引立られて出けるの後居宅を洒掃て書院の床には定謙の平素愛する文天祥の幅を掛け花を挿して殘る所なく取つくろひ靜かに命を待ち受取の役人を迎へて引渡しけるには人皆な感ぜぬものこそ無りける斯て定謙は松平和之進に御預けとなり無念の涙に日を送りしが遂に憤りに堪へずや有けん自ら絶食し怨をのんで死しけるは實に悼しのかぎりにこそ元と定謙には實子なきゆゑ松平内匠頭の九男鶴松を養ひ子としけるが故易の後愛宕下天德寺中賢瑞院に蟄居し身愼みけるに其の後鳥井甲斐守も重なる惡事露顯し罪を得て重科に處せられし後に鶴松は召出されけるとぞ

上總市兵衛……誠忠……禍害は人を天に導く梯子なり

寶永年間荻生茂卿市兵衛記を著はし晉子其角も五元集に姉か崎の野夫忠功孝心をきこしめされて祿を賜はりたる事世に聞え侍るをとはし書して「起て聞け此時烏市兵衛記」と吟せしは茂卿の著書をいへるにて其頃赤穗義士の復讐と此市兵衛の忠節を相並べて賞贊したりしとぞ其事の顚末は元祿八年伊丹左京勝守の所領なる上總國市原郡姉ヶ崎村の近傍は野猪出て夜な〳〵田畠の作物をあらす事大方ならず此害を除かんとするには鉄砲を以て驅攘ふの外手段なしといへども私にこれを施すは嚴禁なりしかのみならず關八州の在民は猥りに鐵砲を所持する事すら許されず若し隱して所持する者は重き罪科に處せらるゝ嚴重の制度なり然れども猪鹿狼など多く出て耕地に害ある時は官に訴へ貸鉄砲を請願すれば官これを許して證文を取りて貸渡し玉込を嚴しく禁ずるの成規にて村々其嚴令を承り貸鉄砲を受取り玉なしの空砲を發して猪鹿等を追攘ひ全く退除せし後は其鉄砲を返納する事享保二年以前迄の舊制なりしかば今度も幕府御代官所をはじめ接近の私領各村協議の上貸鉄砲を請願せしに官成規の如く許可ありて各村の名主を呼出し空砲を放ち野猪を追攘ふべし玉を込むるは嚴

禁なれば固く心得べしと訓示し證文を取りて貸與ふ姉ケ崎は名主次郎兵衛を始め百姓惣代の者連印の請書を呈し鉄砲を請取り歸り次郎兵衛村中の者を集め假令空砲たりとも發砲に疎き者を以て施さしめば甚だ危し能が適當の人物ならんと協議す村民誰彼と詮議の末總兵衛は兼て獵事に馴れ發砲には精妙と聞けば同人に擊攘ひを依頼せば可ならんといふ次郎兵衛是れに同じ總兵衛に發砲を委托す總兵衛領承して空砲を發し野猪を追ふ事數日なりしが或時總兵衛自家の裏に農事をなし居たるに僅一町に足らざる山際の小柴の動くを見是れ必ず例の野猪なるべしと家に入て鐵砲を携へ出んとしておもへらく野猪絶へず來りて耕地をあらし農事に害を爲す今空砲を發し追ひ攘ふも又來りて害を爲すは必定なり玉込の嚴禁はあれども一發に擊留め後害を除かば此一村のみならず他村までも衆庶よろこぶべければ後日賞はあるとも罰はなかるべしと兼て次郎兵衛より嚴しく誡められし事を忘却し其亡父が獵事に用し鉛玉のありしを取出し銃に込め近く狙ひ寄るに猶柴の葉の動く事最初の如し總兵衛十分に狙ひを定めてドンと一發放つに野猪にはあらで人の叫ぶ聲するに怪しみ鐵砲を投げ捨て其地に走り至りて見れば豈計らんや同村の農夫九右衛門といへる者の妻が柴刈りて居たりしを野猪と見誤り只一玉に絶命せしめしなりし總兵衛大ひに慙き種々介抱すれども疾事斷れて爲方なし總兵衛今は遁るべきにあらねば本藩の出張陣屋へ自訴しけり在陣の藩吏次郎兵衛及本人總兵衛を吟味所

に呼出し事の顛末を糺問す總兵衛元來其志正しからざるものにて己が玉込せし罪を遁れんとて次郎兵衛が最前懇々説諭ありし事を包み玉込の制あるを知らざるよしに陳謝す藩吏次郎兵衛に村吏たる者の兼て其嚴禁あるを知らざる事やはある然る上に鐵砲貸下の際玉込の嚴禁を屹度固守すべきの明文を掲げし請書を呈し置きながら其嚴禁を總兵衛に告げざりしは等閑の甚しきなりと譴責す次郎兵衛深く畏縮し總兵衛に鐵砲を貸與せし時懇々玉込の嚴禁なる事を説示したるを彼何等の誤謬にてや今其事を知らずと上陳するは心底如何とも知り難しと答ふ然れども總兵衛は其説を聞かずとの事を主張す次郎兵衛村民を證人とし嚴禁を説示せし事は分疏立しといへども畢竟平日村民教誡の不充分なるより斯く犯罪の者あるに至りしなれば名主の罪なりとて共に獄に繫がる藩吏江戸の邸に其異變を具狀せしに在邸の藩吏これを勝守に上申せしかば家老依田助之進に處刑の事を委任に及びける、總兵衛の罪は嚴禁に叛き玉込の鐵砲を發するのみならず其爲めに人命を亡ぼしたる者なれば死罪無論なり次郎兵衛は假令最初嚴禁を説誡すとも配下の者其法を犯すは村吏の罪輕からずとて遠嶋に處すべきに定む之より先き次郎兵衛の家に年久しく召仕ひし市兵衛といへる下僕は其性質實直にして主人の爲に忠節を盡しけり次郎兵衛は代々姉ケ崎村の名主を勤め篤實温厚にして村民を憐れみ貧家には食を惠み衣を施し撫育に志厚きを以て一村擧て其仁慈に懐き村内の治め方一點の曲事なし斯

く慈悲心厚き次郎兵衛なれば市兵衛の淳朴なるを愛し家事耕作を委すに市兵衛主家の爲に粉骨碎身の勞を厭はず勉勵せしかば村内市兵衛の忠勤を賞譽せざるはなし市兵衛には老母あり又妻と二人の女子あり家族總て五人次郎兵衛平素市兵衛がいまだ自宅も所有なく借屋住居なるをあはれみ近邊に五人の起臥不自由なき程の小屋を新築し此處に移住させしむ市兵衛其恩の高きを感き二六時中陰陽なく主を重んじ寢るに主家を枕の方にす其行狀多年一日も怠る事なく次郎兵衛も又市兵衛を憐れみ仁慈を加る事尋常の鍾愛ならねば主從宛然膠漆の如し然るに今般次郎兵衛が不慮の災厄に罹り獄に繫がれしより老父の悲歎妻子の愁傷市兵衛は只途方に呉れ在陣藩吏に就き次郎兵衛に代りて自分獄に下らん事を愁訴すれども獄舍は無罪の者を入る所にあらず汝か愁訴情に於ては然もあるべけれども公儀は私情を以て處置すべき條理なしとて更に採用の躰なければ今は止む事なしとて旅裝して居村姉ケ崎を出で江戸鍛冶橋内なる藩邸に至り其身代りて獄に繫がれ主次郎兵衛に出牢を恩免あらん事を愁訴に及といへども願ふべき條件あらば上總在陣の吏に達すべし如何に藩邸に來り歎願するも越訴は天下の制禁規則に於て採用すべきことならず殊に汝の主名主次郎兵衛は其身罪を犯すにはあらずと雖も村吏の職務至當ならず等閑の罪輕からざれば假令幾回愁訴すとも別人を以て入獄せしめ本人を救し出す法律なし仁惠は上にあり特別の俟命ありて救免の日もあるべければ歸村して救恩の

日を待つべしと懇切の說諭に如何とも爲方なければ力なく〳〵歸國し指を折て恩救の日を待しに豈計らんや總兵衛は死刑に處すの宣告ありし次郎兵衛は遠流に處し所有の田畠を始め住宅調度に至るまで沒收すとの宣告ありしかば次郎兵衛の家族は勿論一村及隣里の者に至る迄兼て村民撫恤の名高き他領まで村吏の摸範とも稱へ來りし次郎兵衛如何なる災厄にて如斯身とはなりけるかと自他相擧て歎く中にも市兵衛は只茫然として前後を忘れ蒼天に哭泣すといへども今は如何とも爲方なければ又江戸に趣き身を以て次郎兵衛に代り遠き島に至らん事を藩吏に悲歎すれども聽にも說諭せし如く罪ある者は其罪の輕重に依て處罰するは刑律の定規なるも他人の罪なきを以てこれを代らしめんことは其例あるにあらずと採用なき事最前の如く市兵衛十方に暮れ倩ら國の事情を考ふれば所詮愁訴の採用なきに於て次郎兵衛の出船も近きにあらん徒に江戸に空き日を送り若し主人出船せば悔て返らずイザ歸國せんとする前夜次郎兵衛の妻は妊娠の月滿ち分娩せしに女子なりしが產前より夫の災厄に歎きを重ねし身の今產するの苦しみに分娩は無事なりしも血治まらずして竟に空しくなり其翌日次郎兵衛は獄を出で船に乘り伊豆の大島に護送せられたり市兵衛は晝夜を分かず歸村せしは則ち次郎兵衛が出船の後にて今一夜早く歸らば主人に一言の辭別もすべかりしに面會せざる事の遺憾を歎き且主家の出產且妻女の死亡一時に斯まで凶變の重なり來るを悔ひ己の歸村後れしを恨み地上に臥し

て哭泣す人々集り來りて慰め所詮今更爲方なし其悲歎は理ながら妻女死亡の上は殘るは老人幼年の者のみ只力とするは足下一人ならずや其力と頼む足下が歎きに沈み後事を扶助せずんば如何せんと口々に說き諭すに市兵衛漸く人心地に歸り當惑のあまり本心を失ふまでに至りしは我ながら愚鈍なりきと厚く人々に謝し泣々次郎兵衛の家に歸り見れば老て病身なる父は此歳六歳なりける次郎兵衛の娘蝶と三歳なりける萬五郎昨日生れし女子と三人を側に置き新靈に香華を供へ悲歎に沈む躰なるに目もくれ心もきゆるばかりにて老主に歸村の遲刻を謝し次郎兵衛の出船に後れしを悔やみける、老主は內外の不幸一時の大難を歎くを市兵衛はいろ〳〵いひ慰め先づ亡人を只形許りの野邊送りをなし田畠住宅調度品次郎兵衛が所有の名あるものゝ限りは悉皆沒收せられ老主を始め三人の幼兒の至るべき家もなければ市兵衛我小屋に伴ひ入れ不自由はいふまでもあらねど此家は主人の賜物にして我物に似て我物ならず因て主家の物と思ひ懸念なく心寬に在らせられよと與の一間に請じて主從の禮を厚くす市兵衛の母も善く老主を勞はり妻も亦夫の意を守りて幼兒の介抱を懇にし彼嬰兒を懷に入れて村內を廻り乳を貰ひて養育し二人の女子には老主幼主の用便を役めしむる等其心配おもひやるべし元來貧家の上に俄に主從九人となり糊口の苦心も少なからねば人なき處に妻を招き我主家の大恩を受くる身なれば今老幼の主人方を介抱せんと思ふにつけ最心なき事ながら男女同衾せば愼

まんとするも煩惱の犬に責られ心ならず交りを結び若し此上に懷姙し子を生むに至らば何を以て十人の糊口を善くする事を得んや然りとて男女同居せば其事なしとも定め難しこれを避るは互に別居するに如かず夫のみならず同居なし難き一事あり今老主の容躰を察するに我貧苦の中に食客たるを殊の外苦心の躰なり故に幸ひ村內に一小家の賣却あるを購ひ其處に老幼の主を移し朝暮の用は老母に委ぬ和女は他家に年期を定めて奉公し給銀を前借し二人の小女も年期奉公をなさしめば些少の前借は得らるべし其金を集めて右小家を求めんとおもふはいかにと問ふ妻これを肯んし村內に主を求め事情を說きて前借金を懇望す聞く者その忠誠を感じいふが如くに給金を前渡しす市兵衛大に感謝し妻子の給金を合せ其家を購得て老幼の主を入れ市兵衛は夫婦相別るゝといへども家事は老母に賴み朝疾く起き出で老主の住居に至り安否を聞くにも尊敬昔日に異る事なし斯する事四年元祿十一年九月十五日領主勝守二十六歳の時發狂して自殺しければ所領を沒收せられ永く家名斷絕し姉ヶ崎村も幕府直轄の地になり御代官樋口又兵衛の支配所となれり于此於て市兵衛更に奮發し主人次郎兵衛の赦免を愁訴する事薔領主の時に倍す手代等最初は其愁訴採用あるべき條理ならざるを說示し更に取上べき躰なかりしかば市兵衛斯くては所詮事の成べき期なしと江戸へも一ヶ年に數度至りて或は覬籠訴駈込等種々に精神を盡せども其甲斐なく空しく月日を送る事六年元祿も十六年限りにて同十

七年改元あり寶永元年とかはり又此年も愁訴する事間斷なけれども其功もなくいつしか一年を加へ都合凡七ヶ年同二年の春に至り老主重き病に臥し次郎兵衛の赦免を待たで死する事こそ殘念なれと朝暮其事のみ歎くを側にて聞たる孫等は固より市兵衛は腸を割るゝよりも苦しく獨り心中におもへらく幼主といへども長女は十七歳男子は十五歳末女十一歳なれば假令此身なくとも生活の方法立ざるにもあるべからず我身附添ふ事なくば遠島の主の恩澤に浴せざる者一人もなければ村内の者後見していかんとも救助すべし我は今より江戸に至り假令越訴の罪にて一命を召さるゝとも主の爲には何をか厭はん然なり〳〵と胸算を決し妻にも意中を明し我多分は歸國する事難かるべければ和女我に代り村内の人に後事を依頼し老主を始め方々を後見せよと懇に示し老主へはいつもの如く江戸へ愁訴の爲に至れば暫く逗留せんも計り難し吉左右を待れよと慰め三人の男女若主人には老主看病怠るなき事を說示し心中には生涯の別ともならんとさしこむ涙を呑で夫々に暇乞し今度はいつもと異り一命を限りに愁訴の心底なれば卒忽に出訴すべきにあらず人にも問ひ試み志願を遂る方術を索んと道中すがらも胸算し先づ江戸に到着の上年來定宿せし馬喰町なる旅人宿に止宿し主人に事の委細を話し所詮尋常の歎願すとも許容あるべきにあらねば當時權勢の聞へ高き松平美濃守吉保侯に駕籠訴せんと心を決すれども田舍者にて其手續を知らず年來の因みに精しく敎示せれらん事こそ願はし

けれと思入たる躰にて商量す亭主逐一聞、畢り至極尤の覺悟なれども權門の大侯に駕籠訴ありとも其愁訴狀を取上らるゝ事なく邸内へ召連れ駕籠訴部屋と稱する一室に幽閉し其駕籠訴者の本籍の筋に達し訴狀を却下し本人を引渡さるゝ事定格なれば然る迂遠なる出訴して手數を經んより一身を抛ての訴なりせば御勘定奉行の方却て便利なるべし其方法は奉行登城として自邸出門の時をはかり玄關前に駈入り訴狀を出さば必ず一應の糺問あるべし其時心事漏なく上陳し赦免を歎願するに於ては万に一は志を遂らるべし今御勘定頭四名は萩原近江守重秀久貝因幡守正方戸川備前守安廣中山出雲守時春の方々なり其中にも萩原氏は筆頭なる上に權勢自餘の三名に勝れり幸に屋敷は猿樂町にて然まで遠きにあらねば旁々同家に至り前にいふ手續を以て出訴あるべしと懇に其手順を敎示す市兵衛は田舍の農夫願書も文章十分ならねば亭主執筆して一通の歎願書を認め翌朝市兵衛は重秀の屋敷の邊りに徘徊し時刻の來るを待ちしに今や重秀が玄關を下らんとするを見走せ入りて願書を出さんとす白洲に並び居し徒士侍等是は猥籍なり願あらばなど訴所に出ざるやと呵り止めて近づけんともせざれば市兵衛只地上に額を垂れ哭泣する躰の尋常ならざるを重秀深くあやしみ近習をして庭上の侍士に何處の者にていかなる仔細なるやと糺さしむ侍士市兵衛の側に至り汝は何處の何者なるやと問ふ市兵衛少々顏を上げ御代官所上總國市原郡姉ヶ崎村元名主の僕市兵衛といへる者の旨を申す侍士其

聞く所を啓するに重秀聞て上總國姉ケ崎村市兵衛といへる者は嘗て聞得し事あり彼れは主人の爲めに幾回となく愬訴せし者なり今見る所餘程思入し躰なれば其願書は一應取上げ當人は白洲に廻すべし我宜敷說諭して退かしむべしと家士に命じ其身は玄關より引返し直に評席に至る下吏指揮して市兵衛を評席の白洲に出す重秀正面に着座し市兵衛に對ひ種々糺問するに市兵衛事の仔細を上陳し假令此身は强訴の罪を以て命を絶るとも覺悟の前なりあはれ哀憐を垂させられ次郎兵衛の赦免ありて老幼の主に一度の面會をだにゆるされなば生前の心願死後の遺憾なしと答ふ重秀深く感じ旅宿の亭主を呼び出し先づ市兵衛を宿預となす由を宣告し直に登城して同僚久貝正方戸川安廣中山時春に市兵衛の愬訴の爲に出仕遲刻せしを謝し一應糺問の概略を話し先づ宿預となし置ぬ此上の處置各位の高評を請ふ由を陳述す三同僚も兼て其名の者多年向々に歎願の聞えあり其志操は賞贊するに餘るといへども其歎願ありとて粗忽に言上すべきにもあるべからざれば宜しく其者の在所を探偵し彼の平日の行狀且今上申する所の情狀虛實を詳にし其實否を探りて執政に言上ありては如何と議す重秀大に喜び己の心算各位に同じ然らば支配の代官に達し探索させしむべしと內議忽ち決し直ぐに樋口又兵衛に其旨を達す又兵衛其意を得姉ケ崎村の當時の名主及村民につき市兵衛の平日の行狀を穿鑿するに名主を始め村民のいふ所彼は淳朴篤行の者にて其主遠流に處せられし後貧困の家に老幼主

を引取り其身は田畠を所有するにあらねば妻子を他へ年期奉公に入れて其給料を前借し老幼主人四人を養育する事既に十一年村內は勿論近村も傳へ聞て彼が忠誠の篤行を賞讃せざる者なしとの具申を詳細聞取り又兵衛より重秀に告ぐ重秀其報を聞き其の詐僞なきを察し探索の旨趣を同僚に纖述し探索書を一覽させしむ各熟讀し益々市兵衛の忠節を感じ市兵衛より愬訴の頓末尙其行狀の實否探索の書を附して處分の指令を請ふ執政阿部豐後守正武土屋相摸守政直小笠原佐渡守長重稻葉丹後守正通等下座の者にして其主に誠忠の志十一ケ年の久しき間怠みなき志操は感ずるに餘るといへども次郎兵衛の罪は赦され難し是れ法令の定格なり然れども市兵衛の志を稱美なきも愍然なりと松平美濃守吉保に至當の裁判を諮詢す吉保重秀の具狀及探索書を披見し歸邸の後直に家臣荻生總右衛門茂卿志村三左衛門植幹の兩儒を召出し其意見を聞き尙翌日殿中に於て色々評議の末市兵衛には次郎兵衛の沒收地を悉皆與へ長男万五郎に特旨の恩典あらん事を言上すべしと決し事の旨趣を將軍綱吉公に言上せられけるに吉保始め執政中異論なき上は余に於ても別意なし宜しく施行すべしとて忠僕を感賞の上意ありしかば各々仁德を仰ぎ退きて其達案を作り同席一同披見の上衆て進達せし書類に達書を附し重秀に返下ありければ重秀領承し早速旅人宿に達し市兵衛を呼出し阿部豐後の令によりて宣告すと告げ知らせ其方主人次郎兵衛の遠流赦免を愬訴す其志奇特なりといへども次郎兵衛の處刑を

赦され難し是法令の定まる所なり唯最前沒收となりし田畠宅地を其方に下し賜はり次郎兵衛男子滿十五歳に至らば追放せらるべきを特別の仁惠を以て赦免せらるゝ旨を達し宣告書を與ふ市兵衛は首を垂れて平伏すれども猶よろこべる色なく少し首を上げ愁訴する所法令の定規を以て赦免なされ難きとの命は如何共爲方なしといへども萬五郎の處刑をゆるさるゝの仁命を蒙り冥加至極難有恩惠報し奉る所を知らず此上兎角歎訴すべきにあらねど今所賜の宅畠田地等を冀くは萬五郎に下賜はらん事を今若し御命の如く其田畠宅地を領せば名を主の爲に假りて其實主の田畠を横領するの譏り免れ難く人たる者の恥る處なり因て恩命重しといへども素意にあらねば自分にこれを領する事を得ずと固辭す重秀重て歎訴の意所謂なきにあらねど台命重し今更變改あるべからず疾々歸國し老幼の主を介抱すべしと諭す市兵衛拜謝し今度は處詮重き法を犯し强訴する上は其罪を被る覺悟にて家事は親戚に託し毛頭歸村の志なく發足せし身が主家相傳の田畠宅地を下し賜はるともいかで拜受する事を得んや恩命を違背するに似たりといへども萬五郎に下し賜はらん事こそ願はしけれと歎訴す重秀聞てその節義の正しきを感じ追て成否を達すべし旅宿に歸り再呼を待つべしと達し登城して委細を同僚に談ずるに一同彼が志操の尋常ならぬを賞美し執政に具申す執政益々感じ吉保に市兵衛の請願止むべからざる情狀を識す吉保も亦別識なければ上裁を請ふべしと奥に出で忠僕の節義を言上す綱吉公其者は得難き至誠の民なり切なる願ひに任せ主の男子に沒收地を與へ忠僕には別に田畠を授くべしとの台命に各々拜謝して退き早速評議の上萬五郎には沒收地田畠宅地山林等合額五拾八町一畝四歩を賜はり市兵衛には田畠六町と外に山林一町餘を合せ賜はる事に決し直に重秀より市兵衛に其旨を宣告せり市兵衛恩命難有旨を謝すれどもいまだ主人次郎兵衛の赦免なきを歎くの色あれば重秀法の重きは公の掟なり時機來らば次郎兵衛も赦免の日あるべし其僥倖を待つべしといひ諭して歸國させしめしが果して僥倖の機會來り寶永五年十二月甲府中納言綱豐卿御養嗣の命ありて同月五日西丸へ御入城相成り同十五日御名を家宣公と改められし御慶事の大赦ありて次郎兵衛も其赦に遭ひ出嶋の命下り蓋里に引渡されしかば市兵衛の素志此時に遂げ老父もいまだ存生にて父子の對面幼少にて別れし男女の子貳人も成長し今一人は妊娠中に獄に下り遠嶋の際に分娩せし女子も無事にして今年十一歳に成り初て親子相會するに至りしは偏に市兵衛が多年の忠誠の致す所と其頃世上の評判なりしとぞ誠に此市兵衛の如きは古今得難き人物といふべし

杉田壹岐……強直……決死は遺志の秘訣

至賊は神の如しとは是等を云ふなるべし、寛永の頃越前侯伊豫守忠直の家老に杉田壹岐といへるものあり元は足輕なりしが其身の才を以て微賤より登用せられ終に厚祿を受くるに至りしなり、其性極めて剛正にして常に犯顏直言君の過を匡正することを忘れず或時伊豫守在國にて鷹狩に出で晡時に及んで飯城あり家老ども何れも出迎ひしに伊豫守殊の外氣色よろしく家老どもに對して今日若者どもの働きいつに勝れて見えしあれにては萬一の事もありて出陣するとも上の御用にも立つべしと覺ゆるぞかし其方どもゝ承つて何づれも喜ぶべしとありしかば家老ども何れも御家の爲に何より目出度御事なりといひしに壹岐一人未座にありけるが默々として居たりしを何とかいふやと誓く見合せられしが堪へ兼ねられ壹岐は何と思ふやとありしに其時壹岐は「只今の御意承り候に憚りながら歎かはしき御事に存候當時士共御鷹狩野などの御供に出で候ときは先にて御手討にならんやも計り難くとて妻子と暇乞して立別るゝ由承候箇樣に上を疎み候ては萬一の時御用に立べしとは不存候夫を御存知なく頼もしく思召さるゝどの御意こそ愚なる御事にて候へ」と云ひしかば伊豫

守大きに氣色を損じければ伊藤玄蕃といひし者伊豫守の側に居たりしが壹岐に坐を立つべしといひしを壹岐聞て玄蕃をハツタとにらみ孰れもは御鷹野の御供して鹿猿を逐かけ廻るを御奉公とす此壹岐が奉公はさにてはなしいらざる事申すなとて其儘脇差を拔て後ろへ擲げ捨て伊豫守の側へ進みより只御手討に被爲下よ空しくながらへて御運の衰へさせ給ふを見んよりは只今御手に懸り候はゞせめて御恩を報じ奉る志のしるしと存じ候はんと云て頸をのべ平伏しけるを見給ひて伊豫守は何といはで奥へ入られけり其跡にて外の家老ども壹岐に向ひ御爲を思ひて申されしは尤なれども折もあるべき事に今日御鷹野より御氣嫌にて御帰りありしに御氣先きを折らるゝ事は遠慮もあるべき事にこそといひしを壹岐答ふるやう君へ諫を申上ぐるに御機嫌を窺ひ居りてはよき折とてはなきものなり今日はよき序にこそ存ずれ其上某事は御取立の者なれば各々とは分の違ひたるものなり御手討に逢ふとも其分の事なりといひければ諸家老各々感じ合ひける扨壹岐は家に帰り切腹の用意して君命の下るを待ちしが其糟糠の妻に向ひて其許に云ひ置く事只一つあり御身は女の身なれば直ちに御恩をうけたるにはなけれども我れ御厚恩を荷ふ故に足輕の妻といはれし身が今歴々の妻として大勢の所從に圍繞せられしは限りなき御恩にあらずや然れば我れ自害仰付らるゝ跡にても只朝夕今まで御恩の有難かりし事を忘れずして假にも上を怨み奉るべき心あるべからず若し女心にて我身の

物憂につけて上を怨み奉るやうなる事を言葉の末にも露をきなば黄泉の下迄も深く怨と思ふべしと云ひける、扨今やと待ちけるに夜ふけの頃人來つて門を叩き御用召しなり疾く登城すべしとなり扨こそと思ひ登城しけるに伊豫守は直ちに寢所へ召入れ其方が豈云ひし事心に懸りて寢られぬ間夜陰なれども呼びつるなり我が過りたることは兎角いふに及ばず其方が心ざしを深く感じ思ふて滿足するとの事にて直ちに腰のものを賜はりしが豈岐も思ひよらぬ事にて覺えず落涙に咽びつゝ拜謝して罷出けるとぞ、豈岐が至誠一貫死を決しての直諫は誠に感ずべき事なりける、然れども伊豫守は後終に其身を全ふすること能はずして配所に憂き身を果てしはまた是非もなきことゝもなり

法界坊……精勤……勇猛常精進

法界坊は幼名を顯太郎と稱し近江國阪田郡某村名主の子にして八歳の時兩親を失ひ出家して同郡鳥本の上品寺へ入り法弟となりて名を顯玄と改め苦學の功を積み傍ら亡親の冥福を吊ひけり、顯玄は元來怜悧敏捷の性なりしかば師の坊も特に之を鍾愛して教理を授くるに其進歩著しく後には天下の名僧知識となりぬべしと稱嘆したり、顯玄十七八歳の頃に至りては宗義の蘊奥をも窺ひ法談は辨舌爽然にして能く聽衆を感動せしめ近郷の評判高かりしが或日顯玄思ふやう我師の高庇によりて今斯く諸人の信仰を受くるは是れ偏に師の大恩なり宜しく師に奉仕して報恩謝德を勤むべきなれども我れ徒らに此の一郷僻村の間に於て聊か信仰の人を得たりと雖も甚深玄妙の法理何ぞ推究むる事を得べき如かず江戸に上りて學問を修め佛道の奥旨を悟らんにはとて師の坊にも之を乞ひければ師も亦甚だ之を嘉みし所望の趣き許可ありて顯玄は早速江戸に上り芝の學林に入りて日夜勤行怠らざりければ數年を待たずして天晴の善知識とはなりにけり、此時顯玄の行狀は昔日に異らず道德堅固にして假りにも破戒がましき擧動なかりしなり、彼の俗傳に浮猥の女子に關係せしが如くいへるは皆後

人の虚作に出でたるものなり、却説顥玄は修學の年限も滿ちたりければ一先づ學林を退き鄉里の上品寺に歸り師の坊に對面して永年の加護慈惠を謝し貧道の今日あるは皆師恩の致す所なりとて彼是物語りしに師の坊も太く悅び無事苦學の功を賞しけり、是より師の坊は取分け顥玄を愛し行く〳〵は本寺の法嗣と爲さんとて檀越にも其披露をなしけり斯くて二年を過ぎける後師の坊は隱居して上品寺を顥玄に讓りしかば顥玄は難有く拜承して上品寺の住職となり益々精勤を勵みけり、茲に上品寺は元來貧寺なりければ本堂庫裡客室等大破に及びけれども其まゝなりしかば顥玄思ふやう今本寺には之を修繕するの餘貯無し左りとて檀越に依頼せば迷惑の者もあるべし、よし我れ是より諸國を遍歷勸化して修覆の費を募り又本寺に釣鐘なきは不都合なれば是れをも建立するの費を集むべしとて早速檀越に其旨を告げ事務の事は所化納所へ申し付け夫れ〳〵挨拶して本寺を出立し名を法界坊と改め畿内を始め東海道筋を普く勸化修行して淨財を集めければ元來名僧知識の事なれば人々信仰して到る處に應分の喜捨を得一文半錢も數積りて今は莫大の資となり堂宇建立の費も殆んど十分を得たりけり、法界坊は尙も江戸に上り遍く都下を托鉢して廻りしに皆其淡泊なる擧作に感じ多少の寄進を爲し法界坊の名は八百八町の內誰れ知らぬ者なきに至れり茲に其頃新吉原某樓の娼妓に花扇といへる者あり廓內第一の全盛なりしが或時法界坊の事を聞き使を以て呼び迎へ女は罪深き者とし

聞に況てや妾の如き浮河竹の流れの身後世のほども恐ろしければあはれ能きに導きたまへと諸ひければ法界坊は之を受諾ひ敎法の事ども說き聞かせ最と懇ろに敎化せり斯くて此後屢々花扇の許へ至りて說法などせしに或る日花扇のいふやう日頃の御敎にて妾の迷の雲もやゝ晴れて眞如の月明かなり是も皆師の御坊の恩惠なれば何なりとも師に報ひ奉らんと思ひ立ちしが御望みのことあらば包まず語り聞かせ給へといふにぞ法界坊は外に望みとては無し貧道は堂宇の修覆と釣鐘建立の所望を兼て斯く諸方をば勸化せり然るに堂宇の修覆費は最早充ちたれば今釣鐘建立の一事のみ心掛りなれば之を鑄たく思ふなりと云ふ花扇そは易き御望みなり然ば妾が第一の施主となり其餘は廓中にて募り候べし女人卑陋消滅の爲にて候へば此事妾に委任給へと乞ひて是より娼家遊女どもに廻文して此事を告げしに我も〳〵とて金錢を嘉捨しければ日ならずして巨多の金高にのぼれり依て其頃有名なる鑄物師西村和泉守政時にたのみ鑄造にかゝりしが日を經て明和六年に出來上れり其釣鐘には花扇を始めとして施主の名を殘らず鑄つけ有りて頗る見事なる出來なりけり法界坊は之を得て大ひに喜び故鄉への光榮なりとて江戸を出發し東海道を車にて挽歸り上品寺の境內に新に鐘樓を造りてこれへ釣下たり斯て堂宇の新築修覆も出來ければ法界坊は益々道心固く行ひを淸くし敎化に力を用ひしが遂に立派なる大往生を遂げけり、今に至る迄上品寺にては中興の祖師なりとて敬禮更に衰へずとな

ん、實に法界坊の如きは古今稀なる善僧といふべし今日其の名を報恩謝に假り横柄にも御用金と稱して各地の檀家を欺き自己贅澤の費に供する奸僧等法界坊の事蹟を見て少しく愧づる所なきか

廣告

一江湖御花主樣方倍々御繁榮奉賀候扨て御吹聽申上候通り弊店は他の赤本書林と目的を異に一世運風潮に先だち文學社會に錄々たる大家方の手に成る新規新案の原稿相選ひ製本に注意し逐次出版致候間愛顧諸君方御贊成御購讀の程希望仕候

一此賣價壹目の外百般の書籍は御命令に隨ひ御取次仕候間書名著者出版人等御記載御注文願上候尤も從來の赤本は壹目割りにてよろしく有段は無油斷他店より一層廉價に相御き候間自然高價にも渉上候時は御申越次第直引可申候

一送金方は內國通運郵便又は銀行或は江戸橋郵便局宛等のかはせにて何れも前金に御願申上度候

一御注文書着三日以內に必ず出荷可仕候

一此切取紙へ品物御書入御注文の御方へは該賣價壹目の內特別一割引にて御送り申上候

一郵券代用は一割增にて願上候

一宿所姓名は可成御明瞭に楷書文字にて判然御認願上候

一御親友御同輩中小說雜書御愛讀の御方の宿所御姓名御通知願上度拙店より早速書目御送り可申候

一前件は下段及裏面に書入場所有之候間御注意願上候

東京日本橋通四丁目角　春陽堂　和田篤太郎

御注文主住所氏名	書籍類を購求せらるゝ諸君の住所氏名

新刊書籍目録

東京英和學校教授松島剛著
文部省檢定濟

近世地理學　日本之部　完　訂正三版

大本美製石版地圖十九葉挿入
定價九十八錢／郵税十六錢

發兌以來日尚淺しと雖大に地理學者の賞賛を博し教育家の歡迎を受け新聞雜誌の好評を蒙り斯道に於て博士地理學さして喧傳せらるゝり遂に本邦教育社會に於て近世地理學さす且其世紀の壯麗なる材料の豊富なるも [illegible] 天下の教師を吸收したらしめたるは實に本書近世地理學の [illegible] 日此上なし而して今や**文部省の檢定を經て中學校師範學校の教科用書**なるの極印を得たり併て普通讀者の參考書さして稗益少からず抑も本書は序文に記する如く著者多年の苦心經營に成り加るにドクトル理學博士原田豐吉君中央氣象臺理學士中村精男君帝國大學教授ドクトル文學博士三好學君教育家元良勇二郎君同杉山 [illegible] 君文學士大矢透君理學士 [illegible] 君同三成文一郎君理學博士鈴木弘恭君工學士知部忠承君水產家關澤明清君北海道保小虎君理學士杉 [illegible] 三郎君東京英和學校教授水科七三郎君東京 [illegible] 正太郎君帝國大學北原多作君等各專門家の實驗校閲を得たれば其材料の確實なるは之れ諸新聞雜誌の公評に徵して更に贅々を要せざる所なり

東京英和學校教授松島剛著
中學校師範學校教科用書

近世中地理學

實價八十五錢
郵税十四錢

教員試驗及日本之部二百頁餘着色地圖十九葉挿入
松島剛先生嘗て近世地理學を著述し地理學界のために光彩を放ちたり
中學校師範學校等の教科書或は參考書に御採用なりしは四方の教育社會に
歡迎せられたる所なりき然れども中等教育の初學生には稍々
其冊子の大にして且つ精細なるを嫌ふもの少からず今回先生更に其約節を先生に促し
遂に此中地理學を著述せられたり其人口物産等の記述は
一層平易に改め又前著の地圖を訂正し且文句は
之を四方の教育家の御注文に應じて一層の光彩を增したり殊に
日本地圖の描き方に就ても [illegible] 記述を乞ふ
● 附錄 亞細亞及歐洲貿易地圖

杉浦重剛君序　理學博士吉田彥六郎君校閲
理科大學四澤公雄君著
實驗理論

近世化學　上下合卷

實價九十錢
郵税十二錢

本書ハ理論及實驗ノ兩者ヲ網羅セル所ノ化學書ニシテ [illegible]
[illegible]

注文箋

金	金	金	金	金	金

書目冊數

金	金	金	金	金	金

書目冊數

郵税
運賃

小計 〆金

文書摘要

切取線

○文部省理論應用 大島孝造同著 **數學三千題** 三版
上下洋裝美本實價四十錢宛郵稅八錢宛
右今般文部省檢定濟に相成候間中學師範學校數科用書及數員參考書として廣告の者に御座候

○新撰 文部省檢定濟 大島孝造著 **數學五千題解式** 全 郵稅二十二錢
○大島孝造著 **珠算五千題** 全三冊 郵稅三十五錢
○大島孝造著 四則應用 **二百五十題集** 全 郵稅九錢
○大島孝造著 **小學珠算題叢** 全二冊 郵稅四錢
○工夫書翻 **教授案** 實價金卅錢 郵稅二錢
○朱熹集註 **四書** 片假名附 實價十錢 郵稅二錢

○訓點 廣瀬 **四書** 片假名附 實價十錢 郵稅二錢
○村尾元長著作 **北海道新圖** スウザントン原著 松島剛譯 文部省檢定濟 實價廿五錢 郵稅二錢
○密畫挿入 訂正八版 **萬國史要** 上中下 上卷 壹圓廿錢 中卷 郵稅十四錢
ウニヤツク氏著 久松定弘校閲 今井恒郎補譯
○哲學階梯 全 郵稅十五錢
商業學校得業生堀口義三著
○商業簿記教科書 全 郵稅十五錢
○故卷菱潤 眞艸千字文 全 郵稅二十錢
○明治算法新書 全 郵稅十錢
○改正 合級教授術 全 郵稅十二錢
○石田幸二郎著 **衣服裁縫獨案內** 全二冊 郵稅十八錢
櫻州先生著 岡三慶校
○和漢對照 **記事論說軌範** 全二冊 郵稅十八錢
○岡三慶著 **麗世文體明辨** 全四冊 郵稅十八錢

伊藤桂洲著 岡三慶著
○明治活用文證大全 半紙本一冊 郵稅二十五錢
佛國ルーソー原著 法學士原田潛譯
○民約論覆義
○勝海舟翁序 松島剛譯 日清文明論 合卷
○平田東助合譯 平塚定二郎 國家論 全 郵稅一圓廿錢
○中村千太郎氏著 伊藤內閣史 郵稅十錢
○日本六法全書 寸珍美製 郵稅廿五錢
○改正徵兵令 郵稅五錢
○官民必携 諸規則罰令 郵稅十錢
○日本民法 寸本 郵稅七錢
○日本民事訴訟法 寸本 郵稅七錢
○日本商法 寸本 郵稅二錢
○日本財產取得訴訟法 寸本 郵稅五錢
○頭書插畫 國史略字類 大全 郵稅二十六錢
○東京活用字典 潛葉 郵稅二十錢

美妙齋編纂 新式 **節用辭典**
實價四十八錢 郵稅八錢 中本美製 總ク ロハス七百頁餘
○無限七曜表○漢字假名遣○難字地名索○疑似の漢字表○年號類集○日本海陸交通全圖

附錄
本書は從來の節用集の外全く一機軸を出したるものにて著者が日本大辭書編纂の間經驗に基き尊ら普通用として廣く農工商その何れにも適する樣編纂したるものなり此辭典韻を備ふれば當用に際し此上もなき便利なるべく殊に其價格の低廉なる亦比類なし之に加ふるに一方亦學者の爲にするところあり古語と假名遣等を嚴密に正したれば操觚者亦之を得て無二の伴たるべしと云爾

○東京活用字典 和本 郵稅四錢
○經氣纖主人著 吾妻都々一風流花圖 全 郵稅二錢
南李樂龍原撰 大久保櫻州訓解
○詳解 繪入唐詩選 全二冊 郵稅四錢
○竹內隆信 編纂評新體詩選 全 郵稅四錢
○新體詩格愛國美談 合卷 郵稅二錢
○新撰 增補掌中明治和歌教草 全 郵稅十五錢
○挿畫作例 幼學便覽 全 郵稅二錢

渡邊省亭編輯

美術世界

美術世界は木版彩色革齋揩極上等製本の美麗なる繪畫雜誌なり第一卷より廿三卷迄追揩致取揃あり

每月發行實價卅錢十冊前金二圓八十錢郵税一冊に付四錢郵劵代用は一割增二錢切手に限る

○美術畫

竪軸大判竪一尺六寸幅一尺一寸板彩色 實價各金十二錢宛郵税二錢宛

目次

- ○第一號 長澤蘆雪筆 丹鶴愛雛鳥の圖
- ○第二號 狩野越前守法眼元信筆 玄宗皇帝楊貴妃之圖
- ○第三號 筆者不明 處女盛裝に粧之圖
- ○第四號 狩野探信女子筆 美人之圖
- ○第五號 英一蝶筆 獅子舞遊見之圖

○美術名印部類

川崎千虎 松尾四郎合著

國風畫 實價三十錢 郵税四錢

此書は編者が多年苦心經營して本朝美術家の落款印形を描寫集聚したるものなれば其精密正確なること固より言を待たず先第一着に國風畫則ち巨勢土佐住吉板谷等の系圖を掲げたれば美術家たる及好古家たるもの必ず坐右に欠くべからざる一大珍書なり

- ○故中野其明著 尾形流印譜 實價二十五錢 郵税二錢
- ○故中野其明著 尾形流百圖 實價六十五錢 郵税八錢
- ○本間光則著 浮世繪類考 實價廿五錢 郵税六錢

○入給 歷史叢談

每月一冊出版 大判美本 實價金五錢 郵税二錢

第壹號目次 ◎齋藤實盛◎伊達政宗◎那須與一◎頓智 ◎堀川夜討◎松平信綱◎由良光氏◎赤穗の尼◎佐野了伯◎熊澤蕃山

第貳號目次 ◎宇治川合戰◎柴武文◎阿新丸◎形見の鎧◎兄弟勇烈◎新井白石

第三號目次 ◎木下丸◎矢切但馬◎長谷部信連◎電坊 ◎源氏捕◎足利又太郎◎渡邊競◎三位一類滅亡◎三井寺評議◎瓶割柴田◎宇治合戰◎山內一豐妻◎筒井郡妙◎明智左馬介

第四號目次 ◎一來法師◎澤田兵太夫母 ◎笠城の皇居◎唐崎濱合戰◎十津川落◎楠正成◎笠城合戰◎隅山小見山◎松の下 鑄◎板倉三所司代◎瀧川一益◎大高源吾

○修身畫談

每月一回出版 大判美本 實價金五錢 郵税二錢

世間に修身書多しと雖も兒童の心に面白き著ならでは厭きて讀まざるの要あり然りとて中庸を外れたる狂漢畸人の行を記したる書は潔白にして他の色に染み易き少年の天性に對して教化の目的を誤まること勘からず此書は文明の時世に適當なる面白き立志修身の談を和漢洋の歴史格言等に求め平易の文躰を擇み假名を施し圖畫を挿み少年をして讀んで倦まざるの間に不知不識德性を養ふの目的にて編輯したるものなれば學校の敎師幷に家庭の敎育を任とする父兄は依刊必ず一本を購ふて兒童の敎導に備へ給はんことを乞ふ

是より小説

- ○正直正太夫著 反古袋 實價廿五錢 郵税四錢
- ○高瀨文淵著作 若葉 實價三十錢 郵税六錢
- ○南新二著 文車 實價三十錢 郵税六錢
- ○新作 漣山人 眉山人兩著 萩桔梗 實價二十錢 郵税四錢
- ○新作 末松謙澄 河尻寶岑合著 小楠公 再版 實價廿五錢 郵税四錢
- ○川上眉山人著 蔦紅葉 實價廿錢 郵税四錢
- ○南翠外史著作 荒海實一 實價三十錢 郵税六錢
- ○ちぬの浦浪六 鬼奴 實價廿五錢 郵税四錢
- ○紅葉山人著作 三人妻 全二冊 三版 實價五十錢 郵税八錢
- ○櫻癡居士著作 山縣大貳 實價三十錢 郵税六錢
- ○櫻癡居士著作 櫻癡放言 三版 實價三十錢 郵税六錢
- ○櫻癡居士著作 天竺德兵衞 再版 實價三十錢 郵税六錢

新作小説

○尾崎紅葉山人 ○饗庭篁村著作 ○紅葉山人著作 ○丁々子著 ○忍月居士著 ○漣山人著 ○柳浪作 ○紅葉山人著 ○湖處子著 ○蝸牛著 ○露伴著 ○蝸牛著 ○露伴著 ○森鷗外漁史著 ○南翠外史著作 ○紅葉山人著

花相撲 夏小袖 凧の糸目 二人女 美だれ咲 露子姫 友禪染 五枚姿繪 紙きぬた まほろし 葉すゑ集 新葉末集 水沫集 朧月夜 紅鹿子

三版 再版 三版 四版 再版 再版 再版 四版 再版 再版

實價二十錢郵税四錢 實價廿五錢郵税四錢 實價三十錢郵税四錢 實價廿五錢郵税六錢 實價十五錢郵税四錢 實價二十錢郵税四錢 實價二十錢郵税四錢 實價卅五錢郵税八錢 實價二十錢郵税四錢 實價十八錢郵税四錢 實價廿五錢郵税六錢 實價廿五錢郵税六錢 實價六十錢郵税十六錢 實價卅五錢郵税十錢 實價十二錢郵税四錢

一集 十文字
二集 百萬兩
三集 電氣の死刑
四集 偵探五人の生命
五集 小やれ手紙
六集 影の法師
七集 足跡
八集 美人の狩

●ちぬの浦なみ六著 破太鼓 實價廿五錢 郵稅四錢

●涙六篠刪無名氏著 夜嵐 實價三十錢 郵稅六錢

●卿天子作省亭畫 蝦夷錦 實價廿五錢 郵稅四錢

●尾崎紅葉山人著作 戀の病 實價十錢 郵稅四錢

●宮崎三昧道人著作 塙團右衛門 實價廿五錢 郵稅六錢

九集 風流醫者
十集 血染の針
十一集 活人形
十二集 怨の片袖
十三集 ひたりきゝ
十四集 銀行の秘密
十五集 黑髮
十六集 無頭の針

十七集 手形の賊
十八集 毒藥
十九集 美人局

錢道小說 一集 鳴神組
二集 寒帷子
三集 漂流の佳人

毎月發行一冊讀切剞版美本 實價郵稅共各金拾錢

三遊亭圓朝口演 ●菊模樣皿山奇談 實價廿五錢 郵稅六錢

●圓朝口演桂舟畫 錦の舞衣 實價二十錢 郵稅四錢

市川新蔵作武内桂舟畫 ●小說木枯 實價二十錢 郵稅四錢

●探偵小說俠骨 實價廿五錢 郵稅四錢

●船來智惠袋 實價二十錢 郵稅四錢

文學世界

全部十二冊 各冊切賣價郵稅共二十錢

中型木版紙色刷表紙入 各一冊切賣價郵稅共二十錢

○第一 紅葉山人作 命の安賣 全一冊 讀切

○第二 山田美妙齋作 猿面冠者 全一冊 讀切

○第三 二十三楷堂作 かくし妻 全一冊 讀切

○第四 桑谷趣山人作 かたゝ糸 全一冊 讀切

○第五 忍月居士作 辻占賣 全一冊 讀切

○第六 正直正大夫作 かくれんぼ 全一冊 讀切

○第七 江見水蔭作 野試合 全一冊 讀切

○第八 紛華庵主人作 ひつじかひ 全一冊 讀切

○第九 金子春夢作 今みゆき 全一冊 讀切

○第十 乙羽庵主人作 おもひ川 全一冊 讀切

○第十一 安田舞友作 有り難き神も佛も 全一冊 讀切

無し

小說むら竹

全部廿卷 合卷五冊 大凡三千頁 美製實價壹圓五十錢 郵費廿錢

愛媛縣 篠村著

全部目錄

第一集 從第一卷至第四卷
●玉簾●窓の月●下宿屋●走馬燈●捫へ所●他山の石●松の雨●蟹蟹み●通人●人の噂●深山木●納涼臺●鼓椿●三筋町の

第二集 從第五卷至第八卷
●雨●雪●下萌●魂膽●影法師●ムツカシヤ●軒の●恩に酬●垂水●水の流れ●義理の柵●翻弄●小說目●鋭●驅●落●今年竹●病の原因●醫●身の●蔵が●病の原因●醫

第三集 從第九卷至第十二卷
●跡取息子●時の用●振分道●人の●行末●文の間違●大阪の話●閻の梅●離婚の果●面目玉●俳優氣質●夜●中よし●擂博多●時の錦●つり堀●見の手柏●廻り車●雨の舍り

第四集 從第十三卷至第十六卷
●煩惱之月●腹の子●大石眞虎の傳●當世寫眞鏡●暗の烏●繰の糸●めし●當世寫眞鏡●孝女の幸●かし損●當世寫眞鏡●作り菊●糸の亂れ●當世寫眞鏡●苦樂

第五集 從第十七卷至第二十卷
●遊葉娘●對扇●紅葉●小町娘●新●殺生石●川柳●驅めぐり●入谷の記●鐘●秩父紀行●房州紀行●原●木曾道中記●もしほ草

○小説 **聚芳十種** 各一冊讀切十冊完備 豆冊十三錢郵税四錢宛

○一卷 香雪散人著 **花の種** 全一冊
○二卷 紅葉山人著 **新色懺悔** 全一冊
○三卷 山田美妙齋著 **やたらじゃ** 全一冊
○四卷 南翠外史著 **臥待月** 全一冊
○五卷 抱一庵主人著 **閨中政治家** 全一冊
○六卷 廣津柳浪子著 **糸のみだれ** 全一冊
○七卷 三味道人戀の重荷 醒伴子著 合卷 化 全一冊
○八卷 忍月居士著 **黄金付** 全一冊
○九卷 幸堂得知著 **さゝきげん** 全一冊
○十卷 竹の舍主人著 **雪達摩** 全一冊

○二版 正直正小太夫著訳 **あぶら地獄** 實價廿錢 郵税四錢

之れを讀む者はいゝ子讀まぬ者はいゝ子讀むと謂まぬは御勝手なれども買ふと買はぬは御勝手にあらず是非共一本を勝ひ玉はれと慾の無い春陽堂が申す 正太夫記

○**新作十二番** 半紙木版摺極彩色表紙口繪入 美本一冊讀切各實價三十三錢郵税まけ

○一番 翠庭算村著 **勝岡**
○二番 紅葉山人著 **此ぬし**
○三番 山田美妙齋著 **教師三昧**
○四番 三味道人著 **桂姫**
○五番 南新二主人著 **錦倉武士**
○六番 學海居士著 **十津川**
○七番 香雪散人著 **梅その**
○八番 幸堂得知著 **蓬莱噺**

○五ちぬの浦 版 **混六著 奴の小万** 實價廿錢 郵税六錢

混六氏が引絞つたる滿月の弓勢、其三の矢として兵と放ちたるは此小説なり、諸君が胸の鵠的にクサと貫くか、但し外て他の岩石に跳くだけんか、試に受けて見玉へと申すは、萬事に自慢せぬ

○八ちぬの浦 再 版 **混六著 三日月** 實價廿錢 郵税四錢

考そこ退け、まかりつんでたは正廻孝保に異なる實た三日月次郎吉、鼻祖の幽下貼に江戸の八百八町を跳梁し、飛島の山の落花坂江戸に一名物なる町奴で御座るは、南へ小袖に止めて、うつて変く六尺の身に伊達模様の羽さばき、大人は花に嵐の月に酔ふの今日此侠客、旺盛の奇抜新は更に百倍す、字々飛動、句々眼活、大侠が斗の如き、恩怨分士が眞勢動き竹を乱し來つて讀者の眉を挑げ肉を動かす、思ひ出し者者の白髪の口語は一段に大侠の序文は者の人となりを描出し者者の人となりを、且一回毎に興趣の新味ありて一層の興を添へ、疑ふ者は試みに繙け

○六ちぬの浦 版 **混六著 井筒女之助** 實價廿錢 郵税六錢

三日月の形にチクと見へしまゝ世人が待ちに待つてヤイノ〳〵と焦れたる女之助いよ〳〵めかしこんで顕れたり、著者は混六、文致意匠は更に喋々せず、表紙口繪等の刷師を泣かせて美麗尚を極めたる往本店いまだ此繪の如きあらず且御斷り申上ぐ女之助は男なり、妻ばかりを見て浮かれ玉ひそ

字入 **大通世界** 全三冊 實價廿七錢 郵税四錢 切

○小説 此書は幸堂得知標註字入小説黄表紙縮寫半紙木版彩色摺の表紙見返し美麗なる和本也

○紅葉山人著作 **小説伽羅枕** 四冊 實價廿錢 郵税六錢 版

尾崎紅葉氏常に好て短篇を綴る、數年の著作五十餘種に及ぶと雖ども、未だ曾て伽羅枕の如き長篇を見ず、金剛石の徑一寸なるもの、特に寶粒すべきなり、而して其著想は深麗婉約、其行文は瘦勁清深所謂紅葉山人の腦髓は收めて此一卷に在り製本クロース金文字入大本

○三版 坪内逍遙著 **春の屋漫筆** 實價廿錢 郵税六錢

此書は坪内逍遙氏が近頃の筆に成れる三種の文章を合めるものなり第一種は飄世蜘俗の物語にして第二種は物語の如くに綴りたる文學的評論なり而して第三種は最もかしく面白き西洋の逸話九十餘件を雖人にもわかるやうになたらかに飜譯したるものなり第一種を讀まば當世の社會宛然として眼に映すべく第二種を讀まば現今の文壇を卜するに足るべく第三種を讀まば奇人、英雄、君子、才人新陳代謝して讀者が面前を通過するを見るが如き興あるべし

○山田美妙齋著 **新太平記** 再 版 實價廿錢 郵税四錢

新引 九二

覇葉枝逐に堅く怪物其幹に培へば枝は天日を支へ常に漠々。男兒毒を啖はい皿まで舐れ、こて一天下を固めて見も角も十三代、此腕の力に向ふ敵聊も日本に無いか笑止な！幹磨れて虫生じ、國衰へて乃ち革命。革命を亥世の反動と思ふたなら吾佛獨逸の亂臣賊子の評は言へまい……足利直義舌

○西村芝山居士著 近古慷慨家列傳 實價八錢 郵稅四錢

書中人名目錄

●佐久間象山 ●勝田東湖 ●浦生君平 ●吉田松陰 ●平野國臣 ●水戸齊昭 ●福原越後 ●綿川星巖 ●坂本龍馬 ●安積武貞 ●鵜飼父子 ●岩倉具視

●渡邊崋山 ●堀田一雲 ●縄部濱 ●高山彦九郎 ●頼三樹三郎 ●武田耕雲齋 ●雲井龍雄 ●高野長英 ●小原鐵心 ●藤本鐵石 ●大橋順藏 ●安島帶刀 ●木戸孝允

●梅田雲濱 ●浮田一蕙 ●林子平 ●僧月照 ●高杉晋作 ●山縣有朋 ●久坂玄瑞 ●橋本左内 ●日下部伊三次 ●清川八郎 ●諸公之群像也

○三天居士閑著 維新豪傑談 實價卅錢 郵稅六錢

書中目錄

第一觀音巷梅田源二郎●第二白毛鎗永井雅樂●第三好丈夫平野次郎●第四薩摩下り信月照●第五双俠近藤正纂●第六狼が辻姉小路公知●第七生麦事件大福院百歩●第八古狂生頼三樹三郎●第九古壯士木戸公●第十無頼漢木戸公忠侯甚助

○飯田宇宙君稿 故小室信介先生遺稿 ○興亞綺談夢戀々 全 實價廿錢 郵稅四錢

○訂正太平記 中本全三冊千三百餘頁 實價五十錢 郵稅廿六錢

○一風著 小說 春の夕暮 全 郵稅二錢

○千觀雨樓主人著 櫻痴居士閲 石版畫 櫻葉入 全 郵稅六錢

○今日之東京 全 郵稅二錢

○福地源一郎著 璽號美談 全 郵稅四錢

○雪散人著 前田香雪 新形蒔繪護謨櫛 全 郵稅六錢

○散人 採菊 月雲兩面鏡 全 郵稅四錢

○紫芳 加藤譯 椿の花相 全 郵稅六錢

○主人 霧の國著 大川物語 全 郵稅四錢

○塚原渋柿園著 曼府の叛亂 全 郵稅六錢

○婆娑村著 新方萬金丹 合冊 一冊讀切 郵稅四錢

○篁村著 當世大風呂敷

幸堂得知作 輕口雜談 春のやゝ〳〵 全 郵稅二錢

○花月火 淡路島 三冊合綴 郵稅四錢

○岡本綺堂著 幸福之種 全 郵稅二錢

○南翠著 小說 心中 全 郵稅四錢

○南翠 新著 邉池の水禽 全 郵稅四錢

○小宮山昇居士著 しらぬ火 全 郵稅二錢

○採菊散人 新著 とりかへはや 全 郵稅四錢

○香雪 新著 水と石 全 郵稅四錢

○山人 蓮著 喜團圓 全 郵稅二錢

○散人 雪著 怪物屋敷 全 郵稅五錢

○香雪女 羽子著 合冊 郵稅四錢

○三味人 著 道遊 郵稅二錢

○依田學海居士著 拾遺後日連枝楠 大本 全 郵稅二錢

○饗庭篁村著 苦樂 大本 全 郵稅四錢

○森田思軒居士譯 碗茶 大本 全 郵稅五錢

○森田思軒居士譯 破叛魁 全 郵稅二錢

○忍月居士著 風流柳ごし 合讀切 郵稅六錢

○中井錦城著 志願兵 郵稅二錢

○東條竹堂著 八重櫻里の夕暮 全 郵稅二錢

○錦巷の懺悔の雫 折 全 郵稅二錢

○岡野著 裁判小說 秋暮嘆 全 郵稅六錢

依田百川補助 河尻寶岑著

○豐臣太閤烈封冊 全 郵稅四錢

○隔恋著譯 鬼車 全 郵稅二錢

中村敬宇序 陰山廣忠譯

○進化 世界未來記 大本 全 郵稅十錢

○後藤伯序 辻治之著 志士淑女の想海 全 郵稅四錢

ユニールスベルヲ著 井上勤譯

○亞非利加内地 空中旅行 全 郵稅六錢

○三十五日間 福田直彦譯

ヴユニールスベルヲ著

○萬里絶域 北極旅行 全 郵稅十錢

○未廣鉄腸居士著 政治小說 雨前の櫻 全 郵稅四錢

○鉄腸居士著 國會開設の前後 全 郵稅四錢

○依田百川序 辻治之著 破窓の風琴 全 郵稅四錢

○高田早苗閲 森三樹著 山田長政の傳 全 郵稅六錢

○嘉澤著 小說 日本未來 全 郵稅十錢

○幡松社會著 小說

法學士山口班吉著　文學士濱田健二郎閲

○偉蓋世　比斯馬克公傳　全　廿五錢　郵税四錢

ビーコンスフヒールド著　牛山鶴堂譯

○雙　鸞　春　話　全　十一錢　郵税六錢

○石川鴻齋著　奇談　再生　花　神　譚　全　十二錢　郵税六錢

○大星　編輯　現今名家　記者列傳　全　十八錢　郵税四錢

○南　翠著　一笑　新桂の佳人　全　二十錢　郵税六錢

○須藤著　美なしご　全　十錢　郵税四錢

○南　翠著　慨世恋歌　朋日葵　全　二十錢　郵税六錢

○南　翠著　隱君子　全　十八錢　郵税六錢

○南　翠著　旭章旗　全　廿八錢　郵税六錢

○南　翠著　滿春露　全　十八錢　郵税四錢

○南　翠著　行路難　全　十八錢　郵税四錢

○南　翠著　萬春樂　全　十八錢　郵税四錢

○南　翠著　金香露　全　十錢　郵税四錢

○麗　庭著　蓮葉娘　全　六錢　郵税四錢

○麗　庭著　新殺生石　川添柳　全　六錢　郵税四錢

○前田香雪散人著　鴨宅叢談　全　六錢　郵税四錢

○宮崎三昌著　味道人　二夫婦　全　六錢　郵税二錢

○牛山鶴堂　新譯　魯敏遜漂流記　全　十錢　郵税四錢

○グリム原著　井上勤譯　世界狐の裁判　全　十八錢　郵税六錢

○故古河歌阿彌作　狂言百種　各實價金廿錢　郵税六錢

○第壹號　村井弦齋巧破案　八篇　全一冊

○第貳號　拉江戸小說通引　怪談月笠鈴　三篇　全一冊

○第三號　島崎月白　浮塵子　三篇　全一冊

○第四號　木岡呈雨根底留　浮塵子　四篇　全一冊

○第五號　勤善盜孫學子夢　五篇　全一冊

○第六號　新皿屋敷月雨草　隱石碎遇邪物力　三篇　全一冊

○第七號　三人宮三郎初買　七篇　全一冊

○第八號　水天宮利生深川　月光蛟竹劫　三篇　全一冊

石黒忠悳先生評序　谷口吉太郎君纂譯

通俗病理問答　第一編　內科の部

陸軍治法　實價十八錢　郵税四錢

流行病ある時の心得

此書は人體解剖の細圖を付し各自治療の出來得る樣藥名調合法及養生方法等詳細に記載あり

○第一章　人體撓造の概略　第一骨格●第二肉●第三皮膚○第二章　呼吸器の工合并に普通にある病氣　第一呼吸器の構造●第二鼻の炎●第三鼻血●第四喉頭の出血●第五喉の出血●第六氣管支カタル●第七肺勞○第三章　血行器の構造●第一心臟病●第二血行病●第四章　消化器の工合并に普通の病氣　第一消化器の工合●第二胃病●第三嘔吐●第四腸の病●第五吐血●第六流涎●第七腸の病●第八下血●第九霍亂●第十痔●第十一下痢●第十二便秘●第十三黃疸●第十四寄生蟲○第五章　泌尿器の工合并に普通の病●第一泌尿器の工合●第二腎臟病●第三還尿病●第四陰痿●第五遺精○第六章　皮膚病及び營養の病氣　第一癩病●第二痲疹●第三苔癬●第四痒疹●第五水疱●第六瘡●第七痲疹●第八痒●第九疥癬●第十風●第十一倭●第十二破傷風●第十三破傷風●第十四卒中○第七章　神經の病　第一痲狂●第二赤痢●第三腦チブス●第四咽喉●第五百日嗽●第六流行性感冒●第七虎列拉●第八窒扶斯●第九疥癬●第十下痢○第八章　中毒　第一モルヒネ中毒●第二アルコホル中毒●第三鉛中毒●第四肉の中毒●第五炭酸中毒●第六金屬中毒●第七煙草中毒●第八附錄　第一住居の事●第二飲食の事●第三沐浴の事●第四睡眠の事●第五運動之事●第六

通俗病理問答　第二編　外科の部

實價金十八錢　郵税四錢

○總目錄○第一章　腦の働きと及び其創傷の事●一腦の働き●二腦の振盪○第二章　耳及鼻の工合并に普通にある病氣●一耳の構造●二耳の炎●三耳の異物の入りたる時の心得●四皷膜外傷●五皷膜の炎●六耳の中に普通にある病氣●一口の工合并に普通にある病氣●二口の工合●三齒の工合●四齒骨質の事●生齒の事●六生齒機の事●七齒石●八齲齒○第三章　泌尿器の工合并に普通にある病氣●一泌尿管の病氣●二耳下腺の病氣●三耳下腺の病氣●四舌下腺の病氣●五胸部腹部の病氣●一乳房の腫瘤の病氣○第五章　胸部腹部の病氣●一乳癌●二乳瘤●三胸の怪我及び脊骨の怪我●四頸曲り●五腸癰○第六章　男女泌尿器及生殖器の病●一睾丸炎●二包莖●三陰莖の病●四膀胱炎●五陰門狹窄●六會陰の烈け傷●七閉陰●八陰の狹窄●九子宮の病●十卵巢の病○第七章　手足の怪我●一上膊骨の脫臼●二股關節○第八章　一種々の怪我●一火傷●二凍創●三虫に刺されたるときの心得●四毒蛇に嚙まれしときの心得●五犬に嚙まれし時の心得○附錄●一眼に付て●二看病の

心得◎五三厠既に付て○目次◎總說◎空氣◎飲食◎衣服◎住家◎婚姻◎交媾◎姙娠◎小兒期◎幼年期◎成年期◎壯年期◎老年期◎人世の快樂◎疾病原因及注意◎傳染八病の原因及豫防法◎虎列刺◎腦窒扶斯◎赤痢◎實扶的里亞◎痘瘡◎梅毒◎疥癬◎人間福利の階級◎資質の區別◎發力の强弱(完)

獨乙譯 男女交合新論

本書は東京淺草瀧山佐吉なる者惡なる類似偽板出版致し直ちに差止候へ共地方發賣へ直殷の安き爲め回り居候義も難計候間著者及出版所御吟味の上御買關遠なき樣御注意願上候

金十錢 郵稅四錢

◎目錄◎第一交媾は最も貴重すべし◎第二愛情は情人と交媾せんとの望みに出◎第三交媾は男女の搆造愛情及び婚姻の精神たり◎第四交媾の適否に依て利害苦樂を異にす◎第五交媾の目的及び其方法◎第六兩親の形狀性質等は其兒に遺傳す◎第七父母たるべき者は未生兒の爲に其才德行狀を修養すべし◎第八精神の愛は設生に必要なり◎第九精神の愛を以て爲す交媾は淫慾の爲に爲す交媾よりも許多の快樂を生ず◎第十精神の愛は淫慾を壓し淫慾は精神の愛を壓す◎第十一愛情と生殖器とは相感應す◎第十二愛戀する人には陰具萎縮す◎第十三愛情と交媾とは必ず相伴ふ◎第十四甲に愛情ありて乙と交媾するは姦通を重ねるなり◎第十五情慾は設生に必要なり◎第十六交媾には男女とも盛に情慾を發動すべし◎第十七情慾は女子にありて最も緊要なり◎第十八女子は男子をして情慾を發動せしめ生殖の功を遂る義務を負ふ◎第十九交媾の時女子淫情を生ぜざれば男女とも其害を受く◎第廿男女淫情を交換せざれば激怒を生ず◎第廿一多淫の夫に忠告の書◎第廿二女子の情慾少き理由及び是を發生せしむる方法◎第廿三孕胎の後は交媾すべからず◎第廿四新婚の夫妻に忠告の言◎第廿五父母の望に聽て男兒或は女兒を生じ得べき法 兩雙生子の說◎第廿六設生に可なる日時を論ず◎第廿七交媾に付て の注意◎第廿八交媾は全身の作用を促動す◎第廿九精神の躁激と羞恥とは設生に害あり◎第卅情慾を節抑するは害あらざる說◎第卅一亂雜の交媾は爲すべからず◎第卅二妾を蓄ふる害を論ず◎第卅三避孕は天理に背く事◎第卅四丟精を扣へる害を論ず◎第卅五精神の愛は避孕の良法なる事◎第卅六子なき原因及び其治法を論ず◎第卅七陰部解剖の學を世に普及する事の必要ある說◎第卅八精蟲の說◎第卅九睪丸の搆造及び其効用◎第四十陰莖の搆造及び其効用◎第四十一尿道と攝護線との搆造及び其効用◎第四十二龜頭と包皮との搆造及び其効用◎第四十三子宮の搆造及び其効用◎第四十四陰道の搆造及び其効用◎第四十五卵巢卵珠喇叭管の搆造及び其効用◎第四十六男女の陰具は互に能く適合す◎第四十七陰具の摩擦は全身の作用を起す◎第四十八壓力は交媾に必要なり◎第四十九孕胎の說

豫告

古今 名譽實錄第二卷 目次

○山田長政(遠羅偉跋の實錄)
○中山愛親(殿中問答の實錄)
○松本莊左衞門(民權强訴の實錄)
○佐々木累(貞女浪人の實錄)
○神谷轉(仙石騷動の實錄)
○荒木又右衞門(上野敵討の實錄)
○渡邊數馬(同斷敵討の實錄)
○近江虎徹(刀工出身の實錄)
○松前五郎兵衞(俠客危難の實錄)
○三宅康盛(龜山城主の實錄)
○石河政方(奉行明斷の實錄)
○太田千江(姐妓喜遊の實錄)
○濱田彌兵衞(異人降服の實錄)
○蘆田勘助(鎗持忠義の實錄)

十月一日發行

明治廿六年九月十三日印刷
同 年同月十四日發行
毎月一回發行 一册定價金拾五錢 郵稅金四錢
發行者 東京日本橋區通四丁目五番地 和田篤太郎
印刷者 東京牛込區市谷加賀町一丁目二十三番地 根岸高光
發行所 東京日本橋區通四丁目角 春陽堂
電話五拾壹番
印刷所 東京牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍工場
電話十九番

ちぬの浦浪六 三日月 版 郵 定價廿錢 税四錢

ちぬの浦浪六 奴の小万 版 郵 定價卅錢 税六錢

ちぬの浦浪六 井筒女之助 版 郵 定價卅錢 税六錢

ちぬの浦浪六 鬼奴 版 郵 定價廿五錢 税四錢

ちぬの浦浪六 破太皷 版 郵 定價廿五錢 税四錢

發行所 春陽堂
東京日本橋區通四丁目（電話五十一番）

明治廿二年九月十四日内務省許可